

令和 8 年度 シラバス



香里ヶ丘看護専門学校 看護学科

1. 教育理念

生命の尊重と個人の尊厳を基本として、科学的思考に基づく知識と技術とを統合した教育を推進し、幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人として地域社会に貢献出来る人材を育成する。

2. ディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・アドミッションポリシー

ディプロマポリシー

1. 看護職としての倫理観を持ち自己を理解し、他者を尊重することができる
2. 看護の対象がいたい像に向かうための課題を発見することができる
3. 対象が住み慣れた地域で生活できるための課題解決ができる
4. 対象にとってよりよい環境を整えられるようチームメンバーおよび多職種と協働し看護を実践する能力を養うことができる
5. 社会の動きに関心を持ちその変化に対応できるよう、自己研鑽に努める

カリキュラムポリシー

入学前よりパーソナルポートフォリオを用いて、自分がなんのために看護師になりたいのかという気持ちを明確にし、どんな看護師になりたいのかを考え、なりたい看護師像に向かうためには何をやりとげたいのかを常に考えていく。何をやりとげたいのかについて、考え続ける姿勢が主体性の根源であるとする。

入学時から卒業時まで全てのカリキュラムを通して、自己を理解し、他者を尊重し人間理解を深めるために思考におけるプロセスを確認しながら学習する科目を設定する。その中で、看護の対象である人間を統合的に理解する学習を深めるために、自己の課題を明確にし、同時に自己成長を実感し、意志ある学びができるよう、ポートフォリオとプロジェクトの手法を用いた学習を教育の主軸とする。

- ・看護は実践の科学であり、学んだ知識を現実的場面に活用できるために、現実をイメージできるようなリアリティのある場面設定をする授業や、看護実践においても何が何故必要か自ら考える授業展開（シミュレーション教育）を設定する

- ・看護実践は一回性のものであり、より対象に合った看護を実践するには、互いに成長しながら自らを振り返り、自己評価、自己研鑽できる能力を身につけるための授業展開（協同学習）を設定する

- ・入学時から卒業時まで自身の目標、キャリアを意識しながら成長できるような一貫した関わり（キャリアプラットホームの活用やあらゆる教科外活動）を設定する

- ・専門知識を活用しチームで協働できる能力をもった人材を育成する科目を設定する
- ・科目の終了ごとに自己の成長につながるような振り返りを行う

アドミッションポリシー

<知識・技能：何を理解しているか、何ができるか>誠実性

- ・高等学校卒業程度の基礎的な学力を持ち、社会的なものの見方や考え方を身につけている
- ・他者の考えを素直に聞くことができ、多様性を受け入れながらひとつひとつ深く考え抜くことができる

<思考・判断・表現：理解していること・できることをどう使うか>協調性

- ・基礎的・基本的な知識・技能を活用して、課題を解決するために考え抜くことができる
- ・自己理解をしながら他者の意見を受け入れ、協働し、創造していくことができる

<主体性をもって多様な人々と共同して学ぶ態度：どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか>看護師になりたい気持ち

- ・看護師の仕事について自分の考えをもち理解した上で社会から求められる存在であるという自覚をもっている
- ・なりたい看護師像に向かうために看護師になりたい気持ちをもち、その気持ちを大切にしている

3. 看護師として生きる力



4. 看護における諸概念

人間

- 身体的、精神的、社会的に統合された存在（全人的存在）で部分の総和ではない。総和以上の存在で有機的存在である
- 人間は社会的存在であり、環境と絶えず相互に作用しながら変化し、成長・発達する存在である人間は発達する存在として胎生期から死に至るいずれかの時期にいる
- 人間は感情、理性、思考能力を持ち、様々なニーズを充足しながら行動している
- 人間は個別的（ひとりの人格をもった存在）であると同時に、自ら責任において意思決定をする
- 人間は創造する力を持っており、現状をより良いものへと発展させる

環境

- 環境とはとりまく全てであり、自然環境、社会環境、文化環境に大きく分かれる。人間も環境の一部である
- 環境は人間と相互に作用し、人間の健康と生活に影響を与えている

健康

- 健康とは、身体的・精神的・社会的にバランスがとれている状態であり、自分の能力を最大限に発揮できる状態である
- 健康は個体要因と環境要因との相互作用により成り立ち、常に流動的に変化する
- 健康は個別的なものであり、自らの責任によって作り出されるものであると同時に社会システムとして保証されなければならない

看護

- 看護の対象は個人および家族・集団（コミュニティ・地域・社会）である
- 看護はあらゆる発達段階・健康段階に応じて生活が整えられるよう、安全・安楽・自立の視点で援助することである
- 看護は看護者と対象との関係で成立し、両者が共同で作り出すものである

- ・看護は対象の健康上の問題を判断し、個別に解決していくプロセスである
- ・看護はヒューマンズムに基づく実践の科学でありアートである
- ・看護は保健・医療・福祉チームの一員として独自の機能と役割をもつと同時に、多職種や地域の人々との調整を図る役割を担う
- ・看護は人権意識や倫理観の基に対象の権利を擁護するものである
- ・看護は安全を保障する確かな技術に支えられた看護行為を対象に提供し、医療事故を予防するために安全システムの構築に参画するものである
- ・看護は対象を主体に考え、対象のニーズに対処し、そして倫理的配慮をするものである
- ・看護は社会変動のニーズに対応するものである

教育

- ・教育の対象者は成人である
- ・教育は人間形成の基盤であり、社会で生きていくために必要なものである
- ・教育は知識の啓発、技能の教授、人間性を養い育むことである
- ・教育は学習者のもつ力を信じ、意図的な働きかけによりその潜在能力を最大限に引き出すことである
- ・教育とは学習者と教授者が相互関係のなかで、ともに成長・発達していく過程であり、「共育」である
- ・教育は問題にぶつかった時、問題を認識できる力、問題に立ち向かおうとする力、問題を解決する力、そして自己評価できる力を育むことである
- ・看護教育とは個人および家族および集団（コミュニティ・地域・社会）に対して看護を提供できる専門職業人を育成する全人教育である
- ・看護教育とは看護者として自立できるための知識・技術・ヒューマンズムの基盤作りのための援助である
- ・看護教育は、看護基礎教育と同時に卒業後継続教育を合わせた生涯教育を目指さなければならない

5. 教育方針

看護は実践の科学であり、学んだ知識を現実的場面に活用できなければならない。何か決められた答えを記憶し再生する学習だけではなく、むしろそれらの知識を生み出したり、知識を応用するような問に備える教育が必要である。そこで、現実をイメージできるようなリアリティのある場面設定をする授業や、看護実践においても何が何故必要か自ら考える授業を展開していく。

また、看護実践は一回性のものであり、より対象に合った看護を実践するには、実践後に自らを振り返り、自己評価、自己研鑽できる能力を身につけなければならない。そのために、思考におけるプロセスを自ら確認しながら学習し、その中で自己の課題を明確にし、同時に自己成長が実感できる教育を行っていく。プロジェクト学習・ポートフォリオを活用した教育方法や、入学時から卒業時まで自身の目標、キャリアを意識しながら成長できるような一貫した関わりを行っていく。

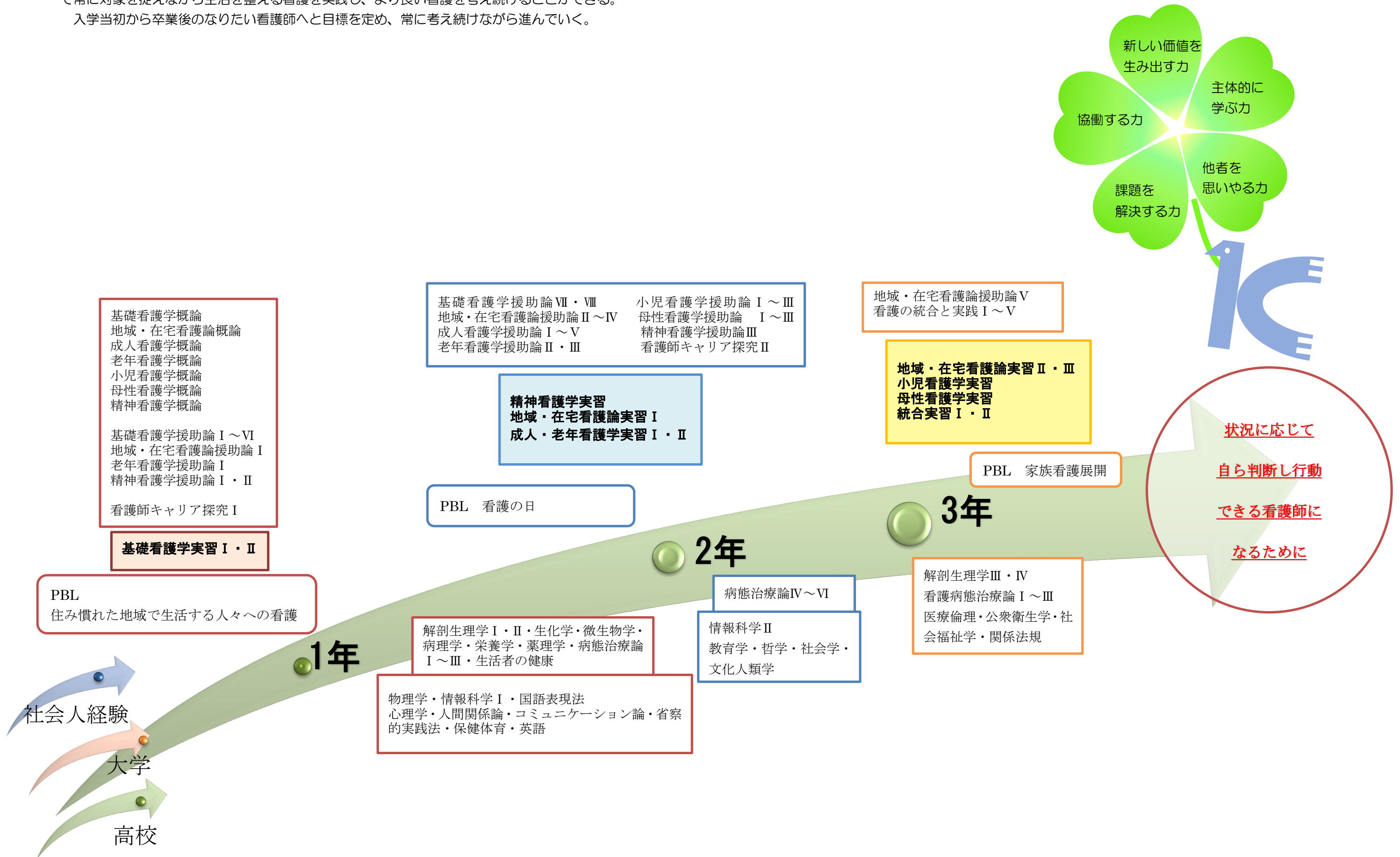
本校が従来実践してきた一人ひとりの学生に向き合う教育を続けながらも、目的意識が様々な学生集団に、自己を理解し、他者を尊重し人間理解を深めるために、一方通行の学習方法ではなく、相互作用により互いに成長するような学習方法も取り入れていく。これにより専門知識を活用しチームで共同できる能力も育成していく。

- ・一人ひとりの学生に向き合う。
- ・リアリティのある教材を活用した授業・演習の実施。
- ・自ら考える、学生相互に考えあえる、教師が学生とともに考える。
- ・学生相互に知を共有し、触発しあい、成長していく学習環境をつくる。
- ・学生が自ら考え、自己の意見を表現できる機会の提供。
- ・受動的な学びから能動的な意志ある学びを支える。
- ・学生の学びのプロセス、自己成長支援を大切に授業・評価実施。

6. 看護の道

本校は学生がなりたい看護師像へ向かい学び続けるためにプロジェクト学習を用いている。プロジェクト学習は学生の意思ある学びを大切にしている。この意志ある学びは、学生が主体的に学ぶことにつながる。そうすることで常に対象を捉えながら生活を整える看護を実践し、より良い看護を考え続けることができる。

入学当初から卒業後のなりたい看護師へと目標を定め、常に考え続けながら進んでいく。



7. 進度における到達目標

＊教育理念＊
生命の尊重と個人の尊厳を基本として、科学的思考に基づく知識と技術とを統合した教育を推進し、幅広く深い教養を身につけた人間性豊かな専門職業人として地域社会に貢献出来る人材を育成する

DP	1. 看護職としての倫理観を持ち自己を理解し、他者を尊重することができる (ガイドラインⅠ群:ヒューマンケアの基本的な能力) (主体性・多様性・協働性)	2. 看護の対象がいたい像に向かうための課題を発見することができる (ガイドラインⅡ群:根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力) (知識・技能)(思考・判断・表現)	3. 対象が住み慣れた地域で生活できるための課題解決ができる (ガイドラインⅢ群:健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復に関わる実践能力) (知識・技能)(思考・判断・表現)	4. 対象にとってよりよい環境を整えられるようチームメンバーおよび多職種と協働し看護を実践する能力を養うことができる (ガイドラインⅣ群:ケア環境とチーム体制を理解し活用する能力) (主体性・多様性・協働性)	5. 社会の動きに関心を持ちその変化に対応できるよう、自己研鑽に努める (ガイドラインⅤ群:専門職者として研鑽し続ける基本能力) (思考・判断・表現)
3 年次到達度	A 自らの責任によって看護の対象となる人との関係を構築することができる	A あらゆる発達段階・健康段階に応じて、看護の対象の健康上の問題を判断し、解決していくプロセスを対象と共に歩むことができる	A 看護の対象となる人の過去、現在、未来の生活を共に考え、対象のもてる力を最大限に発揮できるような支援ができる	A 対象を取り巻く保健・医療・福祉チームの一員として、看護の役割と責任を自覚しながら看護実践できる	A 看護の実践者として社会の動向に関心を持ち、看護の質の向上にむけて継続的に自己研鑽できる
	B 相手の価値観、生活習慣を考えながら、自己と他者を大切にした行動がとれる	B 科学的根拠をもとに安全・安楽・自立の視点で援助を考えることができる	B 看護の対象となる人の健康課題に向き合い、生活が整うような支援ができる	B 対象にとってのより良い生活にむけて環境を整えるためのチームとは何かを理解できる	B 専門職業人になるものとして自己を俯瞰し、自己評価ができる
	C 相手のことを考えながら、自身の健康を守る行動がとれる	C 科学的根拠をもとに、看護の対象の基本的ニーズ(欲求)がわかる	C 看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であり、その課題を考えることができる	C 対象を取り巻く環境から看護の専門性、多職種の役割がわかる	C 専門職業人になるものとして自己を俯瞰することができる
2 年次到達度	A 相手の価値観、生活習慣を考えながら、自己と他者を大切にした行動がとれる	A 科学的根拠をもとに安全・安楽・自立の視点で援助を考えることができる	A 看護の対象となる人の健康課題に向き合い、生活が整うような支援ができる	A 対象にとってのより良い生活にむけて環境を整えるためのチームとは何かを理解できる	A 専門職業人になるものとして自己を俯瞰し、自己評価ができる
	B 相手のことを考えながら、自身の健康を守る行動がとれる	B 科学的根拠をもとに、看護の対象の基本的ニーズ(欲求)がわかる	B 看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であり、その課題を考えることができる	B 対象を取り巻く環境から看護の専門性、多職種の役割がわかる	B 専門職業人になるものとして自己を俯瞰することができる
	C 自身の健康について、身体的・心理的・社会的バランスがとれている状態かを考えることができる	C 看護の対象の基本的ニーズ(欲求)がわかる	C 看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であり、その健康段階を考えることができる	C 看護の専門性、多職種の役割がわかる	C 周囲へ関心を向けながら、自らの課題に取り組むことができる
1 年次到達度	A 相手のことを考えながら、自身の健康を守る行動がとれる	A 科学的根拠をもとに、看護の対象の基本的ニーズ(欲求)がわかる	A 看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であり、その課題を考えることができる	A 対象を取り巻く環境から看護の専門性、多職種の役割がわかる	A 専門職業人になるものとして自己を俯瞰することができる
	B 自身の健康について、身体的・心理的・社会的バランスがとれている状態かを考えることができる	B 看護の対象の基本的ニーズ(欲求)がわかる	B 看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であり、その健康段階を考えることができる	B 看護の専門性、多職種の役割がわかる	B 周囲へ関心を向けながら、自己の課題に取り組むことができる
	C 正直さ、誠実さ、責任感、信頼感を備えている自分であるか見つめることができる	C 人間の基本的ニーズ(欲求)とは何かがわかる	C 看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であるということがわかる	C 看護の専門性とは何かがわかる	C 看護学生として、自ら行動変容しようとしている

	DP1			DP2			DP3			DP4			DP5		
	看護職としての倫理観を持ち自己を理解し、他者を尊重することができる (主体性・多様性・協働性)			看護の対象がやりたい像に向かうための課題を発見することができる (知識・技能)(思考・判断・表現)			対象が住み慣れた地域で生活できるための課題解決ができる (知識・技能)(思考・判断・表現)			対象にとってよりよい環境を整えられるようチームメンバーおよび多職種と協働し看護を実践する能力を養うことができる (主体性・多様性・協働性)			社会の動きに関心を持ちその変化に対応できるよう、自己研鑽に努める (思考・判断・表現)		
	基礎	専門基礎	専門	基礎	専門基礎	専門	基礎	専門基礎	専門	基礎	専門基礎	専門	基礎	専門基礎	専門
					看護病態治療論Ⅲ 看護病態治療論Ⅱ				統合実習Ⅰ			統合実習Ⅱ 看護の統合と実践Ⅰ			看護の統合と実践Ⅳ、Ⅴ
3年		医療倫理			看護病態治療論Ⅰ 解剖生理学Ⅲ、Ⅳ			関係法規 社会福祉学 公衆衛生学	地域・在宅看護論実習Ⅲ(通年) 小児看護学実習(通年)			看護の統合と実践Ⅲ 地域・在宅看護論実習Ⅱ(通年) 母性看護学実習(通年) 地域・在宅看護論援助論Ⅴ			看護の統合と実践Ⅱ
				教育学 情報科学Ⅱ		地域・在宅看護論援助論Ⅲ			成人・老年実習Ⅱ 母性看護学援助論Ⅲ 小児看護学援助論Ⅱ、Ⅲ 成人看護学援助論Ⅴ 老年看護学援助論Ⅲ 成人看護学援助論Ⅰ、Ⅳ 地域・在宅看護論援助論Ⅱ			地域・在宅看護論援助論Ⅳ			
2年	文化人類学 哲学	病態治療論Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ				基礎看護学援助論Ⅶ 看護師キャリア探究Ⅱ			成人・老年実習Ⅰ 精神看護学援助論Ⅲ 母性看護学援助論Ⅰ、Ⅱ 小児看護学援助論Ⅰ 老年看護学援助論Ⅱ 成人看護学援助論Ⅱ、Ⅲ 基礎看護学援助論Ⅷ			精神看護学実習 地域・在宅看護論実習Ⅰ	社会学		
	国語表現法				病態治療論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 薬理学 栄養学	基礎看護学援助論Ⅲ、Ⅴ 看護師キャリア探究Ⅰ 基礎看護学援助論Ⅵ	保健体育		基礎看護学実習Ⅱ 精神看護学援助論Ⅰ、Ⅱ 老年看護学援助論Ⅰ 母性看護学概論 小児看護学概論 成人看護学概論 老年看護学概論			地域・在宅看護論概論	英語		
1年	省察的实践法 コミュニケーション論 人間関係論 心理学 情報科学Ⅰ		基礎看護学概論	物理学	病理学 微生物学 生化学 解剖生理学Ⅰ、Ⅱ	基礎看護学援助論Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ	生活者の健康		精神看護学概論 地域・在宅看護論援助論Ⅰ						
教科外活動 入学式(1年) オリエンテーション(1年) 健康診断(全学年) 防災訓練(全学年) 看護の日(全学年) ボランティア活動(1年) 終講試験 卒業式参列(1, 2年) 卒業式(3年)															

CP	何をやりとげたいのかについて、考え続ける姿勢が主体性の根源であると考える。 入学前よりパーソナルポートフォリオを用いて、自分がなんのために看護師になりたいのかという気持ちを明確にし、どんな看護師になりたいのかを考え、なりたい看護師像に向かうためには何をやりとげたいのかを常に考えていく 入学時から卒業時まで全てのカリキュラムを通して、自己を理解し、他者を尊重し人間理解を深めるための思考におけるプロセスを確認しながら学習する科目を設定する。看護の対象である人間を統合的に理解する学習を深めるために、自己の課題を明確にし、同時に自己成長を実感し、意志ある学びができるよう、ポートフォリオとプロジェクトの手法を用いた学習を教育の主軸とする。 ・看護は実践の科学であり、学んだ知識を現実的場面に活用できるように、現実をイメージできるようなりアリティのある場面設定をする授業や、看護実践においても何が何故必要か自ら考える授業展開(シミュレーション教育)を設定する ・看護実践は一回性のものであり、より対象に合った看護を実践するには、互いに成長しながら自らを振り返り、自己評価、自己研鑽できる能力を身につけるための授業展開(協同学習)を設定する ・入学時から卒業時まで自身の目標、キャリアを意識しながら成長できるような一貫した関わり(キャリアプラットフォームの活用やあらゆる教科外活動)を設定する ・専門知識を活用しチームで協働できる能力をもった人材を育成する科目を設定する ・科目の終了ごとに自己の成長につながるような振り返りを行う		
	【教育方法】 1. 何のために、何をやり遂げたいのかについて、考え・行動し続けられる主体性の涵養 2. 一人ひとりの学生に向き合う 3. リアリティのある教材を活用した授業・演習の実施 4. 自ら考える、学生相互に考えあえる、教師が学生とともに考える 5. 学生相互に知を共有し、触発しあい、成長していく学習環境をつくる 6. 学生が自ら考え、自己の意見を表現できる機会の提供 7. 受動的な学びから能動的な意志ある学びを支える 8. 学生の学びのプロセス、自己成長支援を大切にした授業・評価実施	【学生の自己成長につながる振り返り】 1. シラバス・実習要綱を読み、看護を行う自分がイメージできるよう関連させながら授業・演習に取り組むことができた 2. 毎回の授業において、シラバス・実習要綱を読み、何のために何をやり遂げたいのか、意志をもって取り組むことができた 3. 自分の目標に対し、自分自身に向き合いながら毎回授業を受けることができた 4. 自ら考え、学生相互に考え、授業者と共に考え、授業に取り組むことができた 5. 互いに成長していける学習環境を学生・授業者と共に作りながら授業に取り組むことができた 6. 自ら考え、自己の意見を表現しながら授業に取り組むことができた 7. シラバス・実習要綱を見て準備した結果、毎回の授業においてつかんだ内容を自己評価することができた 8. なりたい看護師像に向かうための学びのプロセスを意識し、周囲の支援を受け自分の成長につなげることができた	【教員の授業評価】 1. DP を基に学生自身が看護を行うイメージができるよう授業案を作成することができた 2. 学生自身がシラバス・実習要綱を読み、何のために何をやり遂げたいのか、意志をもって取り組めるよう、毎回の授業を行うことができた 3. 学生の目標に対し、学生が向き合えるように毎回の授業を行うことができた 4. 学生が自ら考えられるよう、学生相互に考えられるよう、学生が授業者と共に授業に取り組むことができた 5. 互いに成長していける学習環境を学生と共に作りながら授業を行うことができた 6. 学生自身が考え、自己の意見を表現できる授業を行うことができた 7. 学生がシラバス・実習要綱を見て準備した結果、毎回の授業においてつかんだ内容を自己評価できるような授業を行うことができた 8. 学生がなりたい看護師像に向かうための学びのプロセスを意識し、学生が周囲の支援を受け自分の成長につながるような授業ができた

AP

<知識・技能：何を理解しているか、何が理解できるか>誠実性

・高等学校卒業程度の基礎的な学力を持ち、社会的なものの見方や考え方を身につけている

・他者の考えを素直に聞くことができ、多様性を受け入れながらひとつひとつ深く考え抜くことができる

<思考・判断・表現：理解していること・できることをどう使うか>協調性

・基礎的・基本的な知識・技能を活用して、課題を解決するために考え抜くことができる

・自己理解をしながら他者の意見を受け入れ、協働し、創造していくことができる

<主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度：どのような社会・世界とかがわりよりよい人生を送るか>看護師になりたい気持ち

・看護師の仕事について自分の考えをもち理解した上で社会から求められる存在であるという自覚をもっている

・なりたい看護師像に向かうために看護師になりたい気持ちをもち、その気持ちを大切にしている

8. カリキュラム改正にあたって

基礎分野は、人間性豊かな専門職業人としての素養を養うことをねらいとしている。様々なコミュニケーション手段やそれらを活用した能力が求められる社会の変化に対応できるよう「情報科学Ⅱ」の時間数を増数し、専門職間での協働におけるコミュニケーションや表現力の充実をはかるために「コミュニケーション論」を新設している。社会の変化に伴って強化すべき能力として新設した「省察的実践法」においては、看護職に必要な人間関係のあり方の理解、論理的思考や倫理的判断を理論に基づき学習する。看護師の基盤的な考え方を学ぶ科目であるため1年次に設定した。「コミュニケーション論」も合わせて基礎分野に位置づけることでより自己理解や他者理解が深まり、対象の自己決定を支援できる人間性豊かな専門職業人の基礎が養えると考え。その他の新設科目として「保健医療論」、「生活者の健康」を健康の保持増進と疾病の予防や地域社会で暮らす人々の理解につながると考え位置づけた。また、「教育学」「哲学」「社会学」「文化人類学」については、1年次にある基礎看護学実習を通して看護の対象とのかかわりを経験したのち、人間のあらゆる認識や人間形成、社会との関係そして異文化への理解への関心と視野を広げることをねらいとした。

専門基礎分野は、看護の実践に必要な臨床判断を正確に行うための基礎的能力の基盤となる。「人体の構造と機能」「疾病の成り立ちと回復の促進」「健康支援と社会保障制度」で構成する。「解剖生理学Ⅲ・Ⅳ」では、1年次の「解剖生理学Ⅰ・Ⅱ」を土台に、看護実践に関連づけた横断的な講義内容とした。よって適切な臨床判断の確立と実践に近い学びができる3年次に設定している。「看護病態治療論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は専門基礎分野と専門分野の往還を3年次に行うことで臨床判断の基礎的能力がさらに強化され、なりたい看護師像へ向かう確かな力となると考える。加えて「公衆衛生学」「社会福祉学」「関係法規」「医療倫理」においても3年次とした。これらの科目は疾病と共に住み慣れた地域で暮らす対象やその家族を倫理的視点で支援する具体的な知識となるため、1年次の専門分野における各看護学概論においても学習している。3年次の統合実習前に科目設定することで地域社会に必要とされる具体的な看護の提案としてケア環境やチームとしての連携および協働への理解を深めることとする。

専門分野は、基礎分野・専門基礎分野とともに分野間を往還しながら看護を探究し続ける位置づけとなる。「基礎看護学」は、看護の主要概念や人の理解、倫理観など看護師の基盤的な考え方を学ぶ。また多様な人々と主体性をもって協働する力も必要であるため引き続きプロジェクト学習により学生の主体的な学習を支援する。また看護実践の基盤となる看護技術、および看護における問題解決の方法、対象の状態に応じた看護について学習する。対象理解に必要なヘルスアセスメント、フィジカルアセスメント技術や専門分野、専門基礎分野の知識を土台に臨床判断能力の基礎を具体的に授業や演習に位置づける。「看護師キャリア探究Ⅰ及びⅡ」を軸に、各看護学（「地域・在宅看護論」「成人看護学」「老年看護学」「小児看護学」「母性看護学」「精神看護学」「看護の統合と実践」）において、「臨床判断能力の実際」を設定した。これにより講義・演習で臨床判断の基礎を繰り返し学んでいく。そのため常に対象を捉えながらの各領域における生活を整える生活支援技術、安全を守る診療の補助技術が学内で実施でき各対象特性別看護はもとより、より臨床に即した演習内容（技術習得）となる。技術習得は、学内で実施すべきものに関しては観察からアセスメントが前提となるため、反転授業ができるように事前学習を精選し、探求型学習とし科学的思考に基づく知識と技術を統合した学びを支援できるように配列した。

各看護学では各発達段階や対象特性を理解し、その多様なニーズや特徴をふまえて、対象に応じた看護が実践できる基礎的能力を養うことをねらいとしている。「精神看護学」「地域・在宅看護論」は全てのライフサイクルにおける対象への健康とその対象の心の健康を学ぶことから、各看護学の基礎として位置づけた。

「精神看護学」では、障害を抱え、コントロールしながら様々なサポートを受け生活をされている対象の理解を深めていく。そのために、病態の把握、精神医療を取り巻く歴史、地域包括ケアシステム、法律を学び、対象の強みに目を向け、対象にとってその人らしくより良い生活について考え続ける。

「地域・在宅看護論」では、地域に住むすべての人が、疾病や障害があっても、生活の質を維持し、可能な限り住み慣れた地域で、その人らしい暮らしを続けていけるように、地域包括ケアシステムを基盤として学び

を深めていく。社会の動向を反映し、現在だけではなく将来も見据え、地域に根差した暮らしの中での看護の考え方を軸におく。多職種連携・協働を学び、さらには求められる看護師の複合的・総合的な判断力や問題解決能力を通して、地域包括ケアシステムの一翼を担う看護師の役割について考えていく。

各領域とも、専門基礎分野を受けて、看護実践能力の向上と臨床判断能力の基礎を身につけるため、熟慮された看護過程の展開や単元を横断した演習を継続しつつ、その時その場の看護を実践し省察する演習へと積み上げていく。これらの構成は講義・演習において、学生のプロジェクト学習の経験が活かされ、主体的に学べるような授業展開となり、臨地実習での看護実践の基礎となる。

臨地実習では、地域社会への貢献を目指し看護師として医療施設や地域社会の中で健康上の課題を抱えた人々やその家族の対象特性に応じた看護実践をプロジェクト学習、ポートフォリオにより主体的に学ぶ。臨地実習でなければ学べない臨床判断の実際や生活を支援するための多職種間の協働など地域社会で求められる看護師に必要な能力を1年時から身につけられるよう臨床での学びを学内で再考できるような配列とした。

まず「基礎看護学実習Ⅰ」では科学的根拠・科学的思考をもとに健康状態を理解することを目指す。「基礎看護学実習Ⅱ」では健康段階別看護の実践を行う。

「地域・在宅看護論実習Ⅰ」では介護老人保健施設・介護老人福祉施設での実習を行う。また並行して「精神看護学実習」「成人・老年看護学実習Ⅰ」を行う。「精神看護学実習」では通所施設での実習を増やし精神に障害を抱えながら地域社会の中で暮らす人々への支援の実際から多職種連携・協働の在り方を学ぶことにとどまらず看護師の基盤となる考え方を学ぶ。「成人・老年看護学実習Ⅰ」では人のライフサイクルにおける発達的特徴を捉え様々な健康障害を持つ対象への看護を実践する。「成人・老年看護学実習Ⅱ」では急性期（または周術期）にある対象の生命維持と苦痛緩和への援助を実践する。

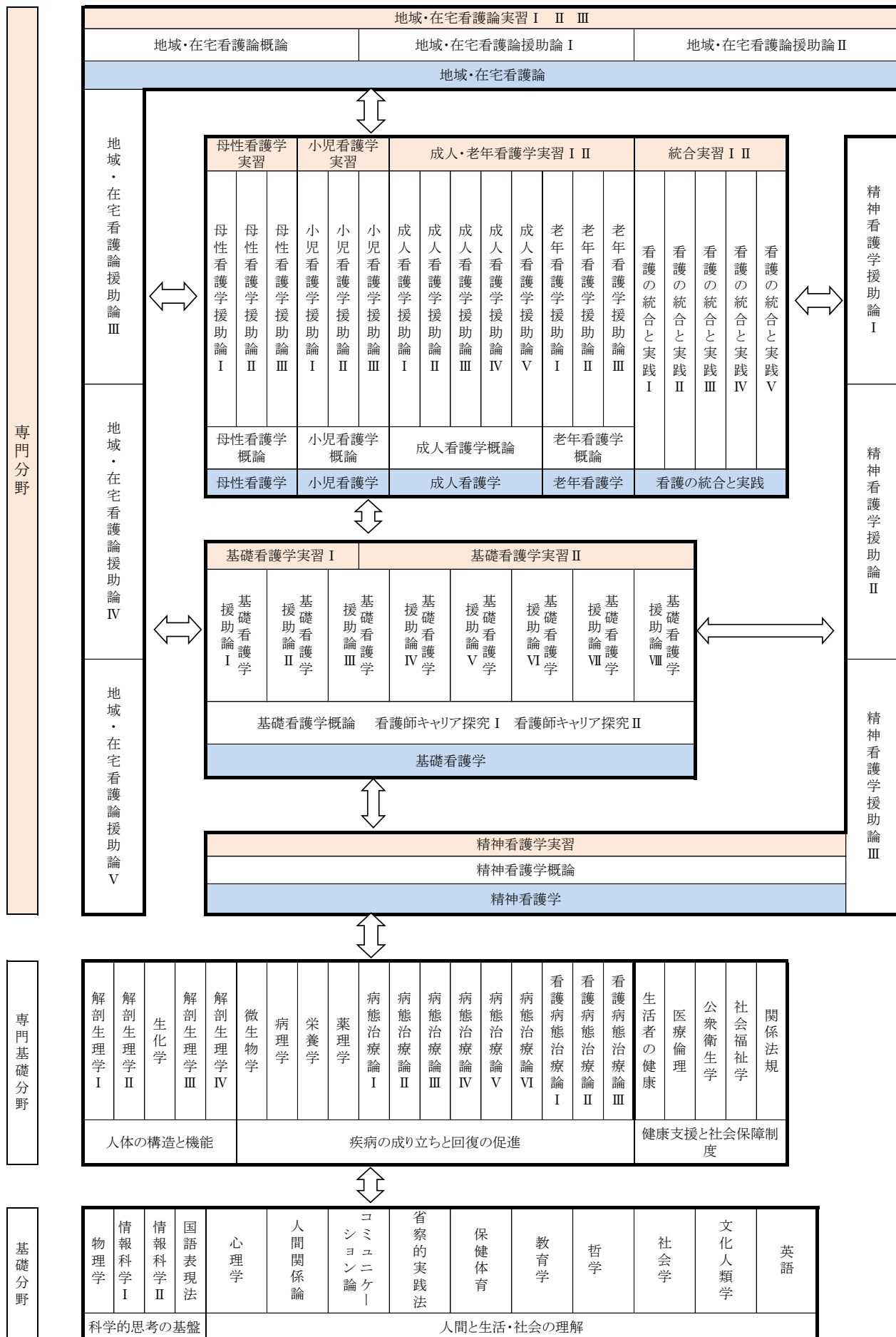
「母性看護学実習」でも医療施設以外に地域子育て支援センターでの実習を継続しあらゆる背景をもつ対象の健康増進や維持、地域生活を支える支援について学ぶ機会とした。

「小児看護学実習」においても医療施設以外に保育園で実習を行い、小児各期の成長・発達段階の促進への実際と支援について学ぶ機会とする。

「地域・在宅看護論実習Ⅱ、Ⅲ」では、住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、保健・医療・福祉を繋ぐ各地域の施設を実習場とし、地域包括ケアシステムを基盤とする地域の中で活躍する看護師の役割について学ぶ機会とした。

「統合実習Ⅰ」では看護チームの一員としての実践を経験し、「統合実習Ⅱ」においては、複数患者を受け持ちその時、その場の優先順位の決定や臨床判断を決定するプロセスの実際を体験する。

9.カリキュラム構造図



ディプロマポリシー	学年到達目標	自分の行動目標	自己評価 (夏休み前)	自己評価 (冬休み前)	自己評価 (春休み前)	身につく力
1. 看護職としての倫理観をもち自己を理解し、他者を尊重することができる	相手のことを考えながら、自身の健康を守る行動がとれる					新しい価値を生み出す力 0100%
2. 看護の対象が ありたい像に向かうための課題を発見することができる	科学的根拠をもとに、看護の対象の基本的ニード（欲求）がわかる					主体的に学ぶ力 0100%
3 対象が住み慣れた地域で生活できるための課題解決ができる	看護の諸概念における対象は個人、家族、集団であり、その課題を考えることができる					他者を思いやる力 0100%
4. 対象にとってよりよい環境を整えられるようチームメンバーおよび多職種と協働し看護を実践する能力を養うことができる	対象を取り巻く環境から看護の専門性、多職種の役割がわかる					課題を解決する力 0100%
5. 社会の動きに関心を持ちその変化に対応できるよう、自己研鑽に努める	専門職業人になるものとして自己を俯瞰することができる					協働する力 0100%

ディプロマポリシー	学年到達目標	自分の行動目標	自己評価 (夏休み前)	自己評価 (冬休み前)	自己評価 (春休み前)	身につく力
1. 看護職としての倫理観をもち自己を理解し、他者を尊重することができる	相手の価値観、生活習慣を考えながら、自己と他者を大切にした行動がとれる					新しい価値を生み出す力 0100%
2. 看護の対象が ありたい像に向かうための課題を発見することができる	科学的根拠をもとに安全・安楽・自立の視点で援助を考えることができる					主体的に学ぶ力 0100%
3. 対象が住み慣れた地域で生活できるための課題解決ができる	看護の対象となる人の健康課題に向き合い、生活が整うような支援ができる					他者を思いやる力 0100%
4. 対象にとってよりよい環境を整えられるようチームメンバーおよび多職種と協働し看護を実践する能力を養うことができる	対象にとってのより良い生活にむけて環境を整えるためのチームとは何かを理解できる					課題を解決する力 0100%
5. 社会の動きに関心を持ちその変化に対応できるよう、自己研鑽に努める	専門職業人になるものとして自己を俯瞰し、自己評価ができる					協働する力 0100%

ディプロマポリシー	学年到達目標	自分の行動目標	自己評価 (夏休み前)	自己評価 (冬休み前)	自己評価 (卒業前)	身につく力
1. 看護職としての倫理観をもち自己を理解し、他者を尊重することができる	自らの責任によって看護の対象となる人との関係を構築することができる					新しい価値を生み出す力 0100%
2. 看護の対象がいたい像に向かうための課題を発見することができる	あらゆる発達段階・健康段階に応じて、看護の対象の健康上の問題を判断し、解決していくプロセスを対象と共に歩むことができる					主体的に学ぶ力 0100%
3. 対象が住み慣れた地域で生活できるための課題解決ができる	看護の対象となる人の過去、現在、未来の生活を共に考え、対象のもてる力を最大限に発揮できるような支援ができる					他者を思いやる力 0100%
4. 対象にとってよりよい環境を整えられるようチームメンバーおよび多職種と協働し看護を実践する能力を養うことができる	対象を取り巻く保健・医療・福祉チームの一員として、看護の役割と責任を自覚しながら看護実践できる					課題を解決する力 0100%
5. 社会の動きに関心をもちその変化に対応できるよう、自己研鑽に努める	看護の実践者として社会の動向に関心をもち、看護の質の向上にむけて継続的に自己研鑽できる					協働する力 0100%

11. 卒業時に身につく力とそれぞれの能力要素

卒業時に身につく力	能力	能力要素	定義	意味	行動指標
①新しい価値を生み出す力	前に踏み出す力 (アクション)	実行力	目標を設定し、確実に行動する力	対象の個別状況に即して目標や計画を変化させ、事故・感染防止に留意しながら確実に看護を実践し、問題が解決するまで取り組むことができる力	①情報収集・分析から対象を中心にといった視点での計画を考えることができる ②対象に対して実施した内容を評価し、次に生かすことができる
	考え抜く力 (シンキング)	創造力	新しい価値を生み出す力	対象の個別状況の変化や看護実践の成果を踏まえて、看護実践をより効果的・発展的に展開するために感性を生かした新たな介入方法を提案することができる力	①複数のもの（もの・考え方・技術）を組み合わせることで自己の学習を工夫できる ②従来の常識や発想を転換し自己の学習方法を工夫することができる
②主体的に学ぶ力	前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力	看護の知識や能力を向上させるため、自らの意志で積極的に学習を進め、実習に取り組むことができる力	①進んで学習を深める ②自己の学習を振り返り、次に生かすことができる ③自己の成長を確認することができる
	考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し、目的や課題を明らかにし準備する力	対象の身体面、心理・社会的側面をふまえて現状を分析することができ、対象に必要な健康上の問題について明らかにすることができる力	①多側面から情報を集めて分析することができる ②集めた情報が正しいものであるか考えることができる
③他者を思いやる力	チームで働く力 (チームワーク)	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	自らの考えに囚われることなく、意見の違いや立場の違いを理解し、冷静かつ円滑な議論を通して最終的には決まった方向に、最善の結果が出るように努力することができる力	①相手の考えを、相手の気持ちになって理解することができる ②意見やアドバイスを受け止め、納得した上で自分の考えた内容を変更していくことができる
		傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	相手の発言を促す質問をしたり、視線を合わせて相槌を打つなど、自らの表情や聴く姿勢を配慮して話しやすい雰囲気を作り、相手の意見や考えを最大限引き出しながら丁寧に聴くことができる力	①他者の意見や助言を最後までしっかりと聴くことができる ②内容の確認や質問などを行いながら、相手の意見を正確に理解することができる
		状況把握力	自分と周囲の人々や物事と	多方面の事実状況から、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解し、全体的な視点で自分の果たすべき役	①自分にできること、他人ができることを的確に判断して行動することができる

			の関係性を理解する力	割を把握し、他職種との連携を視野に入れて、チームにとって最適な行動を実行できる力	②周囲の状況（人間関係・忙しさ）に配慮して、良い方向へ向かうように行動することができる
	倫理	倫理性	絶えず相手の立場に立って、対象に不利益や苦痛が生じないように意思決定や対象の権利を遵守し、自己批判を繰り返しながら行動することができる力		①相手に合わせた適切な言葉使いや内容の会話ができる ②自分や相手のプライバシーを守ることができる ③知り得た情報を外部に漏らさない
④課題を解決する力	考え抜く力（シンキング）	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	対象の健康上の問題を解決するために、その個別状況に即した具体的・実践的な解決の方向を明らかにすることができる力	①解決の方法を見出すためにじっくりと時間をかけることができる ②解決の方法についてもう一度集めた情報や分析内容に戻って考えることができる
	チームで働く力（チームワーク）	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	ストレスの発生源になる事態が生じたとき、その原因を自ら突きとめて取り除いたり、適切な人に支援を求めるなどにより、葛藤を克服することができる力/ストレスを成長の機会と前向きにとらえることができる力	①ストレス状態にある時、適切にストレスが発散できる ②ストレスの原因を見つけて、自力あるいは他人の力を借りることで取り除くことができる
⑤協働する力	前に踏み出す力（アクション）	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	看護を必要とする対象に、協働して健康問題に取り組むよう声をかけることができ、自らの実践に加えて、指導者・教員・グループメンバーなど周囲を巻き込んで学習を進めることができる力	①自己の学習に対して、教員（指導者）へ積極的に助言を受ける ②グループワークを通して、他学生との役割分担を提案する ③他者の意見に耳を傾け、自己の意見も述べることができる
	チームで働く力（チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	指導者・教員の指導場面やグループメンバーとの話し合いの場面で、自分の意見を論理的に整理し、相手が理解しやすいようにその反応を見ながらスピードや言葉使いに配慮し筋道を立てて伝えることができる力	①グループワークで発言することができる ②事例や客観的なデータなどを用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる ③相手が何を求めているか考えながら伝えることができる ④自分の意見をまとめてから発言することができる
		規律性	社会のルールや人との約束を守る力	社会人として、様々な場面での良識やマナーの必要性を理解し、ルールを守り、自らの行動だけでなく、周囲への影響を考えて責任ある模範となる行動をとることができる力	①挨拶ができる ②時間を守ることができる ③ルールやマナー（身だしなみ・言葉使い）を守ることができる ④相手に迷惑をかけたとき、適切な行動をとることができる

引用・参考文献：看護職としての社会人基礎力の育て方 日本看護協会出版会

12.看護師教育の技術項目と卒業時の到達度

■卒業時の到達度レベル　＜演習＞　Ⅰ：モデル人形もしくは学生間で単独で実施できる　Ⅱ：モデル人形もしくは学生間で指導の下で実施できる

＜実習＞　Ⅰ：単独で実施できる　Ⅱ：指導の下で実施できる　Ⅲ：実施が困難な場合は見学する

2023年改訂

項目	技術の種類		卒業時の到達度		基礎看護学		地域・在宅看護論		成人看護学	老年看護学	成人老年実習	小児看護学		母性看護学		精神看護学		看護の統合と実践	
			演習	実習	演習	実習	演習	実習	演習	演習	実習	演習	実習	演習	実習	演習	実習	演習	実習
1．環境調整技術	1	快適な療養環境の整備	Ⅰ	Ⅰ	○	●	○		△	○	●	○	●	○	●		●		●
	2	臥床患者のリネン交換	Ⅰ	Ⅱ	○	△					○								△
2．食事の援助技術	3	食事介助(嚥下障害のある患者を除く)	Ⅰ	Ⅰ	○	△	○				○		●						○
	4	食事指導	Ⅱ	Ⅱ			△		△		△	○	○		○				○
	5	経管栄養法による流動食の注入	Ⅰ	Ⅱ			○											○	△
	6	経鼻胃チューブの挿入	Ⅰ	Ⅲ			○												△
3．排泄援助技術	7	排泄援助(床上、ポータブルトイレ、オムツ等)	Ⅰ	Ⅱ	○	△		△	△	○	○	○	△						○
	8	膀胱留置カテーテルの管理	Ⅰ	Ⅲ			○	△			△				△				○
	9	導尿又は膀胱留置カテーテルの挿入	Ⅱ	Ⅲ							△							○	△
	10	浣腸	Ⅰ	Ⅲ				△			△		△				△	○	△
	11	摘便	Ⅰ	Ⅲ			○	△			△								△
	12	ストーマ管理	Ⅱ	Ⅲ			○	△			△								△
4．活動・休息援助技術	13	車椅子での移送	Ⅰ	Ⅰ	○	△			△		○		○		△		△		○
	14	歩行・移動介助	Ⅰ	Ⅰ	○	△			△		○				△		○		○
	15	移乗介助	Ⅰ	Ⅱ	○	△			△		○								○
	16	体位変換・保持	Ⅰ	Ⅰ	○	△	○				○								○
	17	自動運動・他動運動の援助	Ⅰ	Ⅱ					○		△								○
	18	ストレッチャー移送	Ⅰ	Ⅱ	○						△								△
5．清潔・衣生活援助技術	19	足浴・手浴	Ⅰ	Ⅰ	○	△				○	△								○
	20	整容	Ⅰ	Ⅰ	○	●					●		○		○		●		●
	21	点滴・ドレーン等を留置していない患者の寝衣交換	Ⅰ	Ⅰ	○	△					○	○	●						●
	22	入浴・シャワー浴の介助	Ⅰ	Ⅱ		△	○				○		●						○
	23	陰部の保清	Ⅰ	Ⅱ						○	○		○						○
	24	清拭	Ⅰ	Ⅱ	○	△	○				○	○	●						●
	25	洗髪	Ⅰ	Ⅱ	○	△	○				○								○
	26	口腔ケア	Ⅰ	Ⅱ		△	○			○	○	○	●						○
	27	点滴・ドレーン等を留置している患者の寝衣交換	Ⅰ	Ⅱ							○	○	●						△
	28	新生児の沐浴・清拭	Ⅰ	Ⅲ										○	●				
6．呼吸・循環を整える技術	29	体温調節の援助	Ⅰ	Ⅰ		△			○		△		△						○
	30	酸素吸入療法の実施	Ⅰ	Ⅱ					○		●	○	○						△
	31	ネブライザーを用いた気道内加湿	Ⅰ	Ⅱ								○	○						△
	32	口腔内・鼻腔内吸引	Ⅱ	Ⅲ			○					○	○						△
	33	気管内吸引	Ⅱ	Ⅲ			○		△									○	△
	34	体位ドレナージ	Ⅰ	Ⅲ							△		○						△
7．創傷管理技術	35	褥瘡予防ケア	Ⅱ	Ⅱ	△		○			○	○								△
	36	創傷処置(創洗浄、創保護、包帯法)	Ⅱ	Ⅱ					△		△							○	△
	37	ドレーン類の挿入部の処置	Ⅱ	Ⅲ					○		△								△
8．与薬の技術	38	経口薬(パッカル錠・内服薬・舌下錠)の投与	Ⅱ	Ⅱ	○						△	○	△				△		△
	39	経皮・外用薬の投与	Ⅰ	Ⅱ	○						△	○	△				△		△
	40	坐薬の投与	Ⅱ	Ⅱ							△	○							△
	41	皮下注射	Ⅱ	Ⅲ							△							○	△
	42	筋肉内注射	Ⅱ	Ⅲ	○						△						△		△
	43	静脈確保・点滴静脈内注射	Ⅱ	Ⅲ							△		○					○	△
	44	点滴静脈内注射の管理	Ⅱ	Ⅱ					△		○	○						○	○
	45	薬剤等の管理(毒薬、劇薬、麻薬、血液製剤、抗悪性腫瘍薬を含む)	Ⅱ	Ⅲ	○		△											△	△
	46	輸血の管理	Ⅱ	Ⅲ														○	△
9．救命救急処置技術	47	緊急時の応援要請	Ⅰ	Ⅰ				△	○		△		△		△		△		△
	48	一次救命処置(Basic Life Support:BLS)	Ⅰ	Ⅰ				△	○		△		△		△		△		△
	49	止血法の実施	Ⅰ	Ⅲ				△			△		△		△		△	○	△
10．症状・生体機能管理技術	50	バイタルサインの測定	Ⅰ	Ⅰ	○	●		●			●	○	●		●				●
	51	身体計測	Ⅰ	Ⅰ	○							○	△						△
	52	フィジカルアセスメント	Ⅰ	Ⅱ	○	●	○	●	○	○	●	○	●				●		●
	53	検体(尿、血液等)の取扱い	Ⅰ	Ⅱ	○							○							△
	54	簡易血糖測定	Ⅱ	Ⅱ					△		△							○	△
	55	静脈血採血	Ⅱ	Ⅲ	○						△		○						△
	56	検査の介助	Ⅰ	Ⅱ	○						△	○	△						△

12.看護師教育の技術項目と卒業時の到達度

■卒業時の到達度レベル　＜演習＞　Ⅰ:モデル人形もしくは学生間で単独で実施できる　Ⅱ:モデル人形もしくは学生間で指導の下で実施できる
＜実習＞　Ⅰ:単独で実施できる　Ⅱ:指導の下で実施できる　Ⅲ:実施が困難な場合は見学する

項目	技術の種類		卒業時の到達度		基礎看護学		地域・在宅看護論		成人看護学	老年看護学	成人老年実習	小児看護学		母性看護学		精神看護学		統合分野	
			演習	実習	演習	実習	演習	実習	演習	演習	実習	演習	実習	演習	実習	演習	実習	演習	実習
1 1．感染予防技術	57	スタンダード・プリコーション(標準予防策)に基づく手洗い	Ⅰ	Ⅰ	○	●	○	●	○	○	●	○	●	○	●		●	○	●
	58	必要な防護用具(手袋、ゴーグル、ガウン等)の選択・着脱	Ⅰ	Ⅰ	○	△	○	△	○	○	△		△	○	△		△	○	△
	59	使用した器具の感染防止の取扱い	Ⅰ	Ⅱ	○	△		△		○	△		△		△		△		△
	60	感染性廃棄物の取扱い	Ⅰ	Ⅱ	○	△	○	△	○	○	△		△		△		△	○	△
	61	無菌操作	Ⅰ	Ⅱ	○	△					△				△				△
	62	針刺し事故防止・事故後の対応	Ⅰ	Ⅱ	○	△		△			△		△		△		△	○	△
1 2．安全管理の技術	63	インシデント・アクシデント発生時の速やかな報告	Ⅰ	Ⅰ	○	△	○	△	○	○	△	○	△	○	△		△	○	○
	64	患者の誤認防止策の実施	Ⅰ	Ⅰ	○	●	○	●	○	○	●	○	●	○	●		●	○	●
	65	安全な療養環境の整備(転倒、転落、外傷予防)	Ⅰ	Ⅱ	○	●	○	●	○	○	●	○	●	○	●		●	○	●
	66	放射線の被ばく防止策の実施	Ⅰ	Ⅰ		△					△		△				△	○	△
	67	人体へのリスクの大きい薬剤のばく露予防策の実施	Ⅱ	Ⅲ		△					△		△					○	△
	68	医療機器(輸液ポンプ、シリンジポンプ、心電図モニター、酸素ボンベ、人工呼吸器等)の操作・管理	Ⅱ	Ⅲ							○							○	△
1 3．安楽確保の技術	69	安楽な体位の調整	Ⅰ	Ⅱ	○	△		△			○		△		●		△		○
	70	安楽の促進・苦痛の緩和のためのケア	Ⅰ	Ⅱ	△	△		△	△		○		○		○		●		○
	71	精神的安寧を保つためのケア	Ⅰ	Ⅱ		△		○	△		○		○		○		●		○

演習　○:必ず経験できる技術　△:経験できる可能性のある技術
実習　●:確実に経験できる技術　○:50%以上の確率で経験できる技術　△:経験できる可能性が50%未満の技術

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
物理学	1	15	1年		15	100%	湯川 巧
学習目的・目標							
医療現場では、ファイバースコープ、超音波診断、心電図、脳波計など、物理を応用したものが多くあることを理解する。注射、点滴など医療における日常的なことに加えて、人間の体自身、骨格や筋力は力学、血流や血圧は流体、脳波は電気といったように医学は物理的に考えることができることから物理が重要であることを学ぶ。また、物理を学ぶことを通して基礎的な計算能力を身につけることを目指す。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	物理学とは 物理学の発展の歴史 医療現場における物理学 ベクトルと力と速度	講義	7	電磁気学、光、放射線 電荷、電流、電圧、電気抵抗、 電気ショックとアース	講義		
2～4	力と運動 ニュートンの3法則、抗力と摩擦力 トルクとてこの原理、ボディメカニクス 仕事とエネルギー	講義	8	光、放射線 レンズ(眼) 放射線の種類・本質と医療における利用	講義		
5	熱 温度、熱量、比熱 物質の三態	講義					
6	流体 浮力と病人・赤子の入浴 流体の3つの原理と医療器具への応用	講義					
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 物理学 医学書院							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
情報科学 I	1	30	1年		30	100%	松本 寿一
学習目的・目標							
情報化社会においては、情報の扱い方によって、自身の行動が変わったり責任に大きな影響を及ぼすことがある。そのため、情報と科学に関する知識を獲得し、医療に役立つ技術を的確に選択して行使できる力の獲得を目指す。また、情報に関わる法律や倫理について考える機会に触れ、情報を安全かつ安心して使えるようになることも狙							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	看護と情報に関する倫理（倫理面を主） （教科書第2章，6章）	講義	6	PCの管理方法を理解する	演習		
2	情報と科学の関係を知る （教科書第1章）	講義	7	文書作成1（Word，ワープロ打ちの基礎） （教科書第13章）	演習		
3	計算機の基礎を理解する （教科書第9章）	講義	8	文書作成2（Word，書式の適用）	演習		
4	ネットワークの基礎を理解する （教科書第1章，2章，9章）	講義	9	文書作成3（Word，書類のまとめ方）	演習		
5	情報科学と医療・法律の関係を知る （教科書第4章，5章，8章）	講義	10	プログラミングの基礎，小テスト	演習		
			11	表計算1（Excel，入力の基礎） （教科書第12章）	演習		
			12	表計算2（Excel，関数の基礎）	演習		
			13	表計算3（Excel，グラフで表現する）	演習		
			14	発表（PowerPoint，スライドの基礎） （教科書第14章）	演習		
			15	文書作成4（Word，まとめと課題）	演習		
技術到達度							
情報を科学的な視点で取捨選択できるようになること。 PCで基礎的な操作と文書作成，計算，プレゼンテーションができるようになること。							
評価方法							
10回目の小テストおよび15回目の課題による							
教科書・参考書など							
看護情報学 医学書院 プリントの配布							
備考・履修条件など：							
第1回～5回は，座学 第6回からは，USBフラッシュメモリ（2GBもあれば十分）を持参して情報処理室へ							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
情報科学Ⅱ	1	30	2年		30	100%	松本 寿一
学習目的・目標							
情報を処理する方法のひとつに、表計算ソフトウェアと統計を利用するものがある。表計算ソフトウェアを使えば、大量のデータから特定の情報を抽出したり、データを詳細に分析したりした結果、新しい情報を得ることができるようになる。そのために必要な技術の使い方を学び、実践できる力を育成する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	データ入力の基礎(基本操作の確認)	演習	9	リスト処理	演習		
2	計算式と関数1(基本的な関数の理解)	演習	10	統計解析1(用語や考え方を理解する) (教科書第12章)	演習		
3	計算式と関数2(関数の応用)	演習	11	統計解析2(正規分布と推定) (教科書第12章)	演習		
4	データの視覚化1(グラフを作る基礎)	演習	12	統計解析3(検定) (教科書第12章)	演習		
5	データの視覚化2(様々な表現方法)	演習	13	統計解析4(相関と回帰) (教科書第12章)	演習		
6	プレゼンテーション1(情報収集, 作成) (教科書第14章)	演習	14	総合演習	演習		
7	プレゼンテーション2(即興プレゼン大会)	演習	15	課題2(主に統計解析)とまとめ	演習		
8	課題1(主に計算処理とグラフ)	演習					
技術到達度							
表計算ソフトウェアを使って、データをグラフ化できること。基礎的な統計解析ができること。							
評価方法							
第8回目と15回目の課題による							
教科書・参考書など							
看護情報学 医学書院 プリントの配布							
備考・履修条件など:							
第1回から、USBフラッシュメモリ（2GBもあれば十分）を持参して情報処理室へ							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
国語表現法	1	30	1年		30	100%	西川真理子
学習目的・目標							
「書く」ことを通じて、『考える力』とその「考え」を相手に伝えるための『論理的思考力』や『表現力』を養うことが目的であり、最終的に「意見レポート」が書けるようになることが目標である。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	全体の説明		講義	9	意見レポートを書く① I グループワーク		講義
2	スピーチ原稿を書く		講義	10	意見レポートを書く① II型		講義
3	レポートの特徴 I : 3 部構成		講義	11	意見レポートを書く① III執筆		講義
4	レポートの特徴 II : 主張と根拠		講義	12	意見レポートを書く② I グループワーク		講義
5	レポートの特徴 III : 表現		講義	13	意見レポートを書く② II型		講義
6	自己PR文を書く I グループワーク		講義	14	意見レポートを書く② III執筆		講義
7	自己PR文を書く II型		講義	15	まとめ		講義
8	自己PR文を書く III執筆		講義	※毎回文章を書き、添削指導により日本語表現力を養う。 グループワーク(協同学習)などを通じて、学びを深め、 学習意欲を高め、自信をつけていく。			
技術到達度							
評価方法 レポート							
教科書・参考書など 毎回ワークシートを配布する							
備考・履修条件など: 欠席した場合も課題を必ずやり、次の授業時に持ってくること。							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価割合	担当者
心理学	1	30	1年		30	100%	木戸里香
学習目的・目標							
心理学において発達心理学、教育心理学、臨床心理学を中心に基礎理論に触れながら、「自分」と「他者」との関係性を考える機会とし、自己理解をもとにした他者理解を目標とする。講義や演習における心理的援助の体験を通して、看護の現場において多面的な視点で人間理解を深められるように学ぶ。これらの心理学的知識を踏まえ対象者の心に寄り添う対応や支援ができるようにする。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	心理学の意義 自己理解・他者理解と対応 感覚と知覚	講義 演習	9	社会と集団 社会的認知 集団とリーダーシップ	講義 演習		
2	記憶 記憶のメカニズム 記憶の分類と機能	講義 演習	10 11	発達 発達の定義 乳幼児・児童の発達 青年・成人・高齢者の発達	講義 演習		
3	思考・言語・知能 思考・知能の定義 言語とコミュニケーション	講義 演習	12 13	心理臨床 心の適応と不適応 心の問題と心理学の役割 心療療法	講義 演習		
4	学習 学習理論 社会的学習と効果的な学習方法	講義 演習	14 15	医療・看護と心理 医療職と対人援助 患者の心理 看護職の心理と心のケア	講義 演習		
5	感情と動機づけ 学習理論 学習指導の意義・原理	講義 演習					
6	性格とパーソナリティ	講義					
7	性格の定義	演習					
8	性格理論 性格検査法						
技術到達度							
評価方法							
定期試験60%、授業中のワーク提出30%、授業への取り組み姿勢10% 上記を総合して評価する。							
教科書・参考書など							
心理学 医学書院 プリントを配布する。							
備考・履修条件など：							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
人間関係論	1	30	1年		30	100%	岡本留美
学習目的・目標							
看護ケアは、常に人と人との関係性が基盤になります。人との関係性を築くには、看護ケアの知識を身に付けることはもちろん、それ以外の知識まで調べる姿勢、その知識を生かして問題を発見・解決する手法、他者との協調的態度など、より積極的・主体的で多様な学びが求められます。こういった学びの基礎、つまり、看護師という専門職に求められる素養を養成することが、本授業の目的です。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	人間関係の中の自己と他者	講義・演習	11	患者を支える人間関係	講義・演習		
2	対人関係と役割	講義・演習	12	家族を含めた人間関係	講義・演習		
3	態度と対人行動	講義・演習	13	地域をつくる人間関係	講義・演習		
4	集団と個人	講義・演習	14	専門職として期待される人間関係	講義・演習		
5～6	コミュニケーション	講義・演習	15	まとめ	講義・演習		
7	カウンセリングと心理療法	講義・演習					
8～9	アサーション	講義・演習					
10	保健医療チームと看護師の役割	講義・演習					
技術到達度							
評価方法							
レポート（50％）・提出物（30％）・グループワーク等への取り組み（20％）により総合的に評価します。							
教科書・参考書など							
人間関係論 医学書院							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
コミュニケーション論	1	15	1年		15	100%	岡本留美
学習目的・目標							
コミュニケーションの基礎を学び、看護技術としてのコミュニケーションが提供できる							
①コミュニケーションの幅の広さや種類を理解する							
②インターネットを介したコミュニケーションについて理解をする							
③異なる文化を持った人とのコミュニケーションの特徴を理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	【コミュニケーションとは何か】 コミュニケーションの基礎的概念を理解しよう	講義・演習	6	【インターネットを用いたコミュニケーションについて知ろう】 インターネットを介したコミュニケーションで何だろう	講義・演習		
2・3	【コミュニケーションの種類を知ろう】 言語・非言語を用いた対人コミュニケーションの基本を理解しよう	講義・演習	7・8	【看護師が技術としてコミュニケーションを提供するとはどういうことか】	GW		
4	【コミュニケーションの相互作用について知ろう】	講義・演習					
5	【コミュニケーションは対象が違うと方法も変わることを理解しよう】 異なる文化を持つ人とどうやってコミュニケーションをとるのだろう	講義・演習					
技術到達度							
評価方法							
レポート(50%)・提出物(30%)・グループワーク等への取り組み(20%)により総合的に評価します。							
教科書・参考書など							
基礎看護技術 I 医学書院							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
省察的実践法	1	15	1年		15	100%	上原奈々
学習目的・目標							
看護実践におけるリフレクションの前提として、経験を価値づけ、自己洞察へとつなげる技術を身に着ける。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1・2	・省察とは ・行為の中の省察 ・行為の後の省察 ・看護の場で省察（リフレクション） これらを重要視している理由	講義					
3・4	・日常生活の中で実践している省察 内容を可視化しよう	演習					
5～7	基礎Ⅰ実習をもとに省察してみよう	演習					
8	今回の学習内容を俯瞰しよう レポート「この授業で掴んだ省察の意味」	講義					
技術到達度							
評価方法							
パフォーマンス評価（パフォーマンス課題+ルーブリック）							
教科書・参考書など							
参考書：基礎看護技術Ⅰ 医学書院 臨床看護学総論 医学書院							
備考・履修条件など：							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
保健体育	1	15	1年			100%	前田凌汰 山口隼澄
学習目的・目標							
自ら実践できる技術を習得するとともに、生涯スポーツとしての習慣を身につける。さらに将来健康的な文化生活を創造するためのスポーツ実践力を養う。生活と運動との連携を実感するとともに、発達段階に応じたスポーツの効果について理解し、看護の場面でも活用できる知識と技能を身につける。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	オリエンテーション・講義 ・現代生活における健康と運動 今なぜ健康か 新たな健康づくり		講義	5～7	・スポーツ実践 ストレッチ体操 卓球 ドッジボール サッカー ニュースポーツ		実践
2～4	講義・実践 ・運動とからだ、こころの健康 運動による身体的効果 運動による心理的効果 運動による健康づくり ストレスと健康 運動不足と健康障害 生活習慣と運動		講義	8	※2回目～7回目は、グラウンド使用可能日を調整しながら講義およびスポーツ実践を組み替える レポート課題		講義
技術到達度							
評価方法 レポート							
教科書・参考書など							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
教育学	1	15	2年		15	100%	木戸里香

学習目的・目標					
教育現象は、自然的風土及び歴史、社会的環境における成長途上にある若い世代を中心とする学習活動を指導する。生活活動を指導することによって、人間形成における人格と能力・資質の多面的発達を意図的・計画的に方向づける社会的行為であることを理解する。その教育課程の思想、制度、内容、技術などの比較教育文化史的な側面から教育の基本概念と人間理解を深める。					

授業内容・授業方法					
回数	内容	方法	回数	内容	方法
1	人間の成長と教育の意義 教育について 学習と成長発達 看護と教育、自己分析	講義	6	教育評価 教育評価の意義と目的 教育評価の方法 自己評価とフィードバック 到達度評価	講義
2	家庭教育と社会教育 子どもの社会化と家庭教育 日本と欧米との家庭教育の特徴を比較 生涯学習・社会教育の意義	講義	7~8	特別支援教育 発達障害、視覚障害 聴覚障害、言語障害 病弱・身体虚弱	講義
3	学校教育の制度 学校教育制度の成立と発展 各国における教育・学校制度 教育目的、異文化理解	講義			
4	学習指導 教育方法の基本原則 学習理論 学習指導の意義・原理	講義			
5	生活指導 生活指導の方法 個別指導と集団指導 カウンセリング、傾聴 構成的グループエンカウンター	演習			

技術到達度					

評価方法					
定期試験70%、授業中のワーク提出20%、授業への取り組み姿勢10% 上記を総合して評価する。					

教科書・参考書など					
プリントを配布する。					

備考・履修条件など:					

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
哲学	1	15	2年		15	100%	木下昌巳

学習目的・目標

「哲学」とは、常識を突き抜け、われわれの日常的な認識を疑い、人間のあらゆる認識や知識の根拠を問い直そうとする学問です。この授業では、とくにわれわれの生き方に直接つながりのある「善と悪」、「正義と不正」ということの意味をさまざまな角度から問い直し、その意味を考察します。授業の後半では、看護の分野と関連の深い、現代的な論争となっているトピックをいくつか取り上げ、その理解を深めます。

授業内容・授業方法

回数	内容	方法			
1	「哲学」とはなにか	講義			
2	文化相対主義の挑戦	講義			
3	倫理における主観主義	講義			
4	功利主義者のアプローチ	講義			
5	カントと人格の尊重	講義			
6	フェミニズムとケアの倫理	講義			
7	安楽死の是非	講義			
8	ベジタリアニズム	講義			

技術到達度

我々が抱いている価値観の基礎的な意味と根拠を考察し、さらに看護や医療に関する問題に関して、倫理的・哲学的視野からその問題の意味を論理的に考える態度を養います。

評価方法

レポート

教科書・参考書など

現実を見つめる道徳哲学 晃洋書房

備考・履修条件など:

毎回、パワーポイントを使用して講義を行います。講義のテーマに該当するテキストの範囲を予め自分で読んでおいてから授業に臨んでください。

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
社会学	1	15	2年		15	100%	山村雅代
学習目的・目標							
健康・病気と保健医療の社会学の理論・方法を踏まえて、健康・病気と社会とがどのように関連しているかを学ぶ。さらには、保健医療の現代的課題について認識や理解を深め、医療従事者としての望ましいコミュニケーションと社会的なものの見方、複眼的なものの見方を身につける。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	社会学の基礎概念と方法 健康、病気、医療への視座 社会学的視点とモデル	講義	7	保健医療の現代的課題 保健医療システムの変容 ケアと医療の新たな関係性	講義		
2	保健医療と社会学 医療と社会学の接点 社会調査の理論と技法	講義	8	まとめ	講義 演習		
3	健康・病気と社会 健康・病気・ストレス 健康・病気の社会格差	講義					
4	保健医療における行為と関係 健康行動と病気行動 患者－医療者関係	講義 演習					
5	保健医療の専門職とジェンダー 専門職論、看護職論の現在性と ジェンダー、結婚と家族	講義 演習					
6	地域社会と保健医療制度 コミュニティと地域 福祉国家と社会保障制度	講義 演習					
技術到達度							
評価方法 レポート課題							
教科書・参考書など 社会学 医学書院/ 適時プリント配布							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
文化人類学	1	15	2年		15	100%	野波侑里
学習目的・目標							
多民族の人類学的特徴、生活様式、風俗習慣、宗教的儀礼、政治形態、教育制度などを知り、日本民族のありようを理解する。人間の身体や死や誕生について、人はどのようにその変化をとらえ、理解し、さらにみずからの考え方やものの考え方の仕方があるのかを学ぶ。最後に健康と医療がどのように文化と関連しているかについて学ぶ。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	人間と文化 文化人類学の考え方 文化人類学における文化 国家と民族と文化 異文化理解・他者理解	講義	5	宗教と世界観 文化人類学における宗教 日本人と宗教 トランスナショナル化と宗教	講義		
2	質的研究とエスノグラフィー 人類学とエスノグラフィー 人類学と看護学	講義	6	健康と医療 多様な文化による病気の原因 病気と治療	講義		
3	人と人とのつながり 個人と社会 家族 家族をこえたつながり	講義	7	健康と医療 医療の体系 多元的医療	講義		
4	人生と通過儀礼 通過儀礼と境界理論 ライフサイクルと境界理論 儀礼の構造	講義	8	健康と医療 環境と健康 人間の適応 まとめ	講義		
技術到達度							
評価方法							
授業への参加態度(20%)、リフレクションシートの評価(40%)、最終レポート評価(40%)							
教科書・参考書など							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
英語	1	30	1年		30	100%	野波侑里
学習目的・目標							
医療現場で実際に使用される特殊な英語表現や専門用語を習得し、運用する力を身につける。 また多様な時代における医療現場において必要とされる英会話能力を養うことを目標とする。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	Unit 1 Asking Basic Questions ・Class Orientation ・自己紹介	講義	8	Unit 7 Injuries and Emergencies ・Questions about the body ・身体の部位、怪我の深刻度	講義		
2	Unit 2 A Patient's First Visit ・At the reception of a hospital. ・国、国籍、言語	講義	9	Unit 8 How Are You Feeling? ・What are the Nurses/Doctors do? ・内臓器官、治療	講義		
3	Unit 3 Where's Internal Medicine? ・Giving Direction, Hospital Map ・医療部門	講義	10	Review Units 5-8	講義		
4	Unit 4 Admission to the Hospital ・Giving a tour to a new patient. ・援助の申し出の動詞	講義	11	Unit 9 A Patient's Medical History ・What Did Karen Do Yesterday? ・病気、病歴	講義		
5	Review Units 1-4	講義	12	Unit 10 Medicine ・May I have a painkiller? ・薬と薬の種類	講義		
6	Unit 5 Giving Information ・Ms. Lee will enter the hospital tomorrow. ・医療用品	講義	13	Unit 11 I'm going to Give You an IV ・When will I be discharged? ・動詞の未来形	講義		
7	Unit 6 Symptoms ・What's the Problem? ・症状、不具合	講義	14	Unit 12 Congratulations! ・What is the nurse going to do? ・未来を表す現在進行形	講義		
			15	Review Units 9-12	講義		
技術到達度							
評価方法							
筆記試験 単語テスト							
教科書・参考書など							
備考・履修条件など:							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
解剖生理学 I	1	30	1年		30	100%	金倉弥那美
学習目的・目標							
看護学を学ぶ上での基本となる解剖生理学的知識を理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～3	・細胞と組織		講義				
3～5	・消化器系		講義				
5・6	・皮膚と膜		講義				
7・8	・生殖器系		講義				
8～10	・神経系		講義				
10・11	・感覚器系		講義				
12・13	・免疫系		講義				
14・15	総復習、まとめ		講義				
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 解剖生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
解剖生理学Ⅱ	1	30	1年		30	100%	石田祐大
学習目的・目標							
看護学を学ぶ上での基本となる解剖生理学的知識を理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～3	・ 血液		講義				講義
4～6	・ 循環器系		講義				
7・8	・ 呼吸器系		講義				
9・10	・ 腎泌尿器系		講義				
11・12	・ 内分泌系		講義				
13～15	・ 筋・骨格系		講義				
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 解剖生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価割合	担当者
生化学	1	30	1年		30	100%	松浦 玄衛
学習目的・目標							
人体を構築している物質は、新しく産生された物質と置き換わり常に人体を活性化するようにしている。食物を摂取することによって得られた栄養素を基に人体に必要な物質を産生している。このような生体内の代謝はそれぞれの臓器、組織が相互に補償しあって円滑に機能している。生体における物質代謝やエネルギー代謝を各臓器、組織間の相互作用をふまえながら理解していく。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～4	生化学を学ぶにあたっての化学の基礎知識 細胞の構造と機能 糖質・脂質・たんぱく質	講義					
5～8	核酸、水と無機質 ホルモンについて 代謝・酵素について ビタミンについて	講義					
9～12	代謝について 糖質代謝・脂質代謝・たんぱく質代謝	講義					
13～15	遺伝について 遺伝情報 先天性代謝異常	講義					
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 生化学 医学書院							
備考・履修条件など 授業内容は前後する場合があります							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
解剖生理学Ⅲ	1	30	3年	看護の視点で とらえた 解剖生理学Ⅰ	30	100%	金倉弥那美
学習目的・目標							
看護の視点から、解剖生理学の知識を症状・兆候や病態と関連づけながら再確認し、臨床判断能力の基盤となる基礎的な知識を習得する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～2	看護の土台となる解剖生理学とは？ 解剖生理学を学ぶ理由・意義	演習	9～10	血液の構造と機能	演習		
3～4	皮膚の構造と機能	演習	11～12	免疫の構造と機能	演習		
5	感覚器（視覚）と視覚障害者への看護	演習	13～14	筋骨格系の構造と機能	演習		
6	感覚器（聴覚）と聴覚障害者への看護	演習	15	まとめ・復習	演習		
7～8	感覚器（味覚・痛覚）と看護	演習		*授業の進行により内容が前後することがあります			
技術到達度							
評価方法							
筆記試験							
教科書・参考書など							
解剖生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
解剖生理学Ⅳ	1	30	3年	看護の視点で とらえた 解剖生理学Ⅱ	30	100%	野堀 結水
学習目的・目標							
看護の視点から、解剖生理学の知識を症状・兆候や病態と関連づけながら再確認し、 臨床判断能力の基盤となる基礎的な知識を習得する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	成人・老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ、精神看護学実習で今まで出会った患者さん一人一人を解剖生理学の視点で掘り下げ、看護につなげよう		演習	9～11	循環器について 刺激伝導・心周期・心電図・不整脈など		演習
	中枢と抹消神経について			12～13	呼吸器について 呼気、吸気について・呼吸の調整 スパイロメーター・閉塞性肺疾患など		演習
2～3	脳と脊髄を守る構造 神経伝達物質について 自律神経（交感神経・副交感神経）		演習	14～15	胎児循環・性周期など 男性生殖器・子宮腔がん・子宮体がんなど まとめ		*授業の進行により内容が前後することがあります
4～6	腎臓・脾臓・泌尿器について 下垂体ホルモン・脾臓ホルモンなど						
7～8	消化器 胃～十二指腸について 消化酵素・消化管ホルモンなど 肝臓・胆のう・膵臓について		演習				
技術到達度							
評価方法							
筆記試験							
教科書・参考書など							
解剖生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
微生物学	1	15	1年		15	100%	藤原永年
学習目的・目標							
感染症を引き起こす微生物（病原微生物）についてその生物学的特徴、さらに個々の病原体の感染様式、病原性、診断から治療について系統的に学び、感染症とその宿主防御機構について理解する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	微生物学の基礎 (1)微生物の生物学的特徴 (2)微生物学の歴史 (3)細菌、真菌、原虫、ウィルスの分類と性質		講義				
2	感染とその防御 (1)感染と発病		講義				
3	(2)感染に対する生体防御機構 (3)感染症の予防		講義				
4	(4)感染症の診断 (5)感染症の治療		講義				
5	(6)感染症の現状と対策		講義				
6	おもな病原微生物 (1)細菌感染症		講義				
7	(2)真菌感染症 (3)原虫感染症		講義				
8	(4)ウイルス感染症		講義				
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 微生物学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
病理学	1	15	1年		15	100%	柴田理志
学習目的・目標							
病理学が医学や医療の中でどのような役割を担っているかを理解する。病気はその成り立ちから先天異常・代謝異常・循環障害・炎症・腫瘍、5つの病変カテゴリーを学ぶ。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	病理学とは 病理学とは、疾病の様々な原因 先天異常 遺伝性疾患、染色体異常による疾患 胎児障害	講義 講義	5	感染症 病原体と感染症 宿主の防御機構 主な病原微生物と感染症、治療と予防	講義		
2	代謝障害 細胞の障害と適応 細胞障害の結果としての物質沈着	講義	6・7	腫瘍 腫瘍の定義と分類 腫瘍の発生病理 悪性腫瘍の転移と進行度 腫瘍の診断と治療、統計	講義		
3	循環障害 局所性：充血、うっ血、 全身性：ショック、DIC リンパの循環障害：浮腫、滲出液と 濾出液	講義	8	老化と死 老化とは 加齢に伴う諸臓器の変化 個体の死	講義		
4	炎症と免疫、膠原病 炎症、炎症の各型 免疫：体液性免疫と細胞性免疫 アレルギー（Ⅰ型～Ⅴ型） 自己免疫疾患、膠原病	講義					
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 病理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
栄養学	1	15	1年		15	100%	前田佳予子

学習目的・目標	
栄養とは生物が生命活動を持続するうえに必要な物質(栄養素)を外界から取り入れ利用する現象である。食生活に栄養の知識を活かし、健康の保持・増進、疾病の予防・治療が図れるよう、栄養の基本的事項を理解するとともに傷病者の病態・病期や栄養状態の特質に基づき、適切な栄養管理を実施するために総合的なマネジメントの考え方を理解する。	

授業内容・授業方法					
回数	内容	方法	回数	内容	方法
1	人間栄養学と看護 栄養と栄養素、医療と栄養学 食事療法の進歩と医療制度 看護と栄養、栄養アセスメント	講義	4	栄養素の消化と吸収 栄養素の消化(機械・化学的消化) 消化器系のはたらき 栄養素の吸収(吸収部位・機構・経路)	講義
2	栄養状態の評価と判定 臨床診査、身体計測、臨床検査、食事調査 栄養素の種類とはたらき 糖質、脂質、たんぱく質、ミネラル	講義	5	栄養ケア・マネジメント ライフステージと栄養 事例(高齢期)に基づくアセスメントの作成	講義 演習
3	エネルギー代謝 エネルギー代謝の測定 エネルギー消費 (基礎代謝、安静時代謝、活動代謝等)	講義	6～8	臨床栄養 病院食、 疾患別食事療法の実際 栄養補給法	講義 演習

技術到達度
栄養アセスメントの知識と技能を応用できる実践能力を修得する。

評価方法
筆記試験

教科書・参考書など
栄養学 医学書院 栄養食事療法 医学書院

備考・履修条件など

[illegible]

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
病態治療論Ⅰ	1	30	1年	運動器	16	60%	樋口 巧
				眼	6	20%	樋口 巧
				耳鼻	8	20%	森口 誠
学習目的・目標							
1 各器官系統別の病態を理解するための解剖と生理について学ぶ 2 症状とその病態生理について学ぶ 3 検査と治療・処置について学ぶ 4 主な疾患の病態生理・診断・治療について学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～8	運動器疾患 骨・関節・筋肉の構造と機能 診断と検査 主な疾病と診療 変形性関節症、関節リウマチ、 脊椎・脊髄疾患、末梢神経の損傷と障害 骨粗鬆症、骨折、スポーツ傷害 骨・軟部腫瘍		講義	12～15	感覚器系疾患—耳鼻咽喉科 耳鼻咽喉、頸部の解剖と生理 症状と検査 めまい、嚥下障害など 主な疾病と診療 耳疾患 中耳炎、突発性難聴、メニエル病 顔面神経麻痺 鼻疾患 鼻中隔彎曲症、鼻出血、 アレルギー性鼻炎、副鼻腔炎、 上顎がん 口腔・咽頭疾患 舌・口腔底がん、扁桃炎、咽頭がん 喉頭疾患 喉頭がん、声帯ポリープ 唾液腺腫瘍 嚥下障害		講義
9～11	感覚器系疾患—眼科 眼の構造と機能 症状と病態整理 視力障害、視野狭窄、飛蚊症、色覚異常 複視、充血、眼脂、眼痛、眼球突出など 診断と検査 主な疾病と診療 屈折・調節異常、粘膜の病気 角膜の病気、水晶体の病気 網膜の病気、ぶどう膜の病気 視神経と眼筋の病気、 眼瞼、眼窩、涙器の疾患、眼の外傷		講義				
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 運動器 医学書院 耳鼻咽喉 医学書院 眼 医学書院 病態生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
病態治療論Ⅱ	1	30	1年	消化器内科 消化器外科 歯・口腔	12 12 6	40% 40% 20%	森田眞照 下村知雄 井関富雄
学習目的・目標							
1 各器官系統別の病態を理解するための解剖と生理について学ぶ 2 症状とその病態生理について学ぶ 3 検査と治療・処置について学ぶ 4 主な疾患の病態生理・診断・治療について学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～3	消化器疾患 消化器の構造と機能 食道、胃・十二指腸、 小腸・大腸、直腸・肛門 症状と病態生理 嚥下困難、おくび・胸やけ、吐き気・嘔吐 腹痛、吐血・下血、下痢・便秘、腹部膨満 食欲不振と体重減少、腹水、黄疸、意識障害		講義	13～15	歯・口腔疾患 歯・口腔の構造と機能 症状と病態生理 疼痛、腫脹、出血 診断と検査、主な疾病と診療 主な疾病と診療 う蝕、歯周病、先天異常 口腔変形症、炎症、嚢胞 良性腫瘍・悪性腫瘍 口腔再建外科 顎関節疾患、口腔粘膜疾患		講義
4～6	検査と治療 ・肝機能検査 ・内視鏡検査 ・薬物療法		講義				
7～12	1) 消化器外科的治療の特徴と手術適応について 2) 病態と治療 ・食道がん ・胃潰瘍、十二指腸潰瘍 ・胃がん ・イレウス ・虫垂炎 ・大腸がん ・肝腫瘍、肝移植 ・胆石症						
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 消化器 医学書院 歯・口腔 医学書院 臨床外科看護各論 医学書院 病態生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
病態治療論Ⅲ	1	30	1年	呼吸器 循環器	16 14	50% 50%	馬淵成美 樋口 巧
学習目的・目標							
1 各器官系統別の病態を理解するための解剖と生理について学ぶ 2 症状とその病態生理について学ぶ 3 検査と治療・処置について学ぶ 4 主な疾患の病態生理・診断・治療について学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～8	呼吸器疾患 呼吸器の構造と機能 症状と病態生理 胸痛、咳、痰、血痰、 咯血、喘鳴、嚔声 診断と検査 主な疾病と診療 感染症、肺炎、誤嚥性肺炎 気管支喘息、閉塞性肺疾患、 拘束性肺疾患、肺血栓塞栓症 換気異常、腫瘍、胸腔疾患		講義	9	循環器疾患 循環器の構造と機能 症状と病態生理 胸痛、呼吸困難、動悸、浮腫 診断と検査 心電図、心臓カテーテル検査		講義
				10～12	主な疾患と診療 先天性心疾患 後天性心疾患 虚血性心疾患、心筋症 肺塞栓症、心不全、弁膜症 ショック、 血圧異常 高血圧、低血圧症		講義
				13～15	不整脈疾患 洞不全症候群、房室ブロック 期外収縮、心房細動、上室性頻拍 心室性頻拍、心室細動 血管の疾患 動脈硬化症、など		講義
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 呼吸器 医学書院 病態生理学 医学書院 循環器 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
病態治療論Ⅳ	1	30	2年	麻酔	8	30%	宮崎信一郎
				脳神経	22	70%	本郷卓也
学習目的・目標							
1 麻酔による生体への影響を学び、術中・術後の管理について学ぶ 2 各器官系統別の病態を理解するための解剖と生理について学ぶ 3 症状とその病態生理について学ぶ 4 検査と治療・処置について学ぶ 5 主な疾患の病態生理・診断・治療について学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～3	手術侵襲と生体の反応 手術侵襲の意味 侵襲に対する生体反応 手術侵襲の評価 麻酔法 麻酔の種類 全身麻酔、吸入麻酔、静脈麻酔、 局所麻酔、腰椎・クモ膜下麻酔、 硬膜外麻酔	講義 講義	5～15	脳神経系 脳・神経系の構造と機能 症状と病態生理 運動系・感覚系の症候、 自律神経系の症候、脳神経の症候 高次脳機能障害 意識障害 診断と検査 主な疾病と診療 脳血管障害 脳血栓症、脳塞栓症、脳出血 くも膜下出血、 神経系の腫瘍 神経系の感染症 髄膜炎 機能的疾患 てんかん、ナルコレプシー 神経変性疾患 パーキンソン病、脊髄小脳変性症 脳腫瘍、水頭症、ALS、認知症	講義		
4	手術前の管理 術前検査、麻酔前投薬 手術中の管理 モニター観察、体位 手術後の管理 回復室、術後の疼痛管理 体液・栄養管理	講義 講義					
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 臨床外科看護総論 医学書院 病態生理学 医学書院 脳・神経 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
病態治療論Ⅴ	1	30	2年	内分泌・代謝 感染免疫アレルギー 血液造血器	12 12 6	40% 40% 20%	馬淵成美
学習目的・目標							
1 各器官系統別の病態を理解するための解剖と生理について学ぶ 2 症状とその病態生理について学ぶ 3 検査と治療・処置について学ぶ 4 主な疾患の病態生理・診断・治療について学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～6	内分泌・代謝疾患 構造と機能、内分泌の役割、 症状と病態生理 診断と検査 主な疾病と診療 内分泌疾患 視床下部の異常、下垂体の異常 甲状腺疾患、副甲状腺疾患、 副腎疾患、性腺疾患 代謝疾患 糖質代謝異常、脂質代謝異常 肥満、痛風		講義	10～12	免疫・アレルギー疾患 免疫とは 抗原抗体反応、自己と非自己 診断と検査 主な疾病と診療 アレルギー疾患 気管支喘息、膠原病、膠原病近縁疾患 全身性エリテマトーデス 免疫不全症		講義
7～9	感染症 生体防御と感染 感染症の診断と治療 主な疾病と診療 ウイルス感染症、細菌感染症 AIDS,ATL、HUS		講義	13～15	血液・造血器疾患 血液の解剖と生理 症状と病態生理 貧血、出血傾向、感染、発熱、疼痛 診断と検査 血液検査、骨髄検査 主な疾病と診療 鉄欠乏性貧血、再生不良性貧血 溶血性貧血、白血病、悪性リンパ腫 特発性血小板減少性紫斑病、血友病 DIC		講義
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 血液・造血器 医学書院 アレルギー 膠原病 感染症 医学書院 内分泌・代謝 医学書院 病態生理学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
病態治療論Ⅵ	1	30	2年	腎泌尿器 女性生殖器 皮膚	18 6 6	60% 20% 20%	吉田直正 高橋享子 大島 茂
学習目的・目標							
1 各器官系統別の病態を理解するための解剖と生理について学ぶ 2 症状とその病態生理について学ぶ 3 検査と治療・処置について学ぶ 4 主な疾患の病態生理・診断・治療について学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～5	腎疾患 腎臓の構造と機能 症状と病態生理 尿の異常、浮腫、高血圧、尿毒症 電解質異常・酸塩基平衡異常 診断と検査 主な疾病と診療 腎疾患の治療総論 生活指導・食事療法・薬物治療 血液浄化療法・移植療法 急性腎不全、慢性腎不全 糸球体腎炎　ネフローゼ症候群		講義	10	女性生殖器系 女性生殖器の構造と機能 ・女性生殖器の構造と機能 ・性周期とホルモン 症状とその病態生理 出血、帯下、疼痛、発熱、自律神経症状 診察・検査と治療・処置 ・細菌・ウイルス検査 ・画像検査 ・診察治療器具 ・薬物療法（ホルモン療法） ・手術		講義
6～9	泌尿器系疾患 男性生殖器の構造と機能 症状と病態生理 性的障害 診断と検査 主な疾病と診療 尿路結石症、腎細胞がん、水腎症 神経因性膀胱、尿路感染症 性感染症、前立腺肥大症、前立腺がん 精巣腫瘍、		講義	11～12	疾患の理解 ・性染色体異常、膣の疾患、子宮がん ・子宮筋腫、乳がん ・卵巣腫瘍　性感染症		
				13～15	皮膚の構造と機能 症状と病態生理 皮疹、痒痒感、疼痛、発熱 診断と検査 主な疾病と診療 アトピー性皮膚炎、接触皮膚炎、蕁麻疹 脂漏性皮膚炎、皮膚痒痒症 薬疹、腫瘍、熱傷、		講義
技術到達度							
評価方法							
筆記試験							
教科書・参考書など							
腎・泌尿器:医学書院		女性生殖器:医学書院		母性看護学各論:医学書院			
皮膚：医学書院		病態生理学:医学書院					
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護病態治療論Ⅰ	1	30	3年	看護の視点で とらえた治療Ⅰ	30	100%	馬淵成美
学習目的・目標							
解剖生理学、病態治療学、薬理学等の知識をもとに、健康障がいを抱える対象への理解を深める							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～4	呼吸器 COPDなど閉塞性呼吸不全の病態 ・疾患の原因 ・症状、聴講 ・検査、治療、合併症など		講義	9	循環器 虚血性心疾患(動脈硬化)病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など		講義
5, 6	間質性肺炎など拘束性呼吸不全の病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など			10	虚血性心疾患(狭心症)病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など		
7, 8	肺がんの病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など			11～13	虚血性心疾患(心筋梗塞)病態		
				13～15	・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など		
				14, 15	心不全の病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など		
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 解剖生理学 医学書院 循環器 医学書院 呼吸器 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護病態治療論Ⅱ	1	30	3年	看護の視点で とらえた治療Ⅱ① (脳神経)	16	50%	馬淵成美
				看護の視点で とらえた治療Ⅱ② (精神)	14	50%	江藤真一
学習目的・目標							
解剖生理学、病態治療学、薬理学等の知識をもとに、健康障がいを抱える対象への理解を深める							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	脳神経 解剖の振り返り		講義	9	・大脳皮質の機能 ・神経伝達物質		講義
2, 3	脳梗塞、脳出血の病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など			10～12	気分障害の病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療		講義
4, 5	くも膜下出血の病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など			13～15	統合失調症の病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療		講義
6, 7	頭部外傷、脳ヘルニアの病態 ・疾患の原因 ・症状、徴候 ・検査、治療、合併症など						
8	まとめ						
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 脳・神経 医学書院 精神看護の基礎 医学書院 解剖生理学 医学書院 精神看護の展開 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者	
看護病態治療論Ⅲ	1	30	3年	看護の視点でとらえた治療Ⅲ①(母性)	10	33%	井手窪 澄子	
				看護の視点でとらえた治療Ⅲ②(小児)	10	33%	松本 優子	
				看護の視点でとらえた治療Ⅲ③(地域在宅)	10	34%	西川 あゆみ	
学習目的・目標								
解剖生理学、病態治療学、薬理学等の知識をもとに、健康障がいを抱える対象への理解を深める								
授業内容・授業方法								
回数	内容			方法	回数	内容		方法
1～3	母性看護学領域 HDPの病態関連図を作ろう ・疾患の原因 ・症状・徴候 ・検査・治療 ・看護介入			演習	11～13	地域・在宅看護論領域 既存の知識を統合して 患者さんの病態を把握し、 病態関連図を作ろう ・疾患の原因、症状 ・検査、治療 ・合併症など		演習
4・5	プレゼンテーション			演習	14・15	看護介入		演習
6～8	小児看護学領域 ネフローゼ症候群の病態関連図を作ろう ・疾患の原因 ・症状・徴候 ・検査・治療 ・看護介入			演習				
9・10	プレゼンテーション			演習				
技術到達度								
評価方法								
筆記試験								
教科書・参考書など								
母性看護学概論 医学書院、母性看護学各論 医学書院 小児看護学概論 医学書院、小児臨床看護総論 医学書院 地域・在宅看護の基盤 医学書院								
備考・履修条件など								

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
生活者の健康	2	30	1年	精神保健 社会復帰	26 4	100%	入江優 藤田 志穂
目的・目標							
1 精神看護の目的、役割を理解する。 2 人間のこころの健康に関する問題を、生物・心理・社会モデルにつなげて考える視点を養う。 3 精神の健康の保持増進や危機的状況、及び、それらに影響を与える要因を理解する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	精神の健康と精神保健の考え方		講義	12	地域における精神保健活動(1) 精神障害と人権・法制度		講義
2	心のはたらき		講義				
3	愛着と心の安全の基地 ボウルビーの愛着理論		講義	13	地域における精神保健活動 (2) おもな精神保健医療福祉政策とその動向		講義
4	心のしくみと人格の発達		講義	14・15	社会復帰施設とは 障がい者自立支援法によるサポートの実際		講義 講演 GW
5	ライフサイクルとアイデンティティ エリクソンの発達理論		講義				
6	家族と精神の健康		講義				
7	学校におけるメンタルヘルス		講義				
8	思春期・青年期のメンタルヘルス		講義				
9	職場のメンタルヘルス		講義				
10	壮年期のメンタルヘルス		講義				
11	看護職のメンタルヘルス		講義				
技術到達度							
評価方法 精神保健:筆記試験 社会復帰:なし							
教科書・参考書など 精神看護の基礎 医学書院 精神看護の展開 医学書院 精神保健福祉 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
医療倫理	1	15	3年		15	100%	東 暁雄
学習目的・目標							
人間だから認められる権利「人権」について考える。自己決定権の考え方や人権を保障するということの意味を考えていく。その上で患者の権利を看護職の立場で学ぶ。個人情報の保護を理解し情報開示のあり方を学習する。看護・医療事故を予防するための自己責任のあり方を追求する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	医療倫理の概説 歴史と原則について 自律尊重の原則について 倫理綱領		講義				
2・3	安楽死、尊厳死について 分類と分類することの意味について 生殖補助医療、出生前診断 優生思想		講義				
4	医療事故・医療過誤		講義				
5	臓器移植と脳死について		講義				
6	選択的人工妊娠中絶と優生思想について 遺伝子診断について		講義				
7	セルフコントロールについて		講義				
8	個人情報保護について		講義				
技術到達度							
評価方法							
レポート							
教科書・参考書など							
看護倫理 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
公衆衛生学	1	15	3年		15	100%	村上由希
学習目的・目標							
健康は自分一人だけの力だけでは守れない。セルフケア能力を高めていくとともに、「水道水や食事の安全性」を高めるための「環境衛生の改善」を学ぶ。公衆衛生とは、人間の健康に関係するあらゆる事象を研究し健康の維持増進をはかる学問である。「公衆」とはどういう集団を指すのか具体的な事象と対策、法規を学び、将来の健康づくりと疾病の予防に貢献できる力を養う。 医療従事者として看護師、保健師における社会医学の基礎知識を習得する。 公衆衛生の歴史・理念を学び、集団を対象とした健康増進および疾病予防に向けた理論と実践を習得する。また人々の健康を守り、生活を支えるための保健医療福祉制度や法律を理解する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	公衆衛生のガイダンス 公衆衛生と健康の概念	講義					
2	公衆衛生と疫学、衛生統計のかかわり	講義					
3	感染症とその対策	講義					
4	学校保健 母子保健	講義					
5	地域保健と保健行政 生活環境と健康	講義					
6	成人保健 高齢者保健	講義					
7	産業保健 障害者保健・難病保健	講義					
8	国際保健 危機管理、災害医療	講義					
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 公衆衛生がみえる MEDIC MEDIA							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
社会福祉学	1	15	3年		15	100%	彌榮みのり
学習目的・目標							
現代社会において生み出されてくる生活問題に対応して、国民の生存権を保障するための社会的な施策及び活動として社会福祉が存在することを理解する。社会福祉と医療及び看護の連携の必要性を学ぶ。健康についての考え方や健康問題の現状、現在国が進めている健康づくり施策、具体的な保健活動について学ぶ。社会福祉の文脈で、医療・看護の役割や意義、課題等を自分なりに考えることができる。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	社会保障制度と社会福祉		講義				
2	現代社会の変化と社会福祉の動向		講義				
3・4	医療保障、介護保障、所得保障		講義				
5	公的扶助 社会福祉の分野とサービス		講義				
6	社会福祉の歴史 MSWの業務について バーンアウトについて		講義				
7・8	事例演習問題 複数の事例をグループで学習し、 事例に応じた社会福祉の各種制度 の活用について学ぶ		演習				
技術到達度							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 社会保障・社会福祉 医学書院							
備考・履修条件など 適宜、グループワークやディスカッションを行う予定です。							

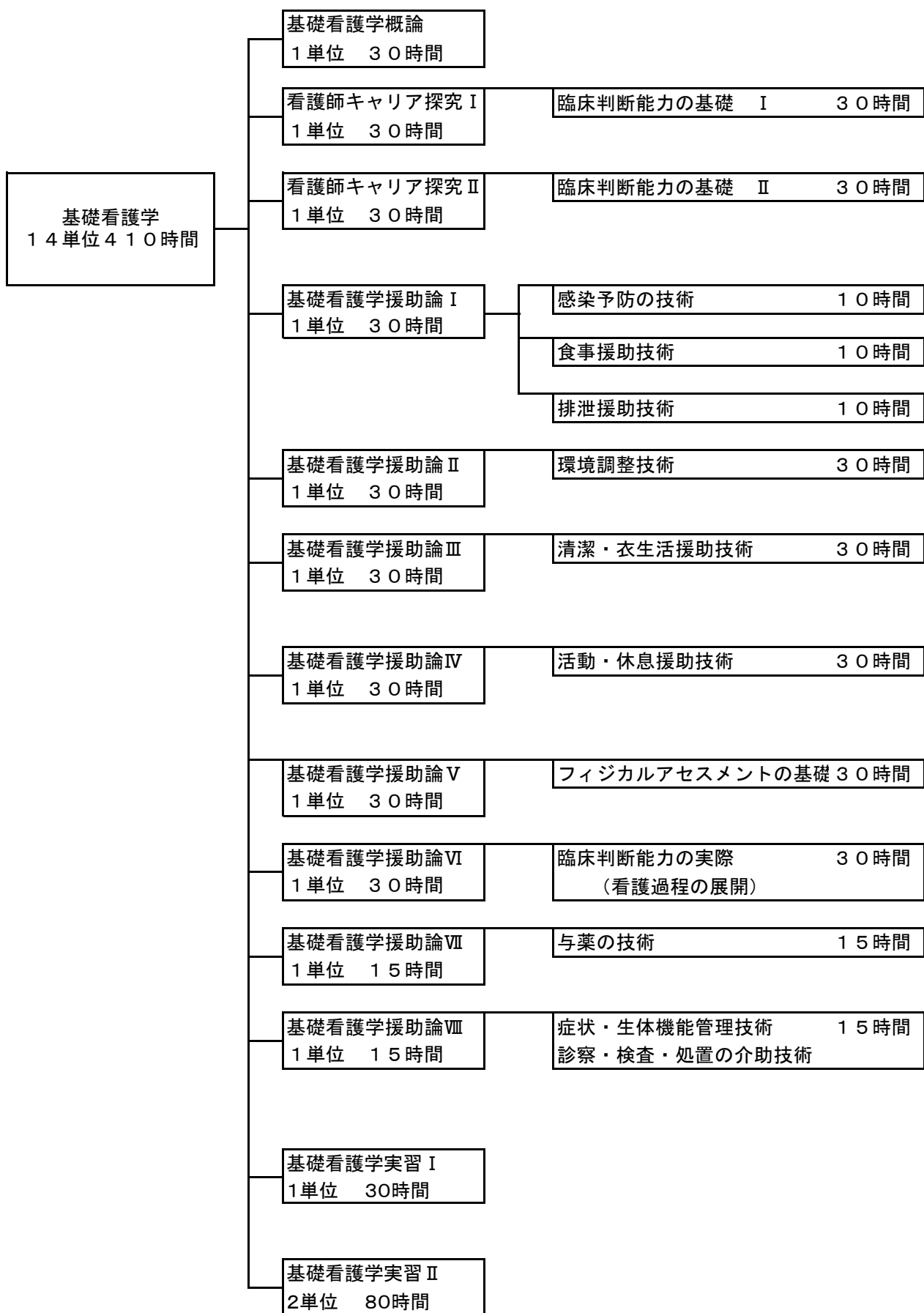
授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
関係法規	1	15	3年		15	100%	高須久美子

学習目的・目標 人間社会は日常的には意識していないが、沢山の法に囲まれている。法によってその生活は成り立っている事を理解する。看護にとって最も重要な保健師助産師看護師法をはじめ、衛生法規・社会保障に関する法規・労働関係法規を学ぶ。																																									
授業内容・授業方法 <table border="1"> <thead> <tr> <th>回数</th><th>内容</th><th>方法</th><th>回数</th><th>内容</th><th>方法</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td><td>法の概念</td><td>講義</td><td>6・7</td><td>環境衛生法 労働基準法 環境法 社会保障法 社会保障のしくみ 健康保険法、国民健康保険法 老人保健法 介護保険法 障害者基本法 障害者自立支援法</td><td>講義</td></tr> <tr> <td>2</td><td>保健師助産師看護師法とその変遷・構造 看護師等の人材確保の促進に関する法律</td><td>講義</td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>3</td><td>医師法・医療法 関係資格法</td><td>講義</td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>4</td><td>保健衛生法 地域保健法 精神保健福祉士法 母体保護法 母子保健法 学校保健法 健康増進法 栄養士法 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 予防接種法</td><td>講義</td><td>8</td><td>看護師等の人材確保の促進に関する法律 社会の変化と医療・看護の動向</td><td>講義</td></tr> <tr> <td>5</td><td>薬務法 薬事法 毒物及び劇物取締法 麻薬及び向精神薬取締法</td><td>講義</td><td></td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table>						回数	内容	方法	回数	内容	方法	1	法の概念	講義	6・7	環境衛生法 労働基準法 環境法 社会保障法 社会保障のしくみ 健康保険法、国民健康保険法 老人保健法 介護保険法 障害者基本法 障害者自立支援法	講義	2	保健師助産師看護師法とその変遷・構造 看護師等の人材確保の促進に関する法律	講義				3	医師法・医療法 関係資格法	講義				4	保健衛生法 地域保健法 精神保健福祉士法 母体保護法 母子保健法 学校保健法 健康増進法 栄養士法 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 予防接種法	講義	8	看護師等の人材確保の促進に関する法律 社会の変化と医療・看護の動向	講義	5	薬務法 薬事法 毒物及び劇物取締法 麻薬及び向精神薬取締法	講義			
回数	内容	方法	回数	内容	方法																																				
1	法の概念	講義	6・7	環境衛生法 労働基準法 環境法 社会保障法 社会保障のしくみ 健康保険法、国民健康保険法 老人保健法 介護保険法 障害者基本法 障害者自立支援法	講義																																				
2	保健師助産師看護師法とその変遷・構造 看護師等の人材確保の促進に関する法律	講義																																							
3	医師法・医療法 関係資格法	講義																																							
4	保健衛生法 地域保健法 精神保健福祉士法 母体保護法 母子保健法 学校保健法 健康増進法 栄養士法 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 予防接種法	講義	8	看護師等の人材確保の促進に関する法律 社会の変化と医療・看護の動向	講義																																				
5	薬務法 薬事法 毒物及び劇物取締法 麻薬及び向精神薬取締法	講義																																							
技術到達度																																									
評価方法 筆記試験																																									
教科書・参考書など 看護関係法令 医学書院																																									
備考・履修条件など																																									

基礎看護学の構成

授業科目

単元



基礎看護学の考え方

1. 教材観

入学後、基礎分野および専門基礎分野の学習と並行して履修が始まり、この先の様々な領域の看護学を学び続けていくための根源的な土台となる科目である。基礎看護学概論において、看護の基礎となる主要概念（人間・環境・健康・看護）を理解するとともに、常に「看護とは何か」を発展させていく科目として設定する。また、プロジェクト学習を導入して学生自身の意志ある主体的な学習を支援していく。自分の身近にいる大切な人への興味関心・健康を守りたいという思いからケアリングにつながる看護学を学ぶ一歩としていく。看護は実践の科学であることから、基本技術の根拠と方法について理解し、援助関係を成立させるための基礎的な知識・技術・態度である看護における援助技術を学ぶ。また、「看護とは」という概念を発展させながら、対象の基本的ニーズを充足させるためには何が必要か、生活者である対象の生活を支えるために必要な援助技術を学ぶ。診療時における看護師の役割においては、対象の安全を守るため援助の根拠を明確にして診療の補助における援助技術を学ぶ。また専門分野での看護援助へとつながる土台となる重要な科目である。

2. 学生観

本校に入学してくる学生は、青年期である学生が多く青年期は身体機能の発達期にあたり、精神活動が活発で感情が豊かであり、論理的な思考が構築される時期である。また他と同化し目立つことを避ける、指示待ち傾向にあるなど自己拡散と同一化を持ち不安定な一面もある。社会的背景は、核家族化、少子化など他世代との交流が少なく一般常識やマナーの低下がみられる。周囲に無関心で対人関係が希薄であり価値観の多様性を認められないなどコミュニケーションも苦手であると言われている。

学生は思ったら深く考慮せずすぐに行動し、通常は気の合う2～3人の小集団で行動するため仲の良い友達の中では発言が多くみられるが、指定されたグループ間では積極的な発言はみられず、聞き手に回ることが多い。意見を求められれば即答に戸惑い、自分の目標を立てられず主体的な学習態度に欠ける面も強い。

学生の中には子供の頃から看護師を目指し、看護コースで基礎的看護について単位を取得している学生もいれば看護についての学習が全く初めてであるもの、社会人経験を経て看護師へと職業転換をするために入学してくる学生というように、看護学教育に対するレディネスが様々である。

学習面では読み書きや理解力の低下、考えるプロセスより正解を求める、教員の評価を気にするなどの課題を抱えている。また経済状況や家族間の問題も抱え十分な学習環境も整っていない現状がある。

3. 指導観

入学後初めて学習する専門科目であるため、学生の興味関心は高い。看護師に必要な知識の習得段階としては、入学後同時期に学習を始める基礎分野および専門基礎分野の学習内容と関連させながら学習に取り組めるように発問を工夫する。常に人に対しての関心をよせ対人関係能力を伸ばしていくことも重要である。そして、学習においては目的を明確に何のためにその知識や技術が必要なのか「考える力」につながる指導を行い、本質を理解した上での看護につなげる指導を行う。

技術習得に関しては、援助が必要な対象をイメージできるような事例を設定しながら興味・関心を引き出すことから学習を進め、その技術の根拠を明確にしながらの指導計画を立てる。学生が技術習得に向けて繰り返し取り組めるよう、演習に取り組む時間を確保することも重要である。正確さを求められる技術としてバイタルサイン測定は、実技試験により習得度を確認する。また、対象の日常生活を支えるための援助技術の習得においては、看護技術の基礎となるため单元ごとに達成度を確認するなど確実に安全面に留意できる技術の習得を図るような計画を立てる。

学内学習と臨地実習との乖離を最小にとどめられるよう、対象のニーズを充足するため安全・安楽・自立に向けての援助を意識させるよう、学内演習での臨場感を強調するよう環境設定を工夫する。

目的

看護の概念と役割を学び、看護の対象となる人間を理解し看護実践の基礎的能力を養う

目標

1. 看護の基礎となる主要概念（人間・健康・環境・看護）を理解し、常に看護とは何かを考え続ける素地を作る
2. 根拠に基づいた看護援助技術の基礎を身に付けることで、対象となる人が安全・安楽で自立に向けた療養生活を送るための援助ができる
3. 入院している対象を支える看護師の役割を学び、看護とは何かを考える
4. 健康障害をもつ受け持ち患者の看護について学ぶ

基礎看護学のマトリックス

科目	単元	主な教授内容	機能障害 (看護病)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	看護師教育の技術項目	看護過程(展開)	ポートフォリオ	プロジェクト	関連理論・その他	フィジカル アセスメント	基礎分野・専門基礎 分野の展開
基礎看護学概論 (1)単位 (30)時間 1年	看護の概念	看護の主要概念および看護実践の 元となる考え方について学習する ・看護とは ・看護の対象の理解 ・健康と生活 ・看護の提供者 ・看護における倫理								○		タイディングール ヘンダーソン ウィーデンバック トラベルビー オレム ロイ ペプロウ ベナー		現在学んで いる全ての 科目
看護師キャリア探究Ⅰ (1)単位 (30)時間 1年	臨床判断能力の 基礎Ⅰ	多様な健康上のニーズをもつ対象に基礎 的な知識や技術を統合しながら看護実践 として具現化していくプロセスを通して、 看護師としての自分のキャリアを自分で 育てていくための考え方、物の捉え方の 基礎を学ぶ	設定事例・ 受け持ちに よって さまざま	設定事例・ 受け持ちに よって さまざま						○	○		設定事例・ 受け持ち によって さまざま	
看護師キャリア探究Ⅱ (1)単位 (30)時間 2年	臨床判断能力の 基礎Ⅱ	臨床場面を題材に看護師の思考作り の基礎を学ぶ	受け持ちに よって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま				○	○	○	ヘンダーソン ICF	受け持ちに よって さまざま	現在学んで いる全ての 科目
基礎看護学援助論Ⅰ (1)単位 (30)時間 1年	感染予防の技術 食事援助技術 排泄援助技術	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 感染と感染予防のための基礎知識 標準予防策(スタンダードプリコーション) 感染経路別予防策 洗浄・消毒・滅菌 無菌操作 感染性廃棄物の取り扱い 食事をすることの意義とアセスメントの視点 食事と栄養に関する援助を行う目的 食事の援助のための知識と技術 排泄行動の意義とアセスメントの視点 排泄に関する援助を行う目的 排泄の援助のための知識と技術					標準予防策 感染経路別予防策 無菌操作 感染性廃棄物の取り扱い 食事環境の調整 食事摂取の介助 排泄行動の援助	No.1,3,7,14,15,16,52, 57,58,59,60,61,62, 63,64,65,69					栄養状態 水・電解質 バランス 摂食・嚥下 能力 排泄機能	
基礎看護学援助論Ⅱ (1)単位 (30)時間 1年	環境調整技術	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 療養生活の環境 病床の環境のアセスメントと調整 病床の環境を整えるための知識と技術					環境整備 ベッドメイキング リネン交換	No.1,2,14,16,57,58, 63,64,65,69		○				
基礎看護学援助論Ⅲ (1)単位 (30)時間 1年	清潔・衣生活 援助技術	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 衣服・清潔行動の意義とアセスメントの視点 衣服と清潔行動に関する援助を行う目的 対象の状況に応じた援助の決定と留意点 清潔の援助のための知識と技術					全身清拭 全身浴(入浴・シャワー) 部分浴(足浴・手浴) 洗濯(整容含む) 寝衣交換	No.1,16,19,20,21, 24,25,52,57,58,63,64, 65,69		○			皮膚・粘膜	
基礎看護学援助論Ⅳ (1)単位 (30)時間 1年	活動・休息 援助技術	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 基本的活動の援助を行う目的 ボディメカニクスと基本的体位 対象の状況に応じた援助の決定と留意点 基本的活動の援助のための知識と技術					体位変換・移動の介助 歩行介助 車いすへの移乗と移送 ストレッチャーへの移乗 と移送 ボディメカニクス技術 睡眠の援助	No.1,13,14,15,16,18, 35, 52,57,63,64,65,69, 70		○				
基礎看護学援助論Ⅴ (1)単位 (30)時間 1年	フィジカル アセスメントの基礎	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ ヘルスアセスメントとの関係性 健康歴の聴取 情報の整理とアセスメントツール フィジカルアセスメントの基本技術 バイタルサインの観察とアセスメント 系統別フィジカルアセスメント 看護におけるフィジカルアセスメント					バイタルサイン測定技術 フィジカルアセスメント に必要な技術 問診の技術 系統別アセスメントに 必要な技術	No.30,52,57,63,64		○			フィジカル イグザミネ ションの 基本技術 呼吸音聴診 腸蠕動音 聴診	
基礎看護学援助論Ⅵ (1)単位 (30)時間 1年	臨床判断能力の 実際 (看護過程の展開)	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 健康障害をもつ患者の看護	設定事例に よる	設定事例による	設定事例による	設定事例による	看護過程の展開		情報収集～ 実施・評価 まで			ヘンダーソン	設定事例 による	
基礎看護学援助論Ⅶ (1)単位 (15)時間 2年	与薬の技術	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 与薬の基礎知識と看護師の役割 薬物の管理 与薬の実際(内服、外用薬、注射薬) 患者誤認防止・誤薬防止について					内服薬の与薬 外用薬の与薬 注射薬の与薬 輸液ポンプ	No.38,39,42,45,57, 58,59,60,62,63,64						
基礎看護学援助論Ⅷ (1)単位 (15)時間 2年	症状・生体機能 管理技術 診察・検査・処置の 介助技術	根拠に基づいた看護技術の基礎を身に 付け、対象となる人が安全・安楽で自立に 向けた療養生活を送るための看護を学ぶ 検体検査の援助の基礎知識と実際 検査・処置の種類と看護師の役割 針刺し事故防止策				検体検査 X線検査 CT・MRI検査 内視鏡検査 超音波検査 心電図検査 穿刺検査	検査の介助 静脈血採血	No.51,53,55,56,57, 58,59,60,62,63,64						
基礎看護学実習Ⅰ (1)単位 (30)時間 1年		受け持ち患者の健康障害がその人の生活に 及ぼす影響を理解し、看護の目的に応じた 日常生活援助を実践する	受け持ちに よって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま	No.1,2,57,58,59,60, 62,63,64,65,66,69,71		○	○		受け持ち によって さまざま	
基礎看護学実習Ⅱ (2)単位 (80)時間 1年		受け持ち患者の健康障害がその人の生活に 及ぼす影響を理解し、その人らしい生活を 送るための看護を実践する	受け持ちに よって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま	受け持ちによって さまざま	No.1,2,3,7,13,14,15, 16,19,20,21,22,24,25, 26,29,50,52,57,58,59, 60,61,62,63,64,65,66 67,69,70,71	○	○	○	ヘンダーソン	受け持ち によって さまざま	

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ずる

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学概論	1	30	1年		30	100%	上原奈々 (看護師臨床経験11年)
目的 看護の基礎となる主要概念（人間・健康・環境・看護）を理解し、常に看護とは何かを考え続ける素地を作る 目標 看護とは何かを自分の言葉で表現する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	看護とは 看護のイメージを言葉にしてみる 生活体験の中から看護を考えてみる 社会の中での看護を考えてみる	講義 GW	11～13	倫理綱領 法的責任 看護者の倫理綱領 看護実践における倫理	講義 GW		
2	人間を感じる書籍の紹介	講義 GW	14	保健医療福祉チームとは 看護師の役割と機能 保健医療活動の実際 診療報酬 法的責任	小テスト		
3～5	人間・健康・環境・看護とは	講義 GW					
6～10	看護理論について 看護理論とはなにか	講義 GW	15	今回の学習内容を俯瞰しよう レポート「この授業で掴んだ私の看護観」	講義 GW		
看護師教育の技術項目							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題+ループリック） 小テスト・レポート							
教科書・参考書など ・看護学概論 ・看護覚え書 医学書院 現代社 ・看護の基本となるもの 日本看護協会出版会							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護師キャリア探究Ⅰ	1	30	1年	臨床判断能力の基礎Ⅰ	30	100%	岡村 裕美 (看護師臨床経験13年)
目的 看護の対象となる人間を理解し看護実践の基礎的能力を養うため、なりたい看護師像に向かってキャリアを育てていくための看護師としての思考の基盤を作る							
目標 1 よりよい看護実践のために必要な知識は何かを考え、看護に活用できる知識として整理できる 2 臨床判断モデルを活用して自分の看護の思考を客観視し、言語化することができる 3 なりたい看護師像に向かう自己と向き合い、看護師のように考える思考に近づけるよう主体的に学習に取り組んでいる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1・2	準備・テーマゴール 「看護とは何か」 「看護における臨床判断とは何か」を再考する 看護する自分を見つめ直す 自分の現状と課題を確認する	講義 演習	5～12	情報リサーチ 実践（基礎看護学実習）を意味づける 印象に残った看護場面と場面からの気づきを言語化し自分の思考を客観視する 提示された事例について、症状や健康状態の経過から対象の状態を理解し、対象のおかれている状況に合わせた看護を実践して振り返り、よりよい看護実践につなげる思考を深める	講義 演習		
3～4	計画 看護を実践する自分を客観視できる自分になるために、実習に向けて計画を立てる 実習で看護を実践する自分をイメージできるよう意見交換する ビジョンゴールの設定 実践後は自分の看護を俯瞰し、題材に向かう思考を深める	講義 演習	13	制作 プレゼンテーション	講義 演習		
			14～15	再構築・凝縮ポートフォリオ 成長確認・自己評価 看護実践を再考し、題材に向かう自分の思考を深め、自己の成長を確認する			
看護師教育の技術項目							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック）							
教科書・参考書など 各自必要な書籍							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護師キャリア探求Ⅱ	1	30	2年	臨床判断能力の 基礎Ⅱ	30	100%	加藤有希子 (看護師臨床 経験6年) 安河内なつき (看護師臨床 経験5年)
目的 なりたい看護師像に向かうため自己の課題と向き合い、臨床判断能力を養う							
目標 1 予期する、気付くための知識として何が必要か考えることができる 2 知識をもとに、根拠を持って必要な看護を考えられる 3 患者モデルを用いて実践し、自己の看護について省察して課題を見出し、その後の看護につなげることができる 4 自己の看護の思考を客観視し、言語化することができる。その積み重ねから、自己の看護観を育むことができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	この授業について・準備のフェーズ ～自己の現状と課題を整理する 現在の看護師像を確認 臨床判断とは(タナー)		GW	14	再構築		演習
2・3	準備のフェーズ ～事例の状況について学習 技術の実践に向けて準備 ビジョン・ゴールの設定		GW	15	成長確認・まとめ		講義
4～11	計画・情報・リサーチ ～事例の状況を理解し、 看護を実践する 実施後は自己の思考プロセスを 振り返る		GW 演習				
12・13	制作・プレゼンテーション ～自己の課題解決に向けた 思考プロセスを他者に伝える		演習				
看護師教育の技術項目							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス課題を用いたルーブリック評価							
教科書・参考書など 各自必要な書籍							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅰ	1	30	1年	感染予防の技術	10	30%	根本 美樹 (看護師臨床経験9年) 中村 保乃 (看護師臨床経験31年)
				食事援助技術	10	35%	
				排泄援助技術	10	35%	
目的 看護を実践するために必要な基本技術を学ぶ 日常生活行動の支援に必要な基礎的知識・技術・態度を習得する							
目標 感染予防の技術 1 感染防止の基礎的知識・技術について習得する 2 援助場面における危険性を認識し、安全を守るために必要な知識・技術・態度について学ぶ 食事援助の技術 1 健康な生活を送るための適切な食事（栄養）について学び、食事の意義・看護の役割を理解する 2 食事の摂取方法を知り、適切な援助の方法を習得する 排泄援助の技術 1 排泄の意義と重要性を理解し、援助を受ける対象のニーズがわかる 2 排泄行動障害について理解し、状態に応じた排泄の方法・援助の方法を選択できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1・2	感染予防の技術 感染予防に必要な基礎知識 スタンダード・プリコーションについて		講義	11～12	排泄援助の技術 排泄の意義 排泄の生理的メカニズム 排泄のニーズのアセスメント		講義
3	感染予防の実際		演習	13～15	排泄のニーズのアセスメント 自然排尿・排便を促す援助の実際 床上での便器・尿器を用いた排泄 の援助技術		講義 演習
4	無菌操作・滅菌物の取扱い		演習				
5	医療場面における感染（危険性） 安全を守るための感染防止		講義				
6	食事援助の技術 食事・栄養の意義		講義				
7	食事・栄養に関する基礎的知識		講義				
8	栄養状態のアセスメント		講義				
9・10	食事・栄養に関する援助の実際		演習				
看護師教育の技術項目 1,3,7,14,15,16,52,57,58,59,60,61,62,63,64,65,69							
地域との関連							
評価方法 筆記試験、その他提出課題							
教科書・参考書など ・基礎看護技術Ⅰ、Ⅱ 医学書院 ・根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 ・看護学概論 医学書院 ・地域・在宅看護論2 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅱ	1	30	1年	環境調整技術	30	100%	岸本 佳子 (看護師臨床経験18年)
目的 根拠に基づいた看護援助技術の基礎を身に付けることで対象となる人が安全・安楽で自立に向けた療養生活を送るための援助ができる							
目標 人間にとっての環境の意味を理解し、生活環境を整えるための知識と援助方法を習得する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	看護において環境を調整する意義	講義					
2	療養生活における環境						
3～6	病床を整えるための基本技術 ・ベッドメイキング ・病床の整備	演習					
7～8	療養環境のアセスメントと援助の実際① ・事例を通して、その対象にとって快適な療養環境について考える ・事例患者にとって快適な療養環境の整備	講義 演習					
9～12	臥床患者のリネン交換 療養環境のアセスメントと援助の実際② ・事例による臥床患者のベッドメイキング	演習 演習					
13～14	基本的なベッドメイキングの習熟度を確認する	演習					
15	振り返り						
看護師教育の技術項目 1,2,14,16,57,58,63,64,65,69							
地域との関連							
評価方法 技術チェック（ベッドメイキング）、 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ループリック）							
教科書・参考書など ・基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ 医学書院 ・看護の基本となるもの 日本看護協会出版会 ・根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 ・ヘンダーソンの基本的看護に関する看護問題リスト ヌーヴェルヒロカワ ・看護覚え書 現代社 ・看護学概論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅲ	1	30	1年	清潔・衣生活 援助技術	30	100%	根本 美樹 (看護師臨床経験 9年)
目的 根拠に基づいた看護援助技術の基礎を身に付けることで、対象となる人が安全・安楽で自立に向けた療養生活を送るための援助ができる							
目標 人間にとっての清潔の意味を理解し、自然治癒力を高めるための清潔の知識と援助方法を習得する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～2	身体の清潔の意義・衣服のもつ意義について理解できる	講義					
3～4	心地よい湯の温度について考える 心地よいタオルの使い方を考える 基本的な寝衣交換の方法	演習					
5～6	基本的な全身清拭の方法	演習					
7～8	基本的な洗髪の方法	演習					
9～10	基本的な足浴の方法	演習					
11～12	事例患者の清潔のニーズを充足する援助を考える①	演習					
13～14	事例患者の清潔のニーズを充足する援助を考える②	演習					
15	対象の状況に合わせた清潔の看護とは何かを考えることができる	講義					
看護師教育の技術項目 1, 16, 19, 20, 21, 24, 25, 52, 57, 58, 63, 64, 65, 69							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス評価(パフォーマンス課題＋ルーブリック)							
教科書・参考書など ・基礎看護技術Ⅱ 医学書院 ・根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 ・看護学概論 医学書院 ・看護の基本となるもの 日本看護協会出版会 ・ナイチンゲール看護覚え書 現代社							
備考・履修条件など							

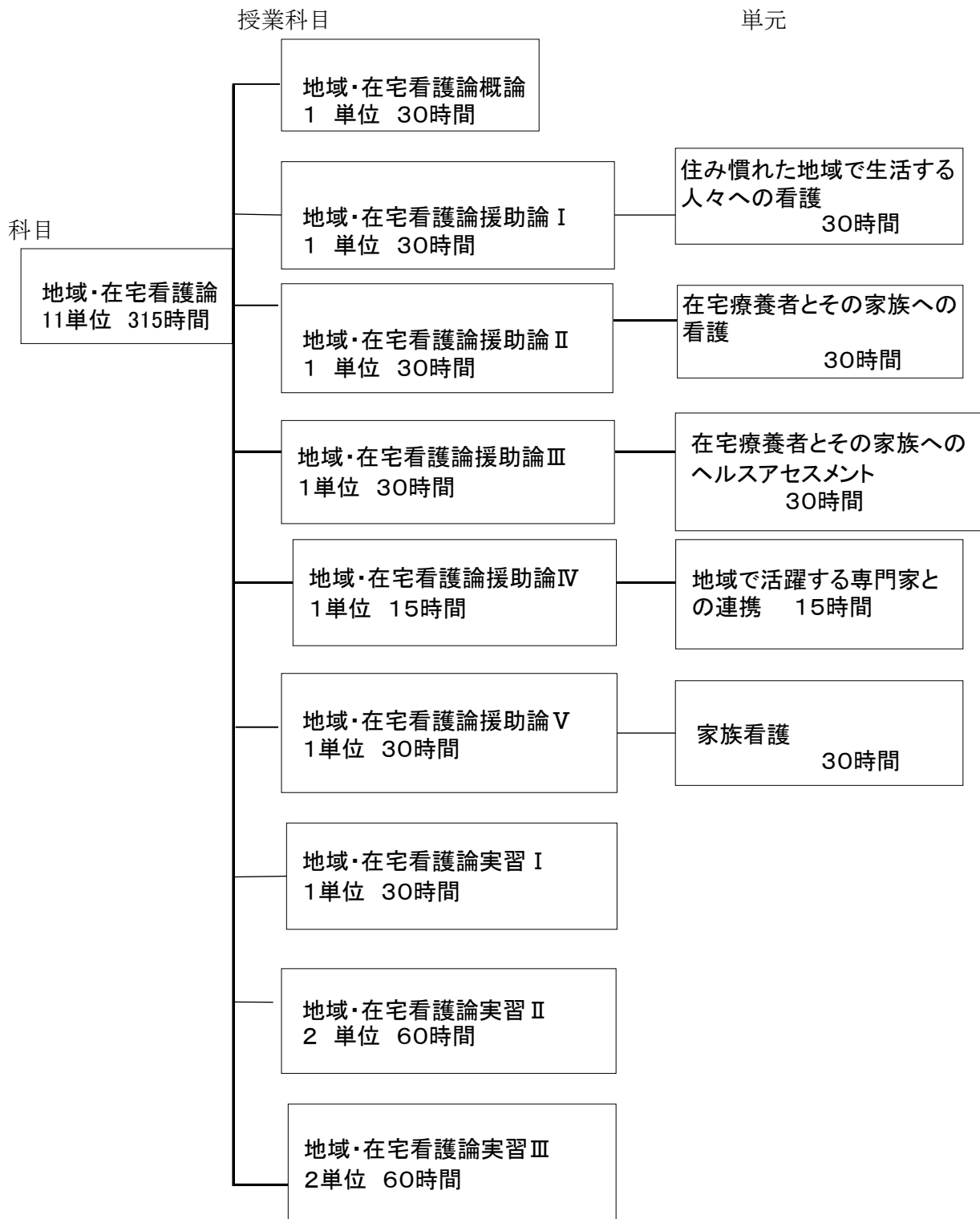
授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅳ	1	30	1年	活動・休息援助 技術	30	100%	岡村 裕美 (看護師臨床 経験13年)
目的 根拠に基づいた看護援助技術の基礎を身に付けることで、対象となる人が安全・安楽で自立に向けた療養生活を送るための援助ができる							
目標 1 疾患などにより日常生活行動に支障を来した対象の活動・休息を整えるための基礎的な知識を整理し、基本的な技術を習得できる 2 看護技術の基礎的な知識と基本的な方法を基に対象の状況に合った看護について考えながら活動・休息援助における技術力を高める取り組みができる 3 自己の力と学習への取り組みを客観的に振り返ることができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	日常生活を送る人の動きを助け、生活を整えるための援助とは何かを考える	講義	8・9	基礎的な知識と基本技術の習得状況の確認（技術チェック）	演習		
2	対象の活動を整えるための基礎的な知識	講義	10・11	対象の療養生活の中の活動・休息の援助を考える②	演習		
3	対象の療養生活の中の活動・休息の援助を考える①	演習	12～14	対象の療養生活の中の活動・休息の援助を考える③	演習		
4～7	対象の活動を整えるための基本技術 体位変換、ポジショニング 車椅子移乗・車いす移送 ストレッチャー移送 歩行介助	演習	15	まとめ	講義		
看護師教育の技術項目 1,13,14,15,16,18,35,52,57,63,64,65,69,70							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック）							
教科書・参考書など ・基礎看護技術 II 医学書院 ・看護学概論 医学書院 ・根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅴ	1	30	1年	フィジカルアセスメントの基礎	30	100%	丸野 美生 (看護師臨床経験8年)
目的 根拠に基づいた看護援助技術の基礎を身に付けることで、対象となる人が安全・安楽で自立に向けた療養生活を送るための援助ができる							
目標 1 援助に活かすフィジカルアセスメントを行うための基礎的な知識が整理できる 2 援助に活かすフィジカルアセスメントを行うための基本的な技術を習得できる 3 必要な知識と基本的な技術を使い、援助に活かす系統的フィジカルアセスメントについて考えながら技術力を高める取り組みができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～2	フィジカルアセスメントとは何か 看護におけるフィジカルアセスメントの位置づけ バイタルサインの意味と測定の目的 バイタルサイン測定技術 (呼吸・脈拍・血圧・体温・意識)	講義 演習	11～14	循環のフィジカルアセスメント ・循環の観察方法 ・事例を用いた循環の観察 ・観察から考える循環のフィジカルアセスメント	講義 演習 講義		
3～4	バイタルサイン測定技術の確認	講義 演習	15	総合演習	演習		
5	援助に活かすためのフィジカルアセスメントの基本技術	講義 演習		呼吸・腹部・循環の観察技術を用いて、演習計画を立案し演習に取り組む			
6～8	呼吸のフィジカルアセスメント ・呼吸の観察の方法 ・事例を用いた呼吸の観察 ・観察から考える呼吸のフィジカルアセスメント	講義 演習 講義					
9～11	腹部のフィジカルアセスメント ・腹部の観察方法 ・事例を用いた腹部の観察 ・観察から考える腹部のフィジカルアセスメント	講義 演習 講義					
看護師教育の技術項目 50,52,57,63,64							
地域との関連							
評価方法 筆記試験・実技試験・授業内提出物							
教科書・参考書など ・基礎看護技術Ⅰ 医学書院 ・根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 ・看護学概論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅵ	1	30	1年	臨床判断能力の 実際 (看護過程の展開)	30	100%	根本 美樹 (看護師臨床経験9年)
目的 科学的な看護実践を目指すために、臨床判断能力の元となる看護過程展開技術を学習する							
目標 1 看護過程を活用する意義を理解する 2 対象をみる看護の視点が理解できる 3 事例の対象に対しヘンダーソンの理論を用いたアセスメントの視点から看護の方向性を見いだすことができる 4 看護問題を明確にし、優先順位の決定ができる 5 看護目標を設定し、アセスメントに基づいた計画立案ができる 6 実施した援助を振り返り、記録・評価ができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	看護過程とはなにか 構成要素 看護過程を展開する際に基盤となる考え方		講義	8	アセスメントまとめ		講義 演習
2	看護過程の各段階 ①アセスメント（情報の収集と分析）		講義	9 10	全体像をとらえる① 全体像をとらえる②		講義 演習
3	②アセスメント ヘンダーソンの理論を用いた事例展開 常在条件・病理的状态 体力・意志力・知識		講義 演習	11 12 13	看護問題の明確化 看護計画の立案① 看護計画の立案②		講義 演習 講義 演習
4	③アセスメント 基本的欲求 1～3		講義 演習	14	実施と評価 看護記録		講義
5	④アセスメント 基本的欲求 4～6		講義 演習	15	まとめ		講義
6	⑤アセスメント 基本的欲求 7～11						
7	⑥アセスメント 12～14						
看護師教育の技術項目							
地域との関連							
評価方法 筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 看護学概論 医学書院 栄養学 医学書院 臨床看護総論 医学書院 薬理学 医学書院 看護の基本となるもの 日本看護協会出版会 ヘンダーソンの基本的看護に関する看護問題リスト ニューヴェルヒロカワ							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
基礎看護学援助論Ⅷ	1	15	2年	症状・生体機能 管理技術 診察・検査・処置の 介助技術	15	100%	藤本一輝 (看護師臨床 経験9年)
目的 看護業務の1つである診療の補助業務に関する基礎的な知識・技術・態度について学習する							
目標 1.保健師助産師看護師法に基づく、診療の補助業務について理解する 2.診療のプロセスとは何かを学び、各プロセスに必要な看護技術を学習する 3.検査場面における看護の役割および、検体採取の実際について学習する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	診察の介助と目的	講義	7	演習 (静脈血採血演習)	演習		
2	診察・検査の介助における看護とは 生体検査（画像検査）	講義	8	演習 (静脈血採血演習)	演習 講義		
3	生体検査 内視鏡検査 超音波検査（エコー検査） 肺機能検査(スパイロメトリー)	講義		これまでの授業の振り返り			
4	生体モニタリング 心電図モニター、SpO2モニター 血管内留置カテーテルモニターを使用した モニタリング	講義					
5	検体検査 尿、便、痰、核医学検査 胸腔穿刺、腹腔穿刺、腰椎穿刺、骨髄穿刺	講義					
6	検体検査 (静脈血採血手技、手順、演習説明)	講義					
看護師教育の技術項目 51.53.55.56.57.58.59.60.62.63.64							
地域との関連							
評価方法 筆記試験、授業参加、演習など総合的に判断し評価します							
教科書・参考書など 基礎看護技術Ⅱ（医学書院） 看護学概論（医学書院）							
備考・履修条件など							

地域・在宅看護論の構成



地域・在宅看護論の考え方

1. 教材観

少子化・高齢社会が加速度的に進む中、人は皆、地域で生活を営んでいる。疾病や障害があっても生活の質を維持し、その人らしい暮らしが維持できるように、地域包括ケアシステムを基盤にビジョンが描かれ看護師の役割も広がりを見せている。新カリキュラムとなり在宅看護論からさらに発展し、地域・在宅看護論として、社会の動向を反映し現在だけではなく将来も見据え、地域に根差した暮らしの中での看護の考え方を軸に置いている。看護の対象者と家族が健康障害を持ちながらもその有する能力に応じ、自立した日常生活を営むことができるよう、QOLの向上のためにも必要な社会資源やサポートシステムを利用しながら在宅で生活することを支えることが必要なのである。

地域・在宅看護論では、対象者の広がりやをまず捉える必要がある。年齢ではすべての人が対象となるが、小児、認知症、精神疾患、難病、生活が影響する疾患など特徴的な疾病がある療養者は増えている。また、医療管理の必要な人も増えている。どんな疾患があってもその人らしい生活ができるように整えていくのである。そして看護の視点は、療養者だけではない。家族看護の視点が重要である。介護力のアセスメント、家族間の調整などといったマネジメントも欠かせない。その上で、療養者、家族の主体性の尊重である。価値観の尊重や、意思決定や社会参加の支援、自立支援も大切となる。いわば看護師は、療養者と家族のパートナーである。看護の場の拡大も重要である。継続看護の視点で、入院してもいかにしたら在宅に戻れるかを考える。施設に入所しても多職種連携を図りながら、その人らしい生活を考える。そして、日頃から危機管理、リスクマネジメントの視点で考えていく。すべて地域包括ケアシステムが基盤にある。療養の場の移行や多職種連携を含め、地域・在宅における看護師の役割を学び取る。

科目構成としては11単位315時間とする。内、臨地における実習は、5単位150時間である。地域・在宅看護概論では、地域包括ケアシステムの構築から、在宅看護の概念や在宅看護の特徴を教授する。在宅看護においては、社会福祉学をはじめ諸制度についての理解が求められる。その上で、学生の視点を施設から在宅へと移行する対象者の生活に向かわせ、保険制度の仕組みに興味・関心をもたせる。在宅看護の対象となる療養者と家族はあらゆる発達段階にある。このため、発達段階については各専門領域において教授しているが、この科目においては療養者を支える家族の理論について主に教授する。

地域・在宅看護論Ⅰでは、入学して間もない学生ではあるが、これからの看護を学ぶ者として地域包括ケアシステムを理解しながら、地域の特性を知り、住み慣れた地域で安心して生活するための支援を考える。対象の主体性の尊重、意思決定、価値観の尊重、社会参加を考え生活者として捉えることを意識させる。地域・在宅援助論Ⅱでは、日常生活援助技術について基礎看護学履修内容を想起しながら家庭における工夫や技術の応用を考えさせ援助を教授する。また、社会背景を受け医療依存度の高い療養者への医療処置に伴う援助指導についても教授する。地域・在宅援助論Ⅲでは、在宅看護におけるヘルスアセスメント技術およびリスクマネジメントを教授し、在宅看護の特徴の理解を定着させる。地域・在宅看護論Ⅳでは、地域で活躍する専門家との連携を学ぶ。ケアマネジメント、サービス担当者会議など演習を通して、地域包括ケアシステムと保健・医療・福祉の連携を考える。その上であらためて在宅における看護過程のプロセスを通して、療養者および家族のニーズ、状況を踏まえ抽出した問題点の解決・軽減のための看護を明確にし、臨床判断能力の実際を通して看護師の役割を認識する機会とする。在宅援助論Ⅴでは、プロジェクト学習を通して在宅看護の特徴を想起させ家族看護の視点での看護を展開する方法を教授する。受け持ち患者とその家族における家族看護を題材とした学科プロジェクトを実施していく。

授業の中で、丁寧にフェーズを追うことでプロジェクトの意味を落とし込む。療養者と家族がお互いに影響しあう存在であることを意識し、座学と実習をつなげて考えていける機会としていく。

臨地実習として、地域・在宅看護論実習Ⅰでは、地域実習（介護老人保健施設・介護老人福祉施設・介護医療院）とし、地域における施設の役割を理解し、施設で生活されている高齢者とのコミュニケーションや日常生活援助を通して高齢者の生活史や価値観を理解し、多職種との協働を学ぶ。地域・在宅看護論実習Ⅱでは、地域実習（デイサービス/デイケア・包括介護支援事業所など）とし、地域社会に果たす施設の役割や多職種との連携について考え、地域におけるより良い生活と健康・成長発達・自立のための活動の実際を学ぶ。地域・在宅看護論実習Ⅲでは、訪問看護、看護小規模多機能施設での実習とし、在宅療養者とその家族への関わりや看護師の看護を通して、観察の必要性和看護における行動の意図や影響について考え、在宅で生活されている方への必要な看護について学ぶ。

これからの社会に必要とされる看護師像として、自ら考え、判断し、人々の健康を守る行動ができる看護師、自律的・専門的に行動できる看護師、チーム（医療チーム、地域包括ケアチーム）の中で協働できる看護師が求められる。保健・医療・福祉の変化の中で、看護基礎教育においてクリティカルケア教育の充実、様々な職種の役割認識と協働の在り方、地域包括ケアシステム・社会資源の理解、在宅看護教育の充実が求められている。地域・在宅看護論ではこれら看護基礎教育に求められる内容を意識して、集大成の位置付けとして学生とともに考えていかななくてはならない。これまでの詰め込み式の知識だけではなく、思考・判断力それを活かした行動力が求められる。看護師基礎教育における在宅看護として、教育内容を質・量ともに充実させて、学生に興味を持ってもらい、卒後すぐに訪問看護の希望があれば受け入れ、卒後継続教育のシステム化を図る必要もある。これからの人材育成を担っている。

地域で療養している人々とその家族の健康生活を支援すること、療養者と家族が生活している地域の保健医療福祉システムの特徴を理解すること、在宅看護の独自の役割を考えるとともに関係職種を含めた地域包括ケアシステムに基づいた協働を考えていくことを修得していくことを目的とする。

2. 学生観

現代の社会的傾向から、核家族化や個人主義のなかで地域との関わりも希薄になっているため他世代の人々との交流が少ない。20歳前後の学生が多い反面、社会人経験のある学生もいる。しかし、生活体験や人生経験が浅く多角的な視野を持って物事をみることが出来ない傾向にある。また活字離れしているといわれており、新聞を読む機会が少なく社会情勢にも関心が薄く、指示待ち族と称される現代の学生にとって、主体的に物事を捉え考えることは苦手である。

地域に根差した生活を送る上での支援を考えると、保健医療福祉に関する制度や仕組みの理解は欠かせない。しかし、健康保険制度・介護保険制度について身近に感じることができず、興味・関心が薄いと考えられる。また、核家族の中で育てられた学生が多く、入院中の対象が自宅や施設に退院し自宅で療養生活を送るイメージは、つきにくいと考えられる。

3. 指導観

介護保険制度は日々改革が進み、時代の流れとともに改定されており、利用者や家族も把握できない状況である。したがって、対象に合ったケアを提供するためにも、看護者はその制度を理解し、最新の情報を知っておく必要がある。地域・在宅看護論概論では、在宅看護の変遷や在宅看護の必要性について学習したうえで、在宅看護の成立の条件を学び、療養者や家族が地域で生活するために必要な諸制度について学ばせたい。そこで、教材は特に難しい内容は視覚的に訴え、教材の工夫が必要である。また、教

員の体験談や具体的な事例を提示することで、身近に感じやすいよう配慮する。地域・在宅看護論Ⅰでは、1年次入学して間もない時期ではあるが、地域包括ケアシステム構築を学び、地域で安心してその人らしく暮らすこととは何かを理解し、その支援について、実際に地区踏査演習を通して考えていき機会とする。地域・在宅看護援助論Ⅱでは、療養者や家族が在宅生活を継続するための体制や方法および生活支援技術演習を通し、履修内容を想起させ家庭での工夫についても学ばせたい。主体的に考えられない学生や生活体験が乏しい学生にとって、家庭での工夫や応用などを通しての在宅看護技術は、イメージしにくいと思われる。そこで、援助方法は一つではなく、多岐にわたることをしっかりと考えながら創造力を養い伸ばしていく。地域・在宅看護援助論Ⅲでは、1年次に履修したフィジカルアセスメントの基礎をもとに訪問看護師の行うフィジカルアセスメントの特徴をふまえ、事例を設定しアセスメントの内容理解を図りたい。また、在宅看護の特殊性を踏まえリスクマネジメント能力を養っていきたい。地域・在宅看護論Ⅳでは、地域で活躍する多職種との連携を学ぶことであらためて看護を見つめ、看護の役割を考える機会とする。地域・在宅看護論Ⅴでは、丁寧にフェーズを追うことでプロジェクトの意味を落とし込み、同時に在宅における大切な人を守る意味をつなげて考えていく機会とする。地域・在宅看護論実習では、発達段階や健康の段階も様々な療養者や家族と出会う。訪問看護では他者の自宅へ行き来する経験が乏しい学生にとっては療養者宅への訪問は緊張の強い実習となる。その状況下においても療養者や家族が抱えている問題に気づき、問題解決のためにはどのような援助や支援が必要かを考えられるよう、教員と指導者間での連携を図る必要がある。どの実習場においても在宅での生活が継続できるよう、どのようなサポートシステムを受けながら生活を送っているか多角的な視点で捉えることができるよう学習内容と関連させ臨めるようにしたい。社会的な背景から在宅看護へのニーズは高まっている。地域・在宅看護論実習のみならず、他領域臨地実習においても、継続看護の視点を常に持ち続けられるよう臨地との連携を図る必要がある。

在宅看護論領域における重点目標

地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる

目的

疾病や障害をもちながら地域で療養生活をする人々とその家族を理解し、在宅で充実したその人らしい生活を支えるために必要な基礎的知識・技術・態度を養う

目標

1. 在宅看護の変遷を学び、在宅看護の目的・役割が理解できる
2. 在宅看護に関連する保健・医療・福祉の内容を理解し、地域で暮らす人々の健康課題を多職種と共有し、ともに解決に向けたかかわりを考えることができる
3. 在宅看護の対象となる療養者と家族について理解できる
4. 在宅看護に必要な援助技術を習得し、療養者と家族に応じた看護が実践できる
5. 社会の動向を捉え、在宅看護の社会的役割を探究する姿勢を習得する
6. 地域包括ケアシステムにおける看護師の役割について明確化できる
7. 地域に暮らす人々の健康と暮らしを守る看護師の役割を認識することができる

地域・在宅看護論のマトリックス

科目		講義内容							関連理論					関連科目		
地域・在宅看護論概論 (1)単位 (30)時間 1年		1. 地域包括ケアシステムの機能 2. 生活の場に応じた看護 3. 在宅看護の対象者 4. 在宅看護の対象者の生活 5. 自立支援と看護 6. 療養の場の移行に伴う看護(退院支援、継続看護) 7. 多職種連携 8. ケアマネジメントと看護の役割 9. 倫理原則 10. 在宅医療と社会保障制度 11. 訪問看護とは 12. 訪問看護の仕組み 13. 地域包括ケアのさらなる推進							家族システム理論 エコマップ エンパワーメント	家族危機理論 パートナーシップ ユマニチュード	家族発達理論 ストレングス プライマリヘルスケア ICF		国語表現法 哲学 心理学 文化人類学 教育学 人間関係論 公衆衛生 社会福祉 関係法規 医療倫理 解剖生理学 生化学 栄養学 薬理学 微生物学 病理学 病態治療論			
援助論			主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程(展開)	ポートフォリオ	プロジェクト	関連理論・その他	フィジカル		
地域・在宅看護論援助論Ⅰ (1)単位 (30)時間 1年		住み慣れた地域で生活する人々への看護	・住み慣れた地域で安心して自らしく暮らす生活・支援とは ・地域包括ケアシステムにおける看護師の役割 ・対象の主体性の尊重へ意思決定、価値観の尊重、社会参加を考え生活者として捉える					・地域包括ケアシステムと保健・医療・福祉の連携 ・地域の特性を知り、住み慣れた地域で安心して生活できるための支援を考える ・対象の主体性を尊重し、生活者の目線で捉える ・地域にある社会資源の活用(地域特性) ・地区踏査演習			○	○	家族システム理論 家族発達理論 家族危機理論 エンバワメント プライマリヘルスケア ヘルスプロモーション 倫理原則			
地域・在宅看護論援助論Ⅱ (1)単位 (30)時間 2年		在宅療養者とその家族への看護	・家族介護者の理解と健康支援 ・在宅における援助技術 ・在宅医療と日常生活援助(食、排泄、清潔、移動) ・褥瘡管理と看護	老衰・がん・終末期 リハビリ 認知症 難病	安静時振戦 固縮 無動・動作緩慢 姿勢・歩行障害に基づく症候 自動運動障害に基づく症候 自律神経系障害に基づく症候	嚥下訓練		環境整備 衣類の選択 移動補助用具 褥瘡ケア 排泄補助用具 膀胱留置カテーテル 通便 入浴 清拭 部分浴 口腔ケア	No.1,3,4,5,6,8,11,16 22,24,25,26,,35, 65		○		家族システム理論 家族危機理論 家族発達理論 ユマニチュード	フィジカルイグザミネーション 嚥下機能 口腔内観察 認知機能評価 日常生活自立度(障害高齢者・認知症高齢者)	援助論Ⅰに準ず	
地域・在宅看護論援助論Ⅲ (1)単位 (30)時間 2年		在宅療養者とその家族へのヘルスアセスメント	・フィジカルアセスメントとヘルスアセスメント ・在宅におけるフィジカルアセスメントの視点 ・病状、病態の予測と看護 ・在宅における危機管理 ・日常生活での安全対策 ・災害時における健康危機管理 ・薬物療法と在宅看護 ・呼吸管理と看護	糖尿病 リハビリ 高次機能障害 老衰・がん・終末期 難病 認知症 COPD	安静時振戦 固縮 無動・動作緩慢 姿勢・歩行障害に基づく症候 自動運動障害・自律神経障害に基づく症候 加齢に伴う現象	感染管理 内服管理 インシュリン療法 呼吸理学療法 気管内カニューレ 在宅酸素療法 在宅人工呼吸器 非侵襲的陽圧呼吸器 在宅経管栄養法 胃瘻		フィジカルイグザミネーション 家族との連携 環境とアセスメント ストーマ管理	No.12,32,33,52 57,58,60,63,64	情報収集 アセスメント	○		ICF 災害サイクル アウトリーチ	フィジカルイグザミネーション 家族との連携 環境とアセスメント ヘルスアセスメント	援助論Ⅰに準ず	
地域・在宅看護論援助論Ⅳ (1)単位 (15)時間 2年		地域で活躍する専門家との連携	・地域包括ケアシステムとチーム医療 ・ケアマネジメント/サービス担当者会議 ・在宅看護における臨床判断能力の実践	脳血管性障害 リハビリ 高次機能障害 老衰・がん・終末期 難病 認知症	姿勢・歩行障害に基づく症候 自動運動障害・自律神経障害に基づく症候 加齢に伴う現象			・地域包括ケアシステムと保健・医療・福祉の連携 ・ケアマネジメント演習(サービス調整) ・サービス担当者会議演習 ・在宅看護における看護過程の展開	情報収集 アセスメント 看護計画立案 実施 評価(モニタリング) (ケアマネジメント)		○		ICF 社会保障制度 継続看護 ケアマネジメント 機能的健康パターン(ゴードン) ニード論	インテーク	援助論Ⅰに準ず	
地域・在宅看護論援助論Ⅴ (1)単位 (30)時間 3年		家族看護	今までの実習で受け持った患者を通して在宅ケアを継続するための支援を学ぶ	受け持ちによってさまざま	受け持ちによってさまざま	受け持ちによってさまざま				○	○	○	家族システム理論 家族危機管理 家族発達理論 ヘンダーソン14の基本的ニード 機能的健康パターン(ゴードン)	家族との連携 環境とアセスメント ヘルスアセスメント	援助論Ⅰに準ず	
地域・在宅看護論実習Ⅰ (1)単位 (30)時間 2年		地域実習(介護老人福祉施設・介護老人保健施設・介護医療院)	地域における施設の役割を理解し、施設で生活されている高齢者とのコミュニケーションや日常生活援助を通して高齢者の生活史や価値観を理解し、多職種との協働を学ぶ	受け持ちによってさまざま	受け持ちによってさまざま	内服管理 在宅酸素療法 嚥下訓練 胃瘻など 受け持ちによってさまざま		ヘルスアセスメント 環境整備 衣類の選択 移乗・移動の介助 排泄介助 食事介助 清潔保持	No.57		○	○	○	家族システム理論 家族危機管理 家族発達理論 ニード論 ゴードンの11パターン	フィジカルイグザミネーション	援助論Ⅰに準ず
地域・在宅看護論実習Ⅱ (2)単位 (60)時間 3年		地域実習(デイサービス・デイケア、包括介護支援事業所など)	地域社会に果たす施設の役割や多職種との連携について考え、地域におけるより良い生活と健康・成長発達・自立のための活動の実践を学ぶ	健康・発達段階によってさまざま	健康・発達段階によってさまざま	健康・発達段階によってさまざま		ヘルスアセスメント 環境整備 排泄介助 食事介助 清潔保持 成長発達に応じた対応 遊び	No.57			○	○	家族システム理論 家族危機管理 家族発達理論 ニード論 ゴードンの11パターン ICF 児童福祉法	フィジカルイグザミネーション	援助論Ⅰに準ず
地域・在宅看護論実習Ⅲ (2)単位 (60)時間 3年		訪問看護・看護小規模多機能型居宅介護・グループホーム	在宅療養者とその家族への関わりや看護師の看護を通して、観察の必要性和看護における行動の意図や影響について考え、在宅で生活されている方への必要な看護について学ぶ	学生が選択		内服管理 インシュリン療法 呼吸理学療法 気管内カニューレ 在宅酸素療法 在宅人工呼吸器 非侵襲的陽圧呼吸器 嚥下訓練法 在宅経管栄養法 胃瘻		ヘルスアセスメント 環境整備 衣類の選択 移乗・移動の介助 褥瘡ケア 排泄介助 膀胱留置カテーテル管理 通便 入浴・部分浴 清拭	No.50,52,57,64,65,71		○	○	○	家族システム理論 家族危機管理 家族発達理論 ニード論 ゴードンの11パターン ICF	フィジカルイグザミネーション	援助論Ⅰに準ず

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ず

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論概論	1	30	1年		30	100%	下清水亜由美
地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる							
目的							
地域・在宅看護の概要についてイメージ化が図れるよう、在宅看護全体にわたっての概要を学習する							
目標							
1 在宅看護の概念と変遷を学び、在宅看護の目的・役割が理解できる							
2 地域包括ケアシステムについての概要と看護師の役割を理解できる							
3 在宅看護に関連する保健・医療・福祉の内容と連携の必要性が理解できる							
4 在宅看護の対象を理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1・2	在宅看護の概念 1) 在宅看護の背景 2) 在宅看護の基盤 3) 地域療養を支える在宅看護の役割と機能 4) 在宅看護の倫理と基本理念 5) 在宅看護における倫理		講義	10～13	地域療養を支える制度 1) 社会資源の活用 2) 医療保険制度 3) 後期高齢者医療制度 4) 介護保険制度 5) 生活保護制度 6) 障がい者に関連する法律 7) 難病法 8) 子どもの療養を支える制度と社会資源 9) 在宅療養者の権利を擁護する制度と社会資源 10) 高齢者施策		講義
3～5	地域包括ケアシステムにおける在宅看護 1) 地域包括ケアシステム 2) 療養の場の移行に伴う看護 3) 地域包括ケアシステムにおける多職種・他機関連携 4) 在宅看護におけるケースマネジメント/ケアマネジメント		講義	14・15	事例に基づきその人らしくその方の願いに添った地域での暮らしを考える		講義 発表
6～9	在宅療養を支える訪問看護 1) 訪問看護の特徴 2) 在宅ケアを支える訪問看護ステーション 3) 訪問看護サービスの展開 4) 訪問看護の記録		講義				
看護師教育の技術項目							
地域との関連							
地域連携室 訪問看護ステーション 居宅介護支援事業所 診療所 地域包括支援センター 行政 地域のボランティア など							
評価方法							
筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など							
地域・在宅看護の基盤 医学書院 看護学概論 医学書院 成人看護学総論 医学書院 老年看護学 医学書院 看護覚え書 現代社 …など各自が必要と思う参考書							
地域・在宅看護の実践 医学書院 精神看護の基礎 医学書院 母性看護学概論 医学書院 小児看護学概論・小児臨床看護総論 医学書院 家族看護学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論援助論Ⅰ	1	30	1年	住み慣れた地域で生活する人々への看護	30	100%	西川あゆみ
地域で暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる							
目的 地域包括ケアシステムを理解しながら、地域の特性を知り、住み慣れた地域で安心して生活するための支援を学ぶ。対象の主体性の尊重、意思決定、価値観の尊重、社会参加を考え生活者としての捉え方を学ぶ。							
目標 1 地域包括ケアシステムについて説明できる 2 地域で暮らす人を捉え、住み慣れた地域で安心して生活するための支援を考えることができる 3 プロジェクト学習とは何かが分かり、学習の進め方を体験を通して学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1 2 3	【準備・テーマゴール】 「大切な人が住み慣れた地域で安心して暮らすことができるための方法を看護学生としてできることを考える」 ・プロジェクト学習の進め方		講義 演習	13 14	【再構築】 他者の意見を取り入れ、大切な人が地域でその人らしく安心して暮らす方法をさらによりよくするために深めまとめる。倫理的に考えを深める。		講義 演習
4 5 6 7	【計画】 ゴールをかなえるために必要な情報や行動を考え、計画を立てる 【情報リサーチ】 問題を解決するための情報を獲得し、具体的にどうしたらよいか考える 看護学生として出来ることを考える中で、対象の主体性尊重、意志決定、価値観の尊重、社会参加を意識した具体的な方法を考えていく 場合によっては地域踏査を行う		講義 演習 講義 演習	15	【成長確認】 この授業・プロジェクトを通して自分の成長したところを見出す まとめ		講義 演習
8 9 10	【制作】 情報リサーチで得たことや、考え出したものをまとめ他者にプレゼンテーションができるようにまとめる		講義 演習				
11 12	【プレゼンテーション】 他者に役立つ、大切な人が地域で安心して生活できる方法をプレゼンテーションを行う。また、他者から得た学びを深める機会にする		演習				
看護師教育の技術項目							
地域との関連 地域包括支援センター 行政 地域のボランティア など							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック）							
教科書・参考書など 地域・在宅看護の基盤 医学書院 地域・在宅看護の実践 医学書院 課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法 教育出版 ポートフォリオシート集・解説書 教育同人社							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論援助論Ⅱ	1	30	2年	在宅療養者とその家族への看護	30	100%	西川あゆみ
地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる 目的 地域における多様な場で生活する療養者とその家族の健康とくらしを守る。							
目標 療養者とその家族が、住み慣れた場でその人らしく暮らすための在宅看護について考え必要な援助を実践できる。							
授業内容・授業方法 事例に基づきグループで展開し実践する。グループにてお互いの考えを共有する。							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	導入 在宅で生活する療養者とその家族の看護とは	講義		2～14の演習について ※看護①については、在宅看護において ・口腔ケア ・食事介助 ・膀胱留置カテーテル ・入浴 についての技術を演習する			
2～5	パーキンソン病の理解 パーキンソン病療養者とその家族の看護①	講義 GW 演習					
6～9	在宅療養中の患者の介護 その家族の看護②	講義 GW		※看護②については、在宅看護において ・在宅経管栄養法 ・褥瘡のケア ・体位変換 ・摘便 ・清拭 ・洗髪 についての技術を演習する			
10～12	生活ケア (食事・排泄・清潔・移動など) 医療的ケア (服薬・化学放射線療法・在宅酸素 人工呼吸療法・経管栄養・褥瘡予防)	講義 GW 演習					
13 14～15	総復習 演習・まとめ 今回の学習内容を俯瞰しよう。	講義 GW 演習					
看護師教育の技術項目 No. 1,3,4,5,6,8,11,16,22,24,25,26,35,65							
地域との関連 保健・医療・福祉に関わる関係機関と関係職種の連携、訪問看護 社会資源(フォーマル、インフォーマルサービス)、地域見守りネットワーク							
評価方法 筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など ・地域・在宅看護の基盤 医学書院 ・地域・在宅看護の実践 医学書院 ・写真でわかる 訪問看護アドバンス インターメディカ							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論援助論Ⅳ	1	15	2年	地域で活躍する専門家との連携	15	100%	西川 あゆみ

地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる

目的
 ケアマネジメント、サービス担当者会議などを通して地域で活躍する専門家を理解し、地域包括ケアシステムと保健・医療・福祉の連携を考える。その上であらためて在宅における看護過程のプロセスを通して、療養者・家族のニーズに沿った看護を明確にし、看護師の役割について再認識する。

目標
 1 地域包括ケアシステムについてさらに理解を深め、看護師の役割について説明できる
 2 多職種連携・地域連携の意味が理解できる
 3 地域包括ケアシステムを構成するネットワークとその必要性について理解できる
 4 社会保障制度に基づき、ケアマネジメントの過程を理解できる
 5 看護過程のプロセスを通して、療養者および家族のニーズ、状況を踏まえ問題解決に向けた看護を明確にする
 6 専門家の連携を通して、地域で生活する療養者と家族がその人らしく暮らすための支援を理解できる

授業内容・授業方法					
回数	内容	方法	回数	内容	方法
1	地域包括ケアシステムとチーム連携 ・地域に根差した地域包括ケアシステムの機能 ・自助・互助・共助・公助 ・生活の場に応じた看護とサービス提供機関 ・地域包括ケアシステムにおける多職種連携 ・多職種連携を通じた生活の維持・向上～その人が地域でその人の望む生活ができるために	講義 講義			
2	ケアマネジメント	講義			
3	・サービス調整の実際 ・サービス担当者会議	演習			
4	在宅看護における臨床判断能力の実際	講義			
5	・在宅看護における看護過程の展開	演習			
6	・療養者とその家族のニーズ、状況を踏まえ問題の解決・軽減のための看護を明確にする				
7	住み慣れた地域で療養者とその家族がその人らしく生活するための連携	講義			
8	・関係機関との双方向の連携 ・看護が果たす役割	演習			

看護師教育の技術項目

地域との関連
 地域連携室 訪問看護ステーション 居宅介護支援事業所 診療所 地域包括支援センター
 行政 地域のボランティア など

評価方法
 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ループリック）

教科書・参考書など
 地域・在宅看護の基盤 医学書院
 看護覚え書 現代社
 成人看護学総論 医学書院
 精神看護の基礎 医学書院
 家族看護学 医学書院
 …など自己で必要とする参考書
 地域・在宅看護の実践 医学書院
 看護学概論 医学書院
 老年看護学 医学書院
 母性看護学概論 医学書院
 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院

備考・履修条件など

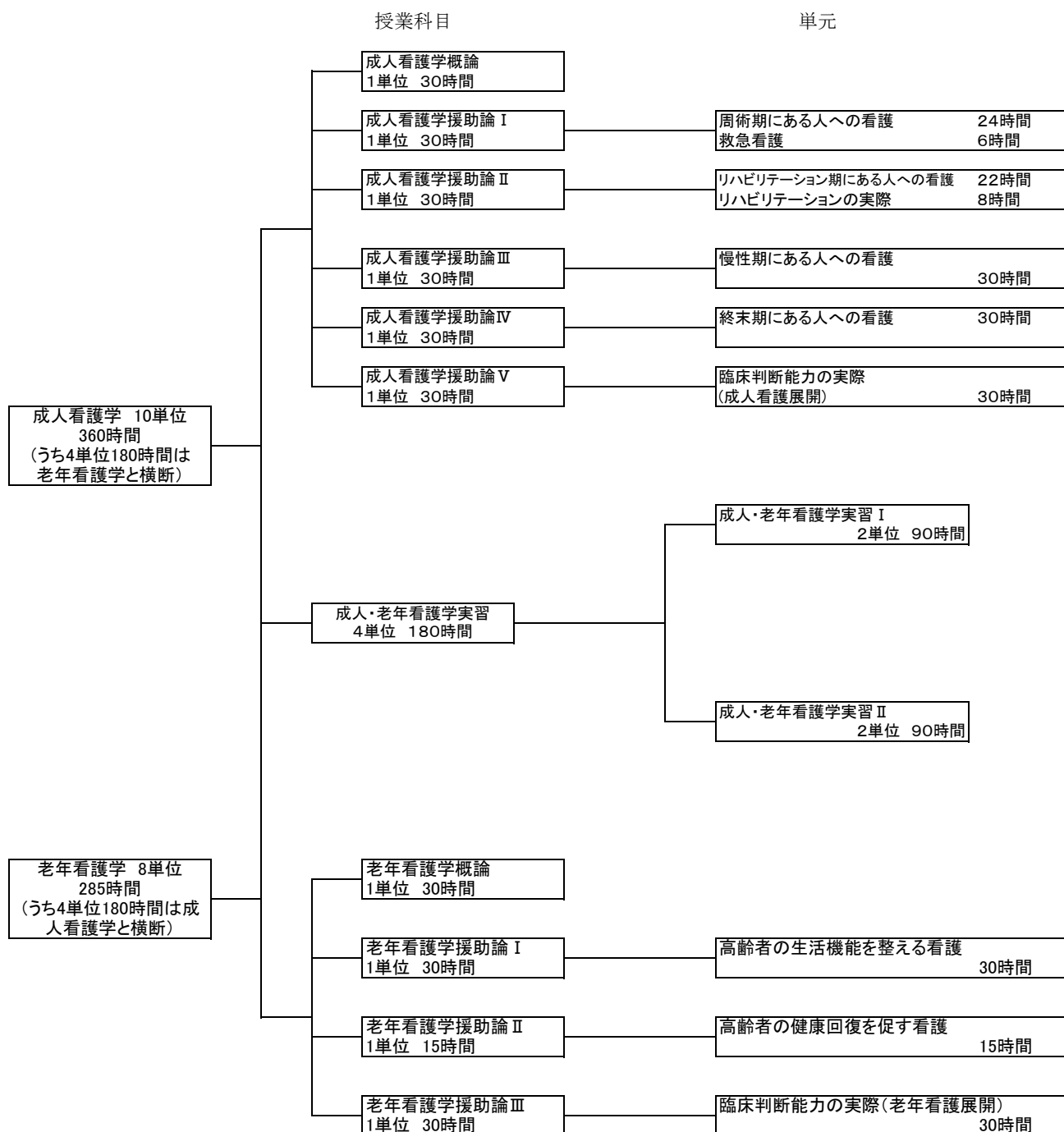
授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論援助論Ⅴ	1	30	3年	家族看護	30	100%	上原奈々
地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる							
目的 実習を通して関わった受け持ち患者とその家族がやりたい姿に向かうためには どのような看護が必要であるかを考え、その療養者と家族が望む暮らしを支援できるような提案集をつくることで生きた事例からの学びを深めることをねらいとする。							
目標 健康障害によって入院となった患者（療養者）とその家族への関わりを通して、入院中から在宅での生活を見据えた患者（療養者）とその家族への必要な看護について学ぶことができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	自分達が学習していくことは何だろう ・家族とは ・家族看護過程と一般的な看護過程		講義 演習	5.6	疑問を解決できる発表会		演習
2.3.4	【準備のフェーズ】 自分が事前学習した内容をもとにまとめよう ・家族看護過程の基盤となる理論 1. 家族発達理論 2. 家族システム理論 3. 家族ストレス対処理論 ・ABCXモデル ・ジェットコースターモデル ・二重ABCXモデル			7	家族看護過程および理論を想起し 情報リサーチに備えよう 【ビジョン・ゴールのフェーズ】 ・目標を設定する 【計画のフェーズ】 ・すべき戦略を立てる		演習
				8.9.10	【情報リサーチのフェーズ】 【制作のフェーズ】 実習で受け持った患者さんとその家族が 健やかに生活できる方法を考えよう		
				11	【プレゼンテーションのフェーズ】 ・他者の役に立つプレゼンテーションを 行おう		
				12.13	【再構築のフェーズ】 プレゼンテーションを終えてもう一度 自分の考えを整理しよう		
				14	【成長確認のフェーズ】 自分の成長を感じよう		
				15	今回の学習内容を俯瞰しよう レポート「この学習で掴んだ家族看護の意義」		
看護師教育の技術項目							
地域との関連 地域連携室 訪問看護ステーション 居宅介護支援事業所 診療所 地域包括支援センター 行政 地域のボランティア など							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題+ルーブリック）							
教科書・参考書など 家族看護学 医学書院 地域・在宅看護の基盤 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論実習Ⅰ	1	30	2年		30	100%	下清水亜由美
地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる 目的 施設で暮らす高齢者の日常生活援助を通して、高齢者の生活と自立支援の方法を学び、地域包括ケアシステムにおける看護の役割を考える							
目標 施設で暮らす人の意思や価値観、生活を知り、強みや個性に応じた生活援助が理解できる。 また、保健・医療・福祉の連携と施設や看護の役割の実際を知り、施設で暮らす人の生活の質、その人が「その人らしく」暮らすことについて考えることが出来る。							
実習内容・実習方法 【実習場所】 介護老人保健施設／介護老人福祉施設／介護医療院 【実習方法】 一人受け持ち、対象の背景や生活について理解する 受け持ち対象以外の方々とも交流し、施設で暮らす高齢者の日常生活を整える援助を考える プロジェクト学習でポートフォリオを活用する							
看護師教育の技術項目 No.57.58.							
評価方法 実習評価表に基づいて評価する							
教科書・参考書など 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 実習の前に読む本 医学書院 臨床看護総論 医学書院 地域療養を支えるケア ナーシンググラフィカ メディカ出版							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論実習Ⅱ	2	60	3年		60	100%	下清水亜由美
地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる							
目的 地域で暮らす対象の発達段階に応じて心身の機能を維持するための支援について学ぶ							
目標 1. 高齢社会に果たす施設の役割を理解できる 2. 利用者のよりよい生活と自立のための活動の実際を理解できる 3. 多職種との連携について理解できる							
実習内容・方法							
【実習場所】 デイサービス/デイケア・包括介護支援事業所など							
【実習方法】 ・プロジェクト学習・ポートフォリオで実習を行う ・住み慣れた地域で生活を継続するための、多職種連携や協働について学ぶ ・多職種連携を通して、看護師の役割について理解する ・実習に行く施設の役割や、事業や活動の目的、内容、方法について学ぶ ・地域で生活している住民を対象に行われている介護予防、健康増進、介護予防事業、総合相談、家庭訪問など支援事業内容を通して理解し学びを深める ・健康保険法、介護保険法、高齢者の医療確保に関する法律など関係法規を意識して実習に生かす ・地域で生活する人々への様々な支援を通して、改めて看護の責任と役割を考える中で、自分を見つめる機会を作り、看護師になるものとしての自分と向き合う							
看護師教育の技術項目 No.57.58							
評価方法 実習評価表に基づいて評価する							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
地域・在宅看護論実習Ⅲ	2	60	3年		60	100%	下清水亜由美
地域に暮らす人々の生命と生活を守る看護師の使命を認識できる 目的 在宅や施設で暮らす療養者とその家族を理解し、在宅における看護の実際を学ぶ							
目標 1. 療養者・家族の健康状態・生活状況が理解できる 2. 療養者・家族の療養上の問題を把握し解決するための援助方法が理解できる 3. 療養者に必要な日常生活援助を看護師や家族とともに実施することができる 4. 在宅看護の機能・役割を理解し、社会資源の利用状況や保健・医療・福祉の連携ができる							
実習内容・実習方法 【実習場所】 訪問看護ステーション・介護施設・グループホーム 【実習方法】 プロジェクト学習・ポートフォリオで実習を行う 療養者・家族が生活を維持するためにどのような社会資源を活用しているか、また日々、どのような問題が見えてきているかその問題解決のためにどのような援助や支援が必要かを看護師や多職種のかかわりとともに学ぶ。							
看護師教育の技術項目 No.7. 8. 10. 11. 12. 47. 48. 49. 50. 52. 57. 58. 59. 60. 62. 63. 64. 65. 69. 70. 71							
評価方法 実習評価表に基づいて評価する							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

成人看護学、老年看護学の構成



成人看護学の考え方

1. 教材観

成人期はライフサイクルの中の青年期・壮年期・向老期という最も長い期間を占め、身体面では、成長・成熟・衰退と変化し、心理面・社会面では最も充実した時期である。反面、社会的役割や責任の変化によりストレスも多く危機的状況に陥りやすい。そのため、成人期における健康上の問題は、身体面だけでなく、心理的ストレスなど複雑多岐にわたる。自己概念のはっきりした大人として生活を営む成人に、病がしのびよるということは、その人の身体的問題のみならず、これまで築いてきた社会的役割や人生設計の変更を迫られ、心理的・社会的問題を引き起こすことにも繋がる。さらにライフスタイルの多様化による生活習慣病の増加と人口の高齢化に伴う医療費の高騰が社会問題となり、成人期にある対象のヘルスプロモーションにおける看護への役割への期待が高まっている。

これらのことから成人看護学では、専門分野での基礎看護学を基盤に、生命の尊重と個人の尊厳の理念に基づき、ライフサイクルにおける成人各期の特徴を理解し、成人期の健康問題を統合的に判断する能力を養うことが重要である。さらに成人期にある人々が病の経験に際して、自分の持ちうる身体的・心理的・社会的能力を最大限に発揮して、対象とその家族を含めてその人らしく生きる過程を尊重し、その人の持てる力を引き出す看護が実践できるための能力を養うことをねらいとする。

科目構成としては、講義は6単位180時間とし、成人看護学概論で、成人期と成人期にある人の理解と成人看護の目的、成人看護に必要な理論を教授する。成人看護学援助論Ⅰでは、急性期にある対象への看護として、周術期にある対象と救急看護を必要とする生命の危機状況にある人への看護を学ぶ。成人看護学援助論Ⅱでは、リハビリテーション期にある人への看護として、セルフケアの再獲得に向けた援助を学ぶ。成人看護学援助論Ⅲでは、慢性期にある対象への看護として、セルフマネジメントへの看護を学ぶ。成人看護学援助論Ⅳでは、終末期看護として、終末期にある人の苦痛を全人的にとらえ、緩和ケアではがん性疼痛から症状マネジメントが必要な人への看護を学ぶ。成人看護学援助論Ⅴでは、成人期にある対象の健康問題や健康障害を捉え、健康の段階や状況に応じた看護の実践能力の基礎を身につける内容とした。臨地実習は、成人・老年看護学実習4単位180時間とした。成人・老年看護学実習Ⅰでは、成人期から老年期にある各対象の特徴や生活史、価値観を踏まえ健康レベルに応じた看護を実践できる内容とした。成人・老年看護学実習Ⅱでは、成人期から老年期ある各対象の生命維持と苦痛緩和への援助を実践する内容とした。

2. 学生観

学生自身や周囲の大人をイメージすることで成人期にある人の理解は進むと考えられる。しかし、高校を卒業したばかりの学生、社会人経験のある者、既婚者など、それぞれの役割、発達課題は様々である。また、大半の学生はアイデンティティ形成途上にあるが、自分自身の発達課題や期待される役割などは、日頃意識はしておらず、自己の課題として考えることは簡単ではない。

学生の学習姿勢はまだ受身的であり、発達理論や成人期にある人の理解に有用な理論等抽象的な概念の理解も困難であることが予測される。理論を実践に結びつけられるためには、人の理解、看護の本質を共に考える姿勢が必要である。また、機能障害別に主要な疾患をもつ対象への看護を学ぶ内容が多く、人体の構造と機能や病態理解が不可欠であるが、学生のレディネスには個人差がかなりあると予測される。

感性やコミュニケーション能力、生活力の低下があるといわれる学生であるが、1 年次前半から 2 年次前半で行われる実習であるため、講義・演習の中で実践場面がイメージでき、その時その場の対象の反応を見逃さず、考える行為を通して今必要な看護を実践できる基礎的な力が育めると考える。成人観・老年観、成人・老年看護のイメージをもつと同時に、自己のアイデンティティ形成の一助となればと考える。

3. 指導観

学習内容が多く多岐にわたるため、自己学習の強化が必要である。看護の目的を明らかにし、主体的に目的に向かえるよう事前学習や自己学習教材の工夫をし、学生個々へのフィードバックにより学習の定着をはかりたい。また、学生自身も成人学習者であり、単に知識の記憶だけではなく、それらの知識を看護に活用できるように学生同士の学び合いや個々の体験・経験をいかし、参加型の授業の工夫が必要である。

成人演習では、学生自身で学習計画をたて進めていく。また、看護技術演習については、事例を設定し、対象の入院生活から退院後の生活までを見据えた看護の展開ができるよう、フィジカルアセスメントから日常生活における複数の援助技術を組み合わせた演習を取り入れ、看護実践能力の基礎の向上を図る。

実習においては、看護過程の展開により、問題解決能力の向上、根拠に基づいた実践ができる基礎的能力を養いたい。

目的

成人期にある人の特徴を理解し、健康の保持・増進及び疾病・障害を有する人々の健康上の諸問題を総合的に把握し、看護実践できる基礎的能力を養う

目標

1. 成人期の対象の身体的、心理的、社会的特徴を発達課題と関連させて理解する
2. 成人期の対象のライフスタイルから健康に影響する因子理解し、健康を保持増進するための看護の役割について学ぶ
3. 慢性の経過をたどる対象および家族に対して、疾病をコントロールし、セルフケア能力を高めるための援助の方法を理解する
4. 健康回復の経過をたどる対象及び家族に対して、生活行動自立への援助、合併症や二次的障害の予防、セルフケアの再獲得、障害受容に向けての援助の方法を理解する
5. 急性の経過をたどる対象および家族に対して、恒常性の機能が十分に機能し、心身ともに順調な経過をたどるための生命の維持・管理、症状および苦痛の緩和、治療・処置に伴う援助の方法を理解する
6. 近い将来死を迎えるターミナル期にある対象および家族に対しての苦痛を緩和し、QOL を重視した援助の方法を理解する
7. 成人期にある健康障害をもつ対象のペーパーペイシェント事例を用いた看護過程の展開により、成人期特有の健康問題の理解ができ、問題解決思考の基礎的能力を身につけることができる
8. 演習により、健康障害をもつ成人期の対象に必要な代表的な技術を習得できる

老年看護学の考え方

1. 教材観

ライフサイクルにおける最終段階のことを老年期という。日本では行政・政策的に65歳以上を高齢者、65歳以上の時期を老年期としている。日本の人口に対し、3.4人に1人が高齢者（令和4年）である。団塊世代も2025年には後期高齢者となり、超高齢化社会は上昇を続ける。「人生90年時代」を生きる高齢者には、健康で自立的な生活を送ることが今まで以上に求められる。一方では、高齢者が活躍できる場と、90年の人生に対応した社会保障制度の充実が求められる。安心で活力ある超高齢者会を実現していく必要がある。

人生の終盤を「住み慣れた場所で最期まで」と人々は願う。高齢者が住み慣れた地域で、時には入院治療が必要で病院へ、時には介護が必要で介護施設へと場所は変わっても、看護師はその方の願う生活に向けての最善のために力を尽くす。地域で暮らす高齢者を支えるためには、人々の健康課題を多職種と共有し、ともに課題解決に向けたかかわりを考え実施する。看護師には地域に暮らす人々の健康と暮らしを守ることが求められる。

高齢者が生きてきた歴史や価値観を重視し、より健康に、また疾患をもつ高齢者やエンドオブライフを迎えようとしている高齢者と家族が、よりその人らしく、そして最期まで尊厳を維持することができるよう、様々な角度から看護ケアの在り方を考えることが重要である。

核家族化や高齢者の単独世帯も増加しており、高齢者の様々な問題やニーズがある。看護・介護をとおして老年期にある方に予防を視点とした健康を維持・向上を目指すことや家族の支援も重要となってくる。生活環境はこうした社会を反映しており、変化していく制度や家族への支援を含めた看護活動が大切である。高齢者の生活の質の向上を図り、高齢者とその家族がその人らしく生きることができるよう、質の高い看護を考えていきたい。

2. 学生観

青年期または成人期にある学生は、少子化・核家族・情報社会などによる社会背景から対人関係が希薄であり、とくに次世代との交流が少なく高齢者と接し加齢現象を目の当たりに感じる機会が少ない。そのことから、自分たち以外の多様な価値観をもつ人間理解や相手の立場に立って考えることが困難であり、コミュニケーション能力が低下しているといわれる学生にとって、高齢者との間にある約半世紀の年齢の隔たりが、一層老年期にある人とのコミュニケーションが難しいと考えられる。また身体的にも成熟にあることから、加齢現象による変化や健康障害が日常生活に与える影響や苦痛の理解がしがたいことも予測される。したがって、老年期にある人の理解は難しいと考えるが、高齢者に触れ合う機会を設け、イメージを膨らませながら教授していくことで、高齢者への関心が高まり老年観は養うことはできると考える。

3. 指導観

自分たちとかけ離れた年齢の高齢者の理解をすることは難しい。まずは高齢者への興味がもてるよう高齢者の歩んできた人生や時代背景にも着目していきたい。そして高齢者の生きる姿がイメージできるような教材を活用し、ポジティブな側面の理解をさせていく。また、高齢者が健康的に生き生き生きることが理解できるよう地域で健康的に生きる高齢者との交流会を設けたい。交流会をとおして、高齢者とのコミュニケーションを経験し、高齢者の豊かさや健康を考え、老年観を形成する一步としたい。加齢現象による日常生活への影響については、老人疑似体験を行い、生活のしづらさや苦痛・不安など実感し、高

齢者理解を促す。また高齢者は今まで生きてきた価値観や生活習慣があり多様な存在であるため、個別の援助がもとめられる。よって、事例設定を設けて個別性が考えられる授業や演習を工夫する。健康障害の理解については、加齢との関連が理解できる方法を工夫する。対象理解は展開を通して、その人が望む生活の在り方を目標に、高齢者のもてる力を維持・継続させ、潜在している力を顕在化させるために生活環境に働きかけ、看護を考えていく。

新カリキュラムでは、成人看護学実習Ⅰと老年看護学実習Ⅰおよび、成人看護学実習Ⅱと老年看護学実習Ⅱが一体化した。成人・老年看護学実習Ⅰでは、成人期・老年期にある対象者をライフサイクルの連続性から捉え、対象者のニーズに応じた看護を実践する。健康問題のアセスメントから、解決策を導き出し、対象の望む生活やニーズに沿って支援していく。支援を通して生きることの彩っている感性を養いたい。また、成人・老年看護学実習Ⅱでは、QOLの向上を目標とし、機能回復を促進する援助や二次的障害を予測・予防する援助を行う。看護過程を展開し、地域での生活を視野に入れた援助が行えるよう指導する。実習ではポートフォリオ・プロジェクト学習を活用して学ぶ。

目的

老年期にある対象と家族を理解し、加齢現象や健康障害の程度に応じた看護とその家族への看護実践能力を養う

目標

1. 老年看護の考え方を学び、高齢者の理解を深め老年観、看護観、倫理観を身につける
2. 高齢者とその家族を取り巻く環境と社会構造を理解し老年看護の役割を学ぶ
3. 老年期にある人の特徴を学び、高齢者の生活とQOL向上の援助技術を身につける
4. 高齢者の特徴をふまえて、加齢に伴う変化や健康障害に応じた高齢者とその家族への看護を理解する
5. 高齢者の個別性を理解し、尊厳を守る看護実践能力を養う

成人看護学のマトリックス														
科目	講義内容										関連理論		関連科目	
成人看護学概論 (1)単位 (30)時間 1年	成人の概念 成人各期の特徴(青年期・壮年期・中年期・向老期) 成人期に関連した健康問題 (生活習慣病 ストレス関連疾患 職業病 難病) 成人期にある人に関連する保健・医療・福祉の動向(健康日本21) 成人期にある人への看護に有用な理論										ストレスコーピング 危機理論(アギユラ・フィンク) ストレス・コーピング/病みの軌跡 自己効力理論 コグニティブ・ベヘンシス エリクソン・ハグ・グース 成人学習理論/エンパワメント 生体侵襲理論		社会学 社会福祉学 関係法規 心理学 公衆衛生学 各看護学	
援助論		主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程(展開)	ポート フォリオ	プロ ジェクト	関連理論・その他	フィジカル	関連科目
成人看護学援助論Ⅰ (1)単位 (30)時間 2年	周術期にある人への看護/救急看護	周術期の看護 手術・麻酔による生体侵襲と看護 開胸/開胸/腹腔鏡下手術に おける看護 胃切除術を受ける患者の看護 胃腸・気胸・胆石症 救急看護	消化機能 循環機能 脳・神経機能 運動器	術後疼痛 出血・シバリング 呼吸苦・体熱感 発熱・喀痰 嘔気・嘔吐・ショック 創形成(創治癒) 呼吸器合併症 消化器合併症 循環不全・DVT 低酸素症・不整脈 体液平衡異常	手術療法・麻酔 (胃切除・肺切除) 食事療法(術後食) 薬物療法 (PCI)疼痛管理 放射線療法 集中治療・救急法 人工呼吸 酸素吸入 胸腔内低圧持続吸引	血液検査 X線検査 CT検査 MRI 呼吸機能検査 EKG心 動脈血ガス分析 酸素飽和度 内視鏡検査	周術期の看護技術 (第一・離床・創傷部の観察 ドレナージ管理 尿道カテーテル管理 深呼吸の方法・腹帯 疼痛コントロールとケア 術後観察と合併症の観察 術後ベッドの作成 酸素ボンベ・移送 CPR・硬膜外麻酔 スタンダードアプリケーション 術前呼吸訓練 挿管スリッキング) 一次救命処置	術後観察と第一離床の実施と報告 硬膜外麻酔PCI管理 輸液管理 No.29,30,33,36,37,44,47,48,52,57,58,60,63,64,65	胃切除術の周術期看護 50代男性 アセスメント 関連図・計画 生活指導			危機理論 生体侵襲理論 学習理論	循環動態異常の徴候 (ショック) 呼吸音 (無気肺・呼吸器合併症) 腹部聴診 術後疼痛 意識レベル	解剖生理学 病態生理学 心理学 教育学 病態治療論
成人看護学援助論Ⅱ (1)単位 (30)時間 2年	リハビリテーション期にある人への看護/ リハビリテーションの実際	リハビリテーションの概要 リハビリテーションが必要な人の特徴と看護 ADL再獲得への援助の実際 障害と発達段階、日常生活に及ぼす影響 障害二次的障害予防 生活再構築と社会資源、多職種連携 リハビリテーション機器と実際 障害を持った人の心を支える看護 (障害受容)	脳・神経機能 運動機能 排泄機能 循環器機能 呼吸器機能	高次脳機能障害 意識障害 運動障害・言語障害 可動域制限 排泄機能障害 労作時の呼吸困難感 感覚障害・麻痺 嚥下障害	薬物療法 運動療法 安静療法 食事療法(嚥下食)	徒手筋力測定 関節可動域測定 知覚検査 高次脳機能評価 心臓機能評価	徒手筋力訓練 関節可動域訓練 良肢位保持 社会資源の活用 機能訓練 日常生活を支える 移動と移送 (片麻痺・活動耐性低下) 食事と排泄 (半側空間無視)	徒手筋力測定 関節可動域測定 呼吸機能訓練 意識レベル確認 嚥孔観察 失語のアセスメント 左記:日常生活を支える援助 No.17, 52, 57, 58, 60, 63, 64, 65	脳梗塞片麻痺患者の生活行動再獲得支援 50代男性 関連図 援助計画 評価 脳梗塞後遺症支援食事・生活 (ロールプレイ)			障害受容の段階論 (コーン) (上田)	運動系 (MMT・ROM・歩行観察) 感覚系 中枢神経系 (失語のアセスメント・嚥孔観察)	解剖生理学 病態生理学 心理学 基礎看護学 関係法規 在宅援助論 病態治療論
成人看護学援助論Ⅲ (1)単位 (30)時間 2年	慢性期にある人への看護	慢性期看護の考え方 特徴と理解、有用な理論 看護援助、機能障害別看護 慢性気管支喘息 慢性心不全 慢性腎不全 糖尿病 白血病	呼吸機能 循環機能 栄養摂取 代謝機能 内部環境調節障害 生体防御機能 血液・免疫系	低酸素症、咳嗽 喀痰、呼吸困難 浮腫、乏尿 嘔気、嘔吐、肥満 血圧異常 高血糖・低血糖 皮膚病変 骨髄抑制、易感染 糖尿病性アトピー 貧血	安静療法 食事療法 薬物療法 運動療法 心臓リハビリテーション 抗がん剤 透析治療 インスリン注射	心電図、心エコー 胸部レントゲン 血液・尿・便検査 CT、MRI(SPECT) 呼吸機能検査 血糖測定 骨髄穿刺	教育介入 ・インスリン自己管理 ・体重管理 ・ステロイド療法中のケア ・食事療法	退院指導 (パンフレット) ・症状コントロール ・感染予防 No.4,52,54,57,58,60, 63, 64, 65	慢性期にある患者への看護援助 セルフマネジメントを促す支援			病みの軌跡 自己効力感 エンパワメント	心音(I音・II音) 呼吸音;異常 呼吸・循環	心理学 解剖生理学 病態治療論 教育学 物理学
成人看護学援助論Ⅳ (1)単位 (30)時間 2年	終末期にある人への看護	緩和ケアと看護 死とは 倫理的課題 症状マネジメント (疼痛、消化器症状、浮腫、呼吸器症状) 倦怠感、泌尿器症状、精神症状) スピリチュアルケア グリーフケア エンゼルケア 補完的代替療法 認定看護師による特別講義 (緩和ケアの実践、チーム医療、認定看護師の役割)	消化機能 呼吸機能 腎機能 造血機能	症状マネジメント (肺がん患者の事例) 疼痛 呼吸症状 浮腫 倦怠感 精神症状 消化器症状	疼痛コントロール 化学療法 放射線療法 薬物療法 酸素療法	各経過や症状にみあった検査	緩和ケア 臨終から死別後のケア	・コミュニケーション技術 ・エンゼルケア ・グリーフケア No.20,70,71				死の受容プロセス 悲嘆のプロセス 症状マネジメントモデル グリーフケア		心理学 人間関係論 病態治療論 社会学 哲学
成人看護学援助論Ⅴ (1)単位 (30)時間 2年	臨床判断能力の実際 (成人看護展開)	各経過別の看護過程の展開 系統別フィジカルアセスメント	排泄機能 循環器機能 呼吸器機能 消化機能 運動機能	各経過や段階によって おこしやすい症状や徴候	酸素療法 点滴療法 食事療法	各経過にそった検査	看護過程の展開の技術 (各看護過程の活用) 看護問題と看護診断 共同問題	呼吸、循環機能のアセスメント 食、栄養、活動に関するアセスメント No.1,7,13,14,15,,52,57,63,64,65						解剖生理学 病態治療論 心理学 人間関係論 コミュニケーション論 看護学的実践論 成人看護学 基礎看護学
成人・老年看護学実習Ⅰ (2)単位 (90)時間 2年	社会的背景(社会や家庭での役割、入院前の生活習慣、発達課題)と健康障害の関連や健康段階に着目した対象への看護を学ぶ	受け持ちによって	受け持ちによって様々	輸液観察 電法 酸素吸入管理 服薬管理 意識状態の観察 感染予防 膀胱留置カテーテル 経管栄養法 グリセリン浣腸	放射線 内視鏡 超音波 心電図 血液検査 尿検査	No.1,2,3,4,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,29,30,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,47,48,49,50,52,54,55,56,57,58,59,60,61,62,63,64,65,66,67,68,69,70,71	○	○	○	機能的健康パターン (ゴードン) ニード論 (ハンダーソン) 適応モデル (ロイ) セルフケア理論 (オレム)	フィジカルイグザミネーション	履修科目全て		
成人・老年看護学実習Ⅱ (2)単位 (90)時間 2年	急性期(または周術期)にある対象を総合的に理解し、健康段階に応じた看護を学ぶ	受け持ちによって様々	受け持ちによって様々	*成人・老年看護学実習Ⅰに準ずる	放射線 内視鏡 超音波 心電図 血液検査 尿検査	*成人・老年看護学実習Ⅰに準ずる	モニタリング 診療の補助技術の活用	○	○	○	*成人・老年看護学実習Ⅰに準ずる ・ストレス・コーピング理論 ・生体侵襲理論	フィジカルイグザミネーション	履修科目全て	
※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ずる														

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ずる

老年看護学のマトリックス

科目	講義内容									関連理論				関連科目
老年看護学概論 (1)単位 (30)時間 1年後期	1. 老年期とは 2. 「老いる」ということ～加齢に伴う変化 3. 社会の動向と社会保障制度(地域包括ケアシステムの構築、介護保険、高齢者医療制度) 4. 高齢者の暮らし 5. 老年看護の倫理、理論									サクセスフルエイジング ニード論(マズロー、ヘンダーソン) 危機理論(フィנק) セルフケア理論(オレム) ストレンクスモデル				公衆衛生 社会福祉 関係法規 国語表現 各看護学
援助論		主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程(展開)	ポート フォリオ	プロ ジェクト	関連理論・その 他	フィジカル	
老年看護学援助論Ⅰ (1)単位 (30)時間 1年	高齢者の生活機能を整える看護	高齢者の健康 健康の保持・増進(地域施策) 加齢に伴う変化 高齢者の自立を妨げる要因 認知症予防 生活行動モデル 高齢者のバイタルサインの特徴 高齢者の日常生活を整える看護 (基本動作・食事・排泄・清潔・生活リズム・コミュニケーション) 社会で健康的に生きる高齢者理解 エンドオブライフケア 看取りの現状と課題	排泄機能 皮膚バリア機能 摂食・嚥下機能 感覚機能 生活リズム	尿失禁・下痢・便秘 掻痒感 嚥下障害/低栄養・貧血 伝音声・感音性難聴/老視 不眠/倦怠感 中核症状・周辺症状 せん妄 脱水 拘縮 サルコペニア ロコモティブシンドローム フレイル			コミュニケーション 食生活の支援 口腔ケア・義歯洗浄 清潔の援助 ヘルスアセスメント 移動・移乗の援助	No.1,7,19,26,52,57,58,59,60,63,64,65	生活行動モデルの分岐の視点		○	生活行動モデル ニード論 セルフケア理論 コンフォート理論 離脱理論 活動理論 心理社会的発達理論(エリクソン) ベックの心理的危機 発達課題(ハヴィガースト) スピリチュアリティ	嚥下機能 聴覚 視力 口腔内観察 バイタルサイン 認知機能評価	国語表現 関係法規 栄養学 社会福祉 病態Ⅰ～Ⅵ
老年看護学援助論Ⅱ (1)単位 (15)時間 2年	高齢者の健康回復を促す看護	高齢者の健康障害の特徴 薬物動態の特徴 特徴的な疾患と看護 運動器疾患(急性期～回復期、慢性期)と看護 高齢者のリハビリテーション	閉塞性肺疾患 循環器性疾患 糖尿病性腎症 腰椎圧迫骨折	感染 褥創 腰痛・膝痛 発熱	入院治療 高齢者の内服管理 術前中後の管理 リハビリテーション	高齢者の検査 高血圧 Xーp CT 血液検査 喀痰検査 尿検査	生活リハビリ ADL拡大への援助	No.23.35 床上リハビリ 生活リハビリ		○	○	ストレンクスモデル 危機理論 発達理論 援助論Ⅰに準ず	褥創評価 良肢位	国語表現 関係法規 栄養学 社会福祉 病態Ⅰ～Ⅵ
老年看護学援助論Ⅲ (1)単位 (30)時間 2年	臨床判断能力の実際(老年看護展開)	高齢者を対象とした看護過程の展開技術 高齢者の強みを生かした看護 ヘルスアセスメント 対象の目指す健康逸脱からの回復を促す看護	大腿骨頸部骨折 認知症	合併症(手術・疾患) 認知症症状			清潔援助 移動・移乗動作 環境整備 食事摂取援助 排泄援助 更衣援助		生活行動モデル ゴードン			生活行動モデル ニード論 援助論Ⅰに準ず		国語表現 関係法規 栄養学 社会福祉 病態Ⅰ～Ⅵ
成人・老年看護学実習Ⅰ (2)単位 (90)時間 2年	成人マトリックス(成人・老年看護学実習Ⅰ)に準ず													
成人・老年看護学実習Ⅱ (2)単位 (90)時間 2年	成人マトリックス(成人・老年看護学実習Ⅱ)に準ず													

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ず

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人看護学概論	1	30	1年		30	100%	中村保乃
目的 ライフサイクルにおける成人の位置づけと成人期にある人々の特徴を理解し、成人期の健康が生活環境、社会生活および加齢現象などの影響を受けることを、現代社会の情勢を含めて理解する。成人期にある対象に起こりやすい健康問題について理解を深め、対象理解や看護実践に活用可能な看護理論の概要を学習する。							
目標 1. 成人各期の身体的・精神的・社会的特徴について理解することができる 2. 成人期の対象を取り巻く環境や生活習慣、職業生活等が健康に与える影響を知り、成人期の対象の健康問題の多様性を理解し、予防のための援助について理解することができる 3. 成人保健の動向を知り、健康の保持・増進のための国の施策及び医療・保健体制の一員として看護の役割と機能について理解する 4. 様々な健康段階にある対象と必要な看護の概要を理解することができる 5. 成人期にある対象の理解と看護援助に有用な理論、モデルの概要を理解することができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	成人看護学とは 成人のライフスタイルの特徴	講義	10～11	ストレス理論 ストレス・コーピング理論 フィンクの危機理論	講義		
2	成人の健康バランスに影響を及ぼす要因		12・13	自己効力感 エンパワメント 大人の学習	講義		
3～4	成人看護学の対象特性 発達段階と発達理論 (エリクソン・ハヴィガースト)	講義	14・15	コンプライアンス 痛みの軌跡	講義		
5・6	ヘルスプロモーション 成人期における健康障害の特徴	講義					
7	健康日本21 健康増進のための産業保健活動	講義					
8・9	保険・医療・福祉システムの概要 大人の健康行動						
看護師教育の技術項目							
地域との関連 第2章生活と健康(地域医療の確保, 在宅医療の整備) 第4章(集団の健康を増進するための方法) 第10章さまざまな健康レベルにある人の継続的な移行支援(多職種連携、地域連携、在宅への移行)							
評価方法 パフォーマンス評価 (パフォーマンス課題＋ルーブリック)							
教科書・参考書など 成人看護学総論 医学書院 看護学概論 医学書院 精神看護学 医学書院 地域・在宅看護論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人看護学援助論Ⅰ	1	30	2年	周術期に ある人への看護	24	80%	藤本 一輝
				救急看護	6	20%	藤永 純一
目的 急性期にある対象の看護は、健康状態の急激な変化に対する身体的・心理的な適応を支援することにある。 また、身体におこっている生理学的反応と、それに伴う心理的反応を十分理解する必要がある。 そのためには、正確な知識に基づいた的確な観察が必要不可欠である。そして、確かな観察に支えられた正常・異常の判断、予測される異常と、その予防の視点は急性期にある対象の安全・安楽・安心を守ることに繋がる。 ここでは周術期と救急看護に視点を置き、必要な看護について学習する。							
目標 1 手術・麻酔侵襲による生体反応を理解し、周術期の対象のもつ問題を理解する 2 急激な健康レベルの低下は身体的・心理的・社会的側面に影響を与えるものであることを理解する 3 周術期・クリティカルな状況にある対象の持つ問題を解決するのに必要な知識を習得する 4 急性期における的確な観察と判断のための基礎的能力を養う 5 周術期・クリティカルな状況にある対象の特徴を理解し、身体的・心理的・社会的側面のアセスメント能力を養う 6 術後の形態機能の変化を理解し、社会生活の適応に向けた退院支援の必要性について理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	外科医療の基礎 手術/麻酔侵襲と生体の反応 術後回復過程への影響		講義	10	術後合併症予防のための看護② 対象の全体像を関連図でとらえ、対象に必要な看護を探求する(アセスメント)		講義
2	術後合併症の発生機序と予防、発症時の対応 合併症の発生機序・要因・症状・看護について 効果的な術前オリエンテーションとは		講義	11	術前/術中/術後に必要な看護の視点と過程 術式による患者への看護の特徴 開胸手術、開腹手術、腹腔鏡下手術		講義
3・4	術後合併症の予防的援助を考える① 肺合併症・循環不全/出血/深部静脈血栓症 術後感染/縫合不全・術後イレウス せん妄/神経障害 術前オリエンテーション、術後疼痛管理 (これらを題材とし、「対象の命を守るために必要な観察・判断・予測・予防」を考える)		講義 GW	12	生活の再構築に向けた支援 対象と家族の今後の生活に必要な援助 <u>*授業の関係上内容が前後することもあります</u>		講義
5	術後合併症の予防的援助を考える② GWで考えた内容を、各自が専門家となり他者にプレゼンし、予防的看護についての理解を深める		GW 講義	13	救急看護の考え方 概念・救急医療と救急看護体制 法律と倫理・課題と展望		講義
6	周術期にある人の特徴 術後の観察視点とアセスメントに必要な情報分類 予防的看護援助(術後疼痛・循環動態・感染など) 点滴管理、酸素管理、モニター管理、ドレーン管理		講義	14	救急患者の特徴 救急看護を受ける患者への看護 観察とアセスメントの考え方 コールとファーストエイド 初期治療から継続治療へ		講義 演習
7	周術期の看護 周術期看護の目的と役割		講義	15	特殊な状態にある患者の事例をもとに 救急看護の実際を学ぶ 心筋梗塞発症による心不全患者の看護 急性中毒患者の看護 熱傷患者の看護		講義 演習
8・9	術後合併症予防のための看護① 術後1日目の対象の第一離床場面を題材とし、「対象の命を守るための観察・判断・予測・予防」の援助の実践を学ぶ →点滴/酸素/モニター/ドレーン管理の実際、安全・安楽な援助に向け目標・計画を立て挑		講義 演習				
看護師教育の技術項目 No.29, 30, 33, 36, 37, 44, 47, 48, 52, 57, 58, 60, 63, 64, 65							
地域との関連 術後患者が安心して元の生活に戻るための看護(在宅療養者への支援)							
評価方法 筆記試験及び提出課題で総合的に評価します							
教科書・参考書など 臨床外科看護総論 医学書院 臨床看護総論 医学書院 成人看護学総論 医学書院 救急看護学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人看護学援助論Ⅱ	1	30	2年	リハビリテーション期にある人への看護	22	80%	和栗裕子
				リハビリテーションの実際	8	20%	明比 大
目的 健康障害からの回復過程において、看護はその人がその人らしく自律/自立して生活していけるように看護の専門的な立場から身体的・心理的・社会的環境条件を支援・整備していく責任と役割をもつ。障害により、それまでの人生や生活様式の変更を迫られた人や家族に対し、障害となるものを予測しその予防と対策を行い、生活の再構築に向けた支援をしていくための看護について学習する。							
目標 1 リハビリテーション期の概念と看護の対象の特徴を理解する 2 障害が発達段階や生活行動に与える影響を理解する 3 残存機能を最大限活用しQOLを踏まえた生活行動自立/拡大に向け、多職種連携や調整を含めた看護の役割を理解する 4 二次的障害を予防するための看護の役割を理解する 5 対象と家族が障害を受容する過程について理解を深め、必要な看護について考えることができる 6 社会生活適応に向けて、リハビリテーション機器や社会資源の活用の意義・種類について知識を深める 7 成人を対象とした看護における主な看護問題の解決に必要な知識と技術を習得する							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	リハビリ期看護の専門性と各期の看護の役割、障害受容過程について		講義	10	心筋梗塞事例の回復期看護①:健康障害と心理過程 障害を負った人の心を支える看護(認識の過程と価値の転換)		講義
2	リハビリテーションの概念とICF リハビリテーションを必要とする人の特徴 (身体的・心理的・生活上・家族)		講義	11	心筋梗塞事例の回復期看護②:健康障害と健康管理 望む生活の実現に向けて(生活指導案の作成)		講義 GW
3	障害と日常生活動作(能力障害の評価) MMT・ROM・呼吸理学療法		講義 演習	12	心筋梗塞事例の回復期看護③:生活指導の実際 ロールプレイから考える実際の患者の知りたいこと		講義 GW
4	脳梗塞急性期に必要な看護:事例全体像の把握 (合併症/二次障害の可能性/疾病と機能的予後が与える影響)		講義	13	望む生活を継続していくための援助 公的/私的社会的資源、QOLと自己管理行動 福祉用具、装具の意味と効果		講義
5	脳梗塞回復期に必要な看護:事例の全体像の把握(二次障害の可能性/自己概念/残存機能と社会復帰) 不足しているセルフケアと生活スタイル/環境		GW 講義	14・15	リハビリテーションが必要な人の看護の実際 瞳孔観察・意識レベル・失語のアセスメント 徒手筋力テスト *授業の進行により内容が前後することがあります		演習
6	脳梗塞事例の回復期看護実践(手順/計画/工程表) 生活行動再獲得に向けたセルフケア援助		GW 演習				
7.8	セルフケア能力再獲得への支援(QOLと自立)① 飲食・排泄・清潔・姿勢と移動・更衣・睡眠と休息・コミュニケーションなどへの支援の実践		演習				
9	セルフケア能力再獲得への支援(QOLと自立)② 実践の振り返り 評価と修正 根拠と看護の発表		GW 演習				
看護師教育の技術項目 No.17, 52, 57, 58, 60, 63, 64, 65							
地域との関連 各障害と心身・生活への影響(社会復帰)、公的・私的社会的資源、リハビリテーション機器と社会資源の活用、リハビリテーション							
評価方法 筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など リハビリテーション看護 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人看護学援助論Ⅲ	1	30	2年	慢性期にある人への看護	30	100%	西川あゆみ
目的 慢性疾患をもつ患者への看護の目標は、生涯にわたり疾病コントロールが必要な病と共存し折り合いをつけながらも、疾病を受容し患者が自分なりの生活方法を獲得し、QOLの向上を目指して援助することである。そのためには、健康障害と病状の経過がもたらす影響を理解し、患者のこれまでの価値観やライフスタイルを尊重した上で患者のセルフケア能力を高める支援について考えていくことが必要である。 この講義では、慢性疾患患者の特徴と疾病受容、セルフケアといった概念を学習する。また、代表的な慢性疾患患者への看護については、事例を用いて、病態や治療についての既習の知識を想起し、身体・心理・社会的側面のアセスメントと健康レベルに応じた看護目標と看護ケアについて学習し慢性期にある患者の看護について自ら深められる機会とする。							
目標 1 慢性疾患患者の特徴が理解でき、疾患を抱えながら生活を送る患者の特徴を説明できる 2 慢性期にある人への看護援助について理解できる 3 慢性期にある患者がその人らしく、生活を送るために事例を用いて慢性疾患患者への看護が理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～3	1. 慢性期看護の考え方 1)慢性期とは 2)慢性期にある疾患、治療の特徴 3)慢性期にある人を取り巻く社会環境	講義 GW	9～11	3. 慢性期にある人への看護援助 1) 慢性期にある人への看護援助 ①慢性疾患患者のQOL ②慢性疾患患者のセルフケア支援 ③慢性疾患のストレス・コーピングを促す支援 ④慢性疾患の行動変容を促す支援 ⑤生涯にわたるセルフマネジメント支援	講義 GW		
4～8	2. 慢性期にある人の特徴と理解 1)症状のコントロールと病状のコントロールを捉えるために ①慢性期にある人々の心理・社会的特徴を理解する ②疾病がライフサイクルに及ぼす影響を理解する ③病みの軌跡を通して理解する ④疾病の受け入れ過程を通して理解する ⑤病気がもたらす自己のゆらぎを理解する	講義 GW	12～15	慢性期状態にある患者の事例を基にその人の望む生活を支える看護を考える	GW 演習		
看護師教育の技術項目 No. 4, 52, 54, 57, 58, 60, 63, 64, 65							
地域との関連 疾患を持って日常生活を送るための看護 疾病のコントロールに必要なセルフマネジメント 症状マネジメント 退院する患者と家族への実際に必要な技術							
評価方法 筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など 慢性期看護論 ノーヴェルヒロカワ 成人看護学総論 医学書院 臨床看護総論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人看護学援助論Ⅳ	1	30	2年	終末期にある人への看護	26 4	100%	長谷川美里
学習目的・目標 生命を脅かす病気になることで、患者や家族はさまざまな苦しみを体験する。そのさまざまな苦しみを理解し、アセスメント能力を高め、適切なケアについて学んでいく。 また、生命を脅かす病気になることは、死を意識せざるをえない状況となり、そのような患者や家族をケアする際には、ケアを提供する側の在り方が大切となる。ケアの基盤となる自身の死生観について向き合い、気持ちや考えを述べる。そして、他者と話し合い、個々の価値観を尊重し共有を深め、患者や家族を支えることのできるケアを考える。 1 緩和ケアの理念、概念、定義について理解する。 2 痛みをはじめとする主な身体症状とその治療・看護について説明できる。 3 主な精神的・社会的・スピリチュアルな苦痛とそのケアについて説明できる。 4 家族、遺族へのケアの重要性を理解する。 5 緩和ケアにおける倫理的側面について考察することができる。 6 死にまつわる文化的側面について理解し、自身の死生観を問いつ述べることができる。 7 補完・代替療法について理解する。 8 緩和ケアにおけるチーム医療の必要性や役割、機能について理解する。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	緩和ケアと看護	講義	9	事例検討 ※	GW		
2	死とは 終末期にある人とその家族の特徴と理解	講義 ビデオ	10	コミュニケーション ※ ―患者の意志決定を支えるために―	講義 ロールプレイ		
3	倫理的課題 ※	講義 事例検討	11	臨終から死別後のケア 家族のケア エンゼルケア	講義 実演		
4～8	症状マネジメント	講義 事例検討	12	グリーフケア 患者、家族、看護師自身 について	講義 ビデオ		
4	疼痛 (身体的概論)						
5	消化器症状 倦怠感						
6	呼吸器症状 浮腫、泌尿器症状						
7	精神症状		13	補完的代替療法 ※	講義 体験 ビデオ		
8	精神的、社会的、スピリチュアルケア						
			14～15	【長谷川先生】 認定看護師による特別講義 緩和ケアの実際、チーム医療、 認定看護師の役割	講義		
看護師教育の技術項目 No,20,70,71							
地域との関連 在宅緩和ケア、診療所、訪問看護ステーション、介護保険、セルフケア・医療処置、家族・遺族へのケア							
評価方法 筆記試験・レポート							
教科書・参考書など 臨床看護総論 医学書院 緩和ケア 医学書院 成人看護学総論 医学書院							
備考・履修条件など ※の回は、グループワークの形式で着席しておくこと。							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人看護学援助論Ⅴ	1	30	2年	臨床判断能力の 実際 (成人看護展開)	30	100%	岸本佳子
目的 成人期にある対象の事例をもとに、既習の知識や技術を統合させて、健康レベル・経過に応じた看護展開を学ぶ							
目標 1. 成人期の特徴を理解し、対象に必要な看護課題を明確にとらえることができる 2. 看護を実践するために必要な学習ポイントをとらえ、実際に学習を深めることができる 3. 各事例の病態から行われている治療、処置、検査とその看護を関連づけて理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～2	・成人・老年Ⅰ実習での自己課題の明確化 ・グループ間でディスカッション ・自己課題解決に向けたビジョン・ゴールを設定し達成に向けての取り組みを考える		講義 GW	15	・まとめ		演習
3～11	・事例に基づいた看護展開 既存の事例から考える		GW 演習				
12～13	・急性期における成人看護の実際 周術期看護のとらえ方と看護展開 ・共同問題による看護展開		GW 演習				
14	・急性期に必要な看護演習		演習				
					* 授業の進行により内容が前後することがあります		
看護師教育の技術項目 No.1,7,13,14,15,52,57,63,64,65							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック）							
教科書・参考書など 成人看護学総論（医学書院） ヘンダーソンの基本的看護に関する看護問題リスト（ヌーヴェルヒロカワ） 臨床看護総論（医学書院） 看護の基本となるもの（日本看護協会出版会） 看護学概論（医学書院） 基礎看護技術Ⅰ（医学書院） 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術（医学書院）							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
老年看護学概論	1	30	1年		30	100%	大城祐介
目的 老年期にある対象と高齢者を取り巻く社会を理解し、老年看護の目的、役割と機能を学ぶ							
目標 1 高齢者の特徴を、身体的・精神的・社会的側面から理解する 2 ライフサイクルにおける老年期を理解する 3 高齢者を取り巻く社会環境から、保健・医療・福祉の動向と諸問題を知り、看護の役割を理解する 4 高齢者の健康的な生活を理解する 5 老年看護の目的、役割と機能を理解する 6 老年看護学を支えるものとしての老年観がもてる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	1)ライフサイクルからの老年期の理解 老年期とは 老年期の位置づけ 発達課題:エリクソン・ハヴィガースト・ベック 高齢者社会の統計と人口動態の変化	講義	11	4)高齢者の人権(権利擁護)と倫理問題 高齢者と家族の人間関係と生活の特徴 高齢者の人権(虐待、身体拘束) アドボカシー・エイジズム 家族への支援 高齢者の性 成年後見制度	講義		
2～6	2)老年期にある対象の理解 老年期における発達と成熟の意味 加齢と老化 老化に伴う変化 (身体的、精神的、社会的機能低下) 高齢者の多様性 (生きてきた時代背景、人生経験の意味 価値観の多様性、生活習慣・生活様式) 死の受け止め・エンドオブライフケア	講義 演習 GW	12・13	5)高齢者を取り巻く社会 社会の動向からの老年期の理解 高齢者を取り巻く保健・医療・福祉の動向 高齢社会における社会制度 介護保険制度・老人保健法・老人福祉法 後期高齢者医療制度・年金制度 ゴールドプラン21 高齢者ケア医療福祉施設 地域包括ケアシステム	講義		
7～10	3)高齢者の健康的な生活 高齢者の暮らし・家族形態 高齢者の生活環境と転倒の問題 老年期の健康の考え方 高齢社会の保健活動 高齢者のQOL・生き甲斐・ サクセスフルエイジング 高齢者の社会参加・娯楽と余暇 高齢者のヘルスプロモーション 高齢者の健康障害の特徴	講義 GW	14・15	6)老年看護の目的・機能と役割 老年看護学とは 老年看護の現状と問題 老年看護活動の場 老年看護の役割 (病院・施設における看護師の役割) 老年看護の目標・原則 高齢者看護に用いられる理論 エンパワメント・ニード論・セルフケア理論 ICF概念・選択最適化補償理論・ ストレングスモデル 多職種連携	講義		
看護師教育の技術項目							
地域との関連 老人クラブ、シルバーセンター、地域包括支援センター							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 老年看護学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
老年看護学援助論Ⅰ	1	30	1年	高齢者の生活機能を 整える看護	26 4	100%	西川あゆみ 明比 大
目的 老年期にある人の日常生活を理解し、健康維持のための援助方法について学ぶ							
目標 1 高齢者の生活を理解する 2 高齢者にとって健康な生活を理解する 3 老年看護の基本的技術を習得する 4 高齢者のその人に応じた健康的な生活を維持・向上する日常生活援助を理解する 5 社会参加を積極的に行う高齢者を知り、その人らしく、より健康に生活する意義を考える							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	1) 老年期を健康に生きる人の理解 高齢者にとっての健康、加齢に伴う変化 高齢者の健康well-being 社会交流・コミュニケーションの意義 高齢者とのコミュニケーション技術	講義		5) インスタントシニア体験 おむつ体験 高齢者体験	講義 演習		
2～5	2) 高齢者のヘルスアセスメント 高齢者の総合機能評価 高齢者のバイタルサイン フレイル サルコペニア、ロコモティブシンドロ	講義 演習	6～9	6) 日常生活の看護技術(生活を整える援助) 「活動」活動を促す看護援助 「休息」良眠を促す看護技術 「身じたく」清潔・身だしなみを促す看護技術	講義 演習		
	3) 主要な疾患と症状とその看護 不眠、摂食障害、嚥下障害、脱水、排泄障害 掻痒症 疾患を抱えていてもその人らしく生活維持 できるための支援		10～13	7) 日常生活の看護技術(生活を整える援助) 「排泄」排泄の自立への援助 「食事」経口摂取を促す看護技術 まとめ	講義 演習		
	4) エンドオブライフケア 看取りの現状と課題 「老いるということ」「生きるということ」を支える		14～15	8) 高齢者とリハビリテーション 介護予防・転倒予防	講義		
看護師教育の技術項目 No.1,7,19,26,52,57,58,59,60,63,64,65							
地域との関連 地域包括支援センター							
評価方法 筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など 老年看護学 医学書院 老年看護 病態・疾患論 医学書院							
備考・履修条件など							

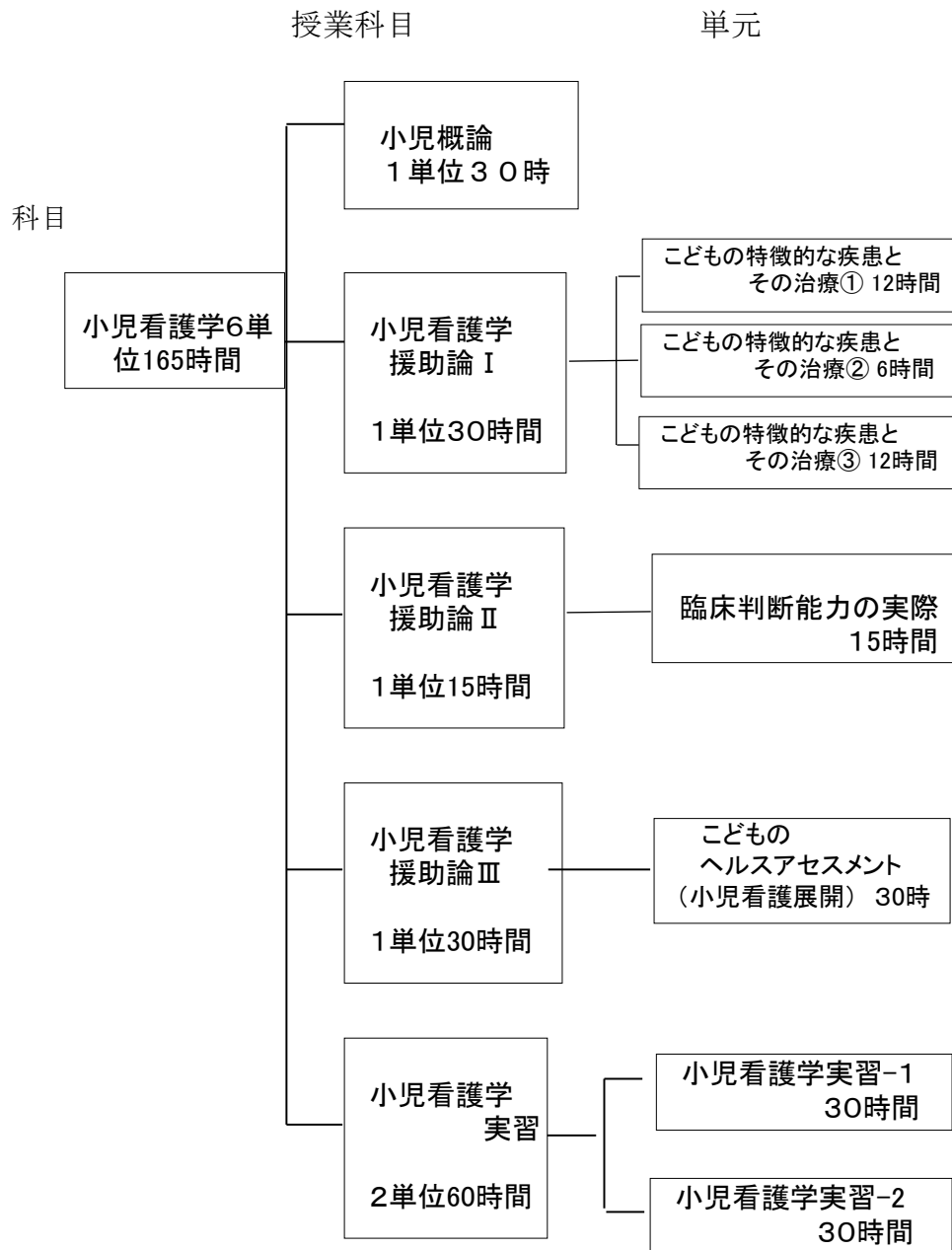
授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
老年看護学援助論Ⅱ	1	15	2年	高齢者の健康回復を促す看護	15	100%	岸本佳子
目的 高齢者の特徴と健康障害の関連を理解し、症状のアセスメントと援助方法を学ぶ 健康障害をもつ高齢者がたどる診断・治療過程における援助を理解し、ADL障害や認知症など健康障害の段階に応じた看護を学ぶ							
目標 1. 加齢に伴う疾病や健康障害をもつ高齢者の特徴を理解する 2. 老年期にみられる特徴的な疾病・症状と加齢との関連が分かり、看護の必要性を理解する 3. 高齢者の健康障害に対する診断・治療過程における看護を理解する 4. 高齢者の回復、生活に必要なリハビリテーションを理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～3	高齢者の特徴的な疾患と看護 高齢者の疾患の特徴と現れ方を想起し総合的にアセスメントする技術を学ぶ 主な症状と看護/アセスメントのポイント （低栄養、貧血・痛み・倦怠感・発熱など）	講義	6～7	高齢者の健康段階に応じた看護 各健康段階に応じた高齢者への看護の視点 検査を受ける高齢者への援助 手術を受ける高齢者への援助 退院時の看護と継続看護	講義 演習		
4～5	高齢者の薬物療法時の看護 加齢に伴う薬物動態の変化 特徴的な疾患のある高齢者への看護と回復に向けたリハビリテーション ・循環器系の疾患 ・呼吸器系の疾患 ・認知症 ・精神・神経疾患	講義 講義 演習	8	高齢者が疾患を抱えながらも自分らしく生きるための看護 まとめ	講義 発表		
看護師教育の技術項目 23,35,52							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ループリック）							
教科書・参考書など 老年看護学 医学書院 ヘンダーソンの基本的看護に関する看護問題リスト ノーヴェルヒロカワ 老年看護 病態・疾患論 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
老年看護学援助論Ⅲ	1	30	2年	臨床判断能力の 実際 (老年看護展開)	30	100%	安河内なつき
学習目的・目標 高齢者を対象とした臨床判断能力の実際を学ぶ。 老年期の対象の自立のための援助を考えることができる。 1 老年期の健康障害をもつ対象と対象をとりまく環境を捉えニーズが理解できる 2 対象の自立のための計画を立案することができ、実践できる 3 実践後、対象の反応を元に評価をおこない自立に向かった援助であったかを振り返ることができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	この授業についての進め方 看護展開についての想起 既習内容の想起(老年期の対象について)	講義	12～14	成人・老年看護学実習Ⅰの 受け持ち対象の看護展開	講義		
2～7	(小テスト)ヘンダーソンの基本的ニード分類による臨床判断 情報分類・アセスメント : 事例を用いて 事例の病態整理	講義 GW	15	まとめ	講義		
8	事例の全体像をつかむ 関連図の作成	講義 GW					
9	事例の対象の自立のための計画の立案	講義 GW					
10	事例の対象に対する援助の実践	演習					
11	実践を元に援助が自立に向かったものであったか SOAPを用いて評価を行う	GW					
看護師教育の技術項目							
地域との関連							
評価方法 パフォーマンス課題を用いたルーブリックとします							
教科書・参考書など 老年看護学 医学書院 老年看護 病態・疾患論 医学書院 臨床看護総論 医学書院 ヘンダーソンの基本的看護に関する看護問題リスト ノーヴェルヒロカワ							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
成人・老年看護学実習Ⅰ	2	90	2年		90	100%	安河内 なつき
目的 社会的背景（社会や家庭での役割、入院前の生活習慣、発達課題）と健康障害の関連や健康段階に着目した対象への看護を学ぶ							
目標 成人期から老年期にある各対象の特徴や生活史、価値観を踏まえ、健康レベルに応じた看護が実践できる							
実習内容・実習方法 実習場所: 病院 実習方法: この実習はプロジェクト学習であり、ビジョンとゴールを設定して行う 成人期・老年期にある様々な健康段階にある対象を1名受け持つ 対象の社会的背景をとらえ、対象の価値観を尊重し、健康段階別に応じた看護実践能力を養う							
看護師教育の技術項目 No.1,2,3,4,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,29,30,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,47,48,49,50,52,54,55,56,57,58,59,60,61,62,63,64,65,66,67,68,69,70,71							
評価方法 実習評価表に基づいて評価する							
教科書・参考書など 実習の前に読む本(医学書院)成人看護学総論(医学書院)、看護学概論(医学書院)、老年看護学(医学書院)、老年看護病態・疾患論(医学書院)、成人看護学[2, 3, 4, 5, 7, 9, 10](医学書院)							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価割合	担当者
成人・老年看護学実習Ⅱ	2	90	2年		90	100%	岸本佳子
目的 急性の症状を持つ対象（または周術期）にある対象を統合的に理解し、健康段階に応じた看護を学ぶ							
目標 成人期から老年期にある各対象の生命維持と苦痛緩和への援助が実践できる 対象の生体機能の順調な回復を促し、回復状態に合わせた日常生活自立、対象が望む生活に向けての援助ができる							
実習内容・実習方法 実習場所: 病院 実習方法: この実習はプロジェクト学習であり、ビジョンとゴールを設定して行う 成人期・老年期の急性期（または周術期）にある対象を1名受け持つ それぞれの発達段階に応じて身体的変化に伴って起こる心理的な変化や社会的影響についても理解し、対象だけではなくその家族も含めた援助を実践する							
看護師教育の技術項目 No. 1, 2, 3, 4, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 30, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 47, 48, 49, 50, 52, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71							
評価方法 実習評価表に基づいて評価する							
教科書・参考書など 実習の前に読む本(医学書院)、成人看護学総論(医学書院)、看護学概論(医学書院)、老年看護学(医学書院)、老年看護病態・疾患論(医学書院)、成人看護学[2, 3, 4, 5, 7, 9, 10](医学書院)、臨床外科看護総論（医学書院）							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

小児看護学の構成



小児看護学の考え方

1. 教材観

子どもは成長発達の途上にあり、形態的・機能的変化、あるいはこころと身体の変化が複雑に絡み合いながら、様々な生活習慣を獲得し、健全な大人になるための人格が形成される時期である。そして、この時期に良い環境の中で愛情をもって育てられてこそ、健やかに成長することができる。しかし、近年の社会情勢の変化として、少子高齢化、核家族化、女性の社会進出等により、育児観や家族観の変化がみられ、子どもの心身にも大きな影響を与えている。

したがって、小児看護においてはこれらの社会情勢の変化を理解し、子どもを取りまく環境の重要性や心身共に健やかに育てるための保健指導の重要性についても理解が必要である。そのうえで、一人ひとりの子どもの健全な成長・発達と家族の発達を促し、子どもと家族が自分自身で健康を生涯守っていける保健行動が取れるように支援するための知識を身につける必要がある。

また、健康が障害された子どもに対しては、入院中の看護のみならず在宅における療養生活上の指導援助も必要である。フィジカルアセスメントをはじめとした小児看護特有の援助技術を教授し、子どもの状況を的確にとらえ、適切な判断と対処ができる基礎的能力の育成をめざしたい。

科目構成としては、4単位 105 時間とした。小児看護学概論では、子どもの心身の成長、発達の過程や特徴を理解し、子どもをとりまく母親、父親、家庭また家庭以外の環境を含めた視点で対象を理解していく。また、小児看護の歴史を振り返り、現状を理解するために小児保健医療の動向や対策について学習し、子どもの人権および倫理を尊重した、家族を含めた小児看護の役割を学ぶ。小児看護学援助論Ⅰ（小児疾患）では小児期に多い疾患、症状、治療について学び、小児看護学援助論Ⅱにつなげる。小児看護学援助論Ⅱ（臨床判断能力の実際：看護展開）では疾患を踏まえ、子どもと家族の状態にあった援助について学ぶ。小児看護学援助論Ⅲ（子どものヘルスアセスメント）では、基礎看護学などでの学びを基に、成長発達の途上にあるがゆえに、環境の変化を受けやすく変化が速い子どもの健康障害の特性に応じた看護の方法を学ぶ。

臨地実習では、2単位 60 時間とし、小児看護学実習 1（病院実習）30 時間と小児看護学実習 2（保育園実習）30 時間で構成する。少子化の進行の中で、一部の小児専門病院を除き、入院患児の減少、入院期間の短縮化により実習環境も変化してきている。実習では、実際に子どもに接し健康な子どもを理解することから、健康障害を持つ子どもの看護援助ができるようにしたい。短期間の中でも健康障害を持った子どもを理解し、愛情を持って援助することを体験させたい。

2. 学生観

学生は、生活スタイルの変化に伴い価値観が異なっており、論理的思考の進め方が苦手、対人ストレスに弱い。情報メディアの親しみが度が高く、イメージからの直感的理解に長けているなどの特性を持っている。

小児看護学の分野についてみると、現代社会の少子化・高齢化・核家族化・地域社会の希薄化に伴い、子どもとの接触体験が少ない学生が増えていることも重要な側面といえる。それにより、子どもの存在自体を遠く感じている学生もあり、可愛いとは思えるけれども、好意的でない感情を表現する学生も見かけられる。一方、学生の中には既に結婚し、出産を終え育児をしながら通っている学生もあり、子どもの特性は比較的理解しやすいが、それらを看護に繋げられない学生も少なくない。

3. 指導観

学生が子どもに興味・愛情を持ち、成長・発達や子どもの行動の意味を理解して科学的判断に基づく実践力を身につけるために、授業に際して学生の特性を考え視聴覚教材を適切に活用して、学習する環境を整える必要がある。

身近な子どもを意図的に観察することで、子どもと接することの少ない学生に、子どもへの関心を喚起し、学んだ成長発達の知識を実際の子どもの適応することにより学習効果を高めていく。また、施設見学や特別講義を組み入れ、小児看護の場の実際を学び、小児看護の機能や役割について考えさせる。その際には、グループワークや学内演習を取り入れ、一方的な注入教育にならないように留意する。

臨地実習では、健康な子どもについての成長・発達過程および保育の基本を保育所実習で学ぶ。そこでの学びを活かし、病院実習で健康障害を持つ子どもと家族に対してかかわる。また、機会があれば、小児看護における看護の継続性についても学ぶ。

どの場所のかかわりにおいても子どもの特徴、成長・発達を理解でき、大人へと発達していく過程で環境の与える影響を考えさせ、看護者も環境の一部であるとともに調整役としての存在であることを認識させる。特に、健康障害をもつ子どもの看護では、親からの分離や苦痛の伴う治療で不安定になっている子どもの気持ちをよく考えさせ、指示的になったり、不必要に恐がりせず、人として尊重しなければならないことを認識させる。

「いかなる健康状態にあっても、その子どもにとって最適の健康状態にあるように、そして、最高の発達段階に達するよう援助する」という小児看護の基本を実感できるよう指導者のサポートを受けながら学ばせたい。

目的

小児各期の成長・発達段階について理解し、健全な人格形成のために必要とされる養護と健康障害を持つ小児と家族に対する看護について学ぶ

目標

1. 子どもの成長・発達について学ぶ
2. 子どもが健全な生活を送るために成長・発達に応じた養護と保健指導を学ぶ
3. 子どもを取り巻く環境は健康障害を起こす可能性のあることを理解し、看護の支援について学ぶ
4. 子どもの健康な発達を支える福祉、保健、医療、教育のしくみや連携について学ぶ
5. 健康障害が子どもや家族に及ぼす影響を理解し、健康レベルや発達段階に応じた看護が展開できる基礎的能力を学ぶ

小児看護学のマトリックス

科目	講義内容									ポート フォリオ	プロジェ クト	関連理論・その他		基礎・専門基礎分 野との関連
小児 看護学概論 （ 1 ）単位 （ 30 ）時間 1年	小児看護の主な概念、小児看護の特徴、子どもの最善の利益にかなう医療・看護、小児を取り巻く医療の変遷と課題、小児を取り巻く環境、小児看護における概念と理論 保健統計からみた小児と健康問題、子どもの権利、小児を守る法律と制度									○	○	家族発達理論 家族システム理論 エリクソンの自我発達理論 ピアジェの認知発達理論 ボウルビイの愛着理論 セルフケア理論 ストレス理論	公衆衛生学 社会福祉 関係法規 医療倫理 社会学	
援助論		主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程(展開)	ポート フォリオ	プロジェ クト	関連理論・そ 他	フィジカル	
小児看護学援助論Ⅰ （ 1 ）単位 （ 30 ）時間 2年	こどもの特徴的な 疾患とその治療	先天異常 新生児の特徴と疾患 皮膚疾患 呼吸器疾患 循環器疾患 消化器疾患 腎・泌尿器疾患 神経・筋疾患 血液疾患・小児がん 感染症 内分泌・代謝疾患 免疫疾患・膠原病・皮膚疾患 精神疾患とメンタルヘルス(DV・虐待)		哺乳障害 発疹・掻痒感・痛み 咳嗽・呼吸困難 チアノーゼ・倦怠感 悪心・嘔吐・下痢 便秘・脱水・発熱 血尿・浮腫・痙攣 意識障害	輸液療法 薬物療法 酸素療法 食事療法	腰椎穿刺 骨髄穿刺 X－P CT 脳波 尿検査 血液検査								解剖生理学 病態治療論 薬理学 生化学 微生物学 病理学 栄養学 公衆衛生学 社会福祉 関係法規
小児看護学援助論Ⅱ （ 1 ）単位 （ 15 ）時間 2年	臨床判断能力の 実際 (小児看護展開)	健康問題・障害の過程と特徴と看護の展 開	呼吸器	咳嗽・呼吸困難 チアノーゼ・倦怠感 便秘・脱水・発熱	輸液療法 薬物療法 食事療法	血液検査 尿検査	環境整備 清拭 食事介助 与薬方法 酸素療法 吸入・吸引 バイタルサイン測定 コミュニケーション プレパレーション ディストラクション	No.1,30,31,32,63 64,65	情報収集 アセスメント 気管支喘息の看護過程			自我発達理論 認知発達理論 愛着理論 ストレス理論 家族発達理論 家族システム理論 ニード論 危機理論	問診 視診 触診 聴診 バイタルサイン測定 コミュニケーション	解剖生理学 病態治療論 基礎看護学 人間関係論 公衆衛生 医療倫理 栄養学 薬理学 病理学、生化学
小児看護学援助論Ⅲ （ 1 ）単位 （ 30 ）時間 2年	こどものヘルス アセスメント	健康問題・障害のある小児に必要な看護 技術 子どもと家族に起こりやすい・直面しやす い状況と看護 子どもにみられる主な症状と看護 小児の成長・発達と発達段階に応じた日 常生活援助（保健） 健康問題・障害を持つ小児の発達段階 に応じた看護 ヘルスアセスメント			輸液療法 薬物療法 食事療法	腰椎穿刺 骨髄穿刺 X－P CT 脳波 尿検査 血液検査	環境整備 清拭 陰部洗浄、臀部浴 食事介助 輸液管理 与薬方法 吸入・吸引 遊び バイタルサイン測定 計測 コミュニケーション プレパレーション	No.4,7,21,24,26,27 29,30,31,32,38,39,40 44,50,51,52,53,56,57		○ 遊び 小児看 護技術		自我発達理論 認知発達理論 愛着理論 ストレス理論 家族発達理論 家族システム理論 ドローターの仮説 ニード論	問診 視診 触診 聴診 打診 計測 バイタルサイン測定 コミュニケーション	解剖生理学 病態治療論 基礎看護学 栄養学 薬理学 病理学、生化学
小児看護学実習 （ 2 ）単位 （ 60 ）時間 3年	病院 保育所	小児期の対象とその家族を理解し、 成長、発達、健康障害の経過に即し た看護実践					環境整備 清拭・入浴 陰部洗浄、臀部浴 食事介助 輸液管理 与薬方法 吸入・吸引 遊び 遊び バイタルサイン測定 コミュニケーション プレパレーション	No.1,3,4,13,20,21,22 23,24,26,27,29,30,31 32,34,43,50,52,55,56 57,64,65,70,71 遊び プレパレーション		○				

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ず

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者					
小児看護学概論	1	30	1年		30	100%	横川翔子					
目的 子どもの特徴と子どもを取り巻く環境を理解して、小児看護とは何かを考え続ける素地を作る												
目標 小児看護とは何かを自分の言葉で表現できる												
授業内容・授業方法												
回数	内容		方法	回数	内容		方法					
1.2	第1章：小児看護の特徴と理念		講義 GW	13	第7章：子どもと家族を取り巻く社会		講義 GW					
14												
3.4				第2章：子どもの成長・発達				15	まとめ		講義 GW	
5.6				第3章：新生児・乳児								
7.8	第4章：幼児・学童											
9 10	第5章：思春期・青年期の子ども											
11 12	第6章：家族の特徴とアセスメント		講義 GW									
看護師教育の技術項目												
評価方法 筆記試験												
教科書・参考書など 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院												
備考・履修条件など												

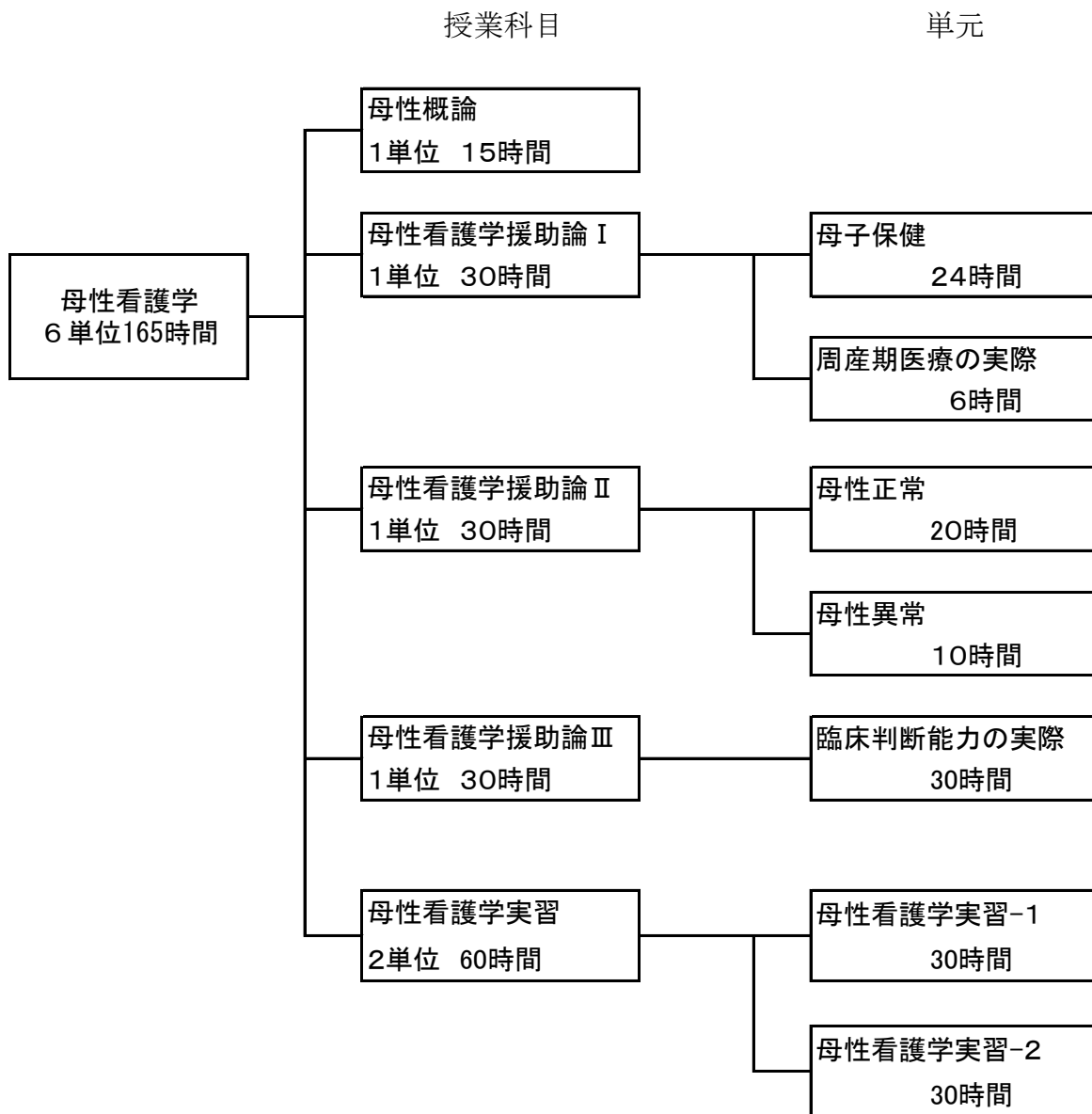
授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
小児看護学援助論Ⅰ	1	30	2年	こどもの特徴的な疾患とその治療 ① ② ③	12 6 12	40% 20% 40%	寺嶋秀幸 塚田周平 赤川友布子
目的 小児期に多い疾患、症状、治療について学ぶ							
目標 1 健康障害が子どもと家族に及ぼす影響と反応を発達段階に応じて理解できる 2 小児疾患の経過と特徴が理解できる 3 子どもの主な疾患の特徴と治療について理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	【寺嶋先生：1～6】 Ⅰ．遺伝子・染色体の異常と形態異常 遺伝性疾患、先天代謝異常症、染色体異常症		講義	7	【塚田先生：7～9】 Ⅶ．皮膚疾患 アトピー性皮膚炎		講義
2.3	Ⅱ．新生児の特徴と疾患 新生児の代表的疾患 (黄疸、仮死、呼吸器、血液疾患) 低出生体重児について		講義	8	Ⅷ．腎・泌尿器疾患 糸球体腎炎、ネフローゼ症候群		
4	Ⅲ．消化器疾患 肥厚性幽門狭窄症、ヒルシュスプルング病 腸重積症		講義	9	Ⅸ．感染症 溶レン菌感染症、腸管出血性大腸菌感染症 ワクチンで予防できる細菌感染症、 (ジフテリア、百日咳、破傷風、結核) ワクチンで予防できるウイルス感染症 (水痘、麻疹、風疹、ムンプス、 ポリオ、日本脳炎) 突発性発疹、伝染性紅斑 ヘルパンギーナ、手足口病		講義
5.6	Ⅳ．精神領域の疾患 精神遅滞、自閉症、ADHD、チック症 神経性食欲不振症、DV、虐待		講義	10	Ⅹ．内分泌・代謝 成長ホルモン分泌不全性低身長、糖尿病		講義
				11.12	Ⅺ．免疫疾患 原発性免疫不全症候群、膠原病		講義
				10	【赤川先生：10～15】 ⅩⅡ．呼吸器疾患 肺炎、気管支喘息		講義
				11.12	ⅩⅢ．循環器疾患 先天性心疾患（ファロー四徴） 乳幼児突然死症候群（SIDS） 川崎病		講義
				13	ⅩⅣ．神経・筋疾患 てんかん、熱性けいれん、脳性まひ		講義
				14	ⅩⅤ．血液疾患・小児がん 血小板減少性紫斑病、血管性紫斑病 白血病、神経芽細胞腫、ウィルムス腫瘍		講義
				15	ⅩⅥ．アレルギー疾患 気管支喘息、アトピー性皮膚炎		講義
看護師教育の技術							
評価方法 課題レポート、筆記試験により評価する							
教科書・参考書など 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院 小児臨床看護各論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
小児看護学援助論Ⅱ	1	15	2年	臨床判断能力の実際 (小児看護展開)	15	100%	青嶋沙耶夏
目的 基礎看護学などでの学習内容を基盤に、看護事例を用いたワークを通して、子どもとその家族の状況にあった確な援助を提供できる力を養う。この過程で、臨床判断の思考過程「気づき」「解釈する」「反応する」「リフレクション」を身につける。							
目標 事例を通して小児と家族への看護が展開できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	小児の看護過程の特徴	講義					
2	事例展開 1. 事例紹介 2. 情報収集と分類	講義 GW					
3～5	アセスメント、看護問題、看護計画 関連図	講義 GW					
6・7	臨床判断の実際 事例から臨床判断の思考を用いて、 患児の状態にあった看護援助を考える	講義 GW					
8	評価	講義 GW					
看護師教育の技術項目 No, 1, 30, 31, 32, 63, 64, 65							
地域との関連 役所、教育機関、児童相談所、警察署、保健センター							
評価方法 提出課題							
教科書・参考書など 小児看護学概論 小児臨床看護総論 医学書院 小児臨床看護各論 医学書院 ヘンダーソンの基本的看護に関する看護問題リスト ヌーヴェルヒロカワ 看護の基本となるもの 日本看護協会出版会							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
小児看護学援助論Ⅲ	1	30	2年	こどものヘルス アセスメント	30	100%	馬渕成美
学習目的 基礎看護学などでの学びを基に、成長発達の途上にあるがゆえに、環境の変化を受けやすく変化が速い子供の健康障害の特性に応じた看護の方法を学ぶ。							
学習目標 1. 子どもの健康段階に応じた看護の方法が理解できる 2. 基本となる小児看護技術の方法が理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1・2	Ⅰ. 病気・障害をもつ子どもと家族の看護 1. 病気・障害が子どもと家族に与える影響 2. 子どもの健康問題と看護 * 新生児期／乳児／幼児／学童／思春期		講義	11～14	Ⅴ. 検査・処置を受ける子どもの看護 1. 診療に伴う技術 2. 日常生活援助技術		GW 演習
3・4	Ⅱ. 子どもにおける疾病の経過と看護 1. 慢性期にある子どもと家族の看護 2. 急性期にある子どもと家族の看護 3. 周手術期の子どもと家族の看護 4. 終末期にある子どもと家族の看護		講義	15	Ⅵ. 特別な状況、直面しやすい状況と看護 1. 虐待を受けている小児と家族への看護 2. 災害を受けた小児と家族への看護		講義
5～8	Ⅲ. 子どものアセスメント 1. コミュニケーション 2. バイタルサイン 3. 身体計測 4. 一般状態のアセスメント 5. プレパレーション・ディストラクション		講義 演習				
9・10	Ⅳ. 症状を示す子どもの看護 * 不機嫌・啼泣・痛み・呼吸困難・ チアノーゼ・ショック・意識障害・ 痙攣・発熱・嘔吐・下痢・ 便秘・脱水・浮腫・出血・貧血・発疹		講義				
看護師教育の技術項目 No. 4, 7, 21, 24, 26, 27, 30, 31, 32, 38, 39, 40, 44, 50, 51, 52, 53, 56, 57							
地域との関連 役所、教育機関、児童相談所、警察署							
評価方法 筆記試験及び提出課題							
教科書・参考書など 小児看護学概論/小児臨床看護総論（医学書院） 小児臨床看護各論（医学書院）							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
小児看護学実習	2	60	3年	小児看護学実習-1 小児看護学実習-2	30 30	100%	西川あゆみ
【小児看護学実習】 実習目的 子どもの成長・発達を促す関りを通して、健康レベルに応じた子どもの特性を理解し家族を含めた看護について学ぶ 実習目標 子ども各期の成長発達を理解し、健康レベルに応じた子どもとその家族に対しての看護を考えることができる 小児看護看護学実習－１と小児看護学実習－２を合わせて総合評価とします							
実習内容・実習方法 【小児看護学実習-1】 実習場所：病院 実習方法：プロジェクト学習で行う 実習までに情報リサーチ、ビジョンゴールの設定 健康障害を持つ子どもを1名受け持ち、評価規準をもとに学習活動の作成 日々の関わりから受け持ちにどのような問題が見えてきたかその問題解決のためにはどのような援助や支援が必要かを考え実践していく							
【小児看護学実習-2】 実習場所：保育所 実習方法：プロジェクト学習で行う 実習までに情報リサーチ、ビジョンゴールの設定 健康な子どもへの援助について評価規準をもとに学習活動の作成 成長・発達を促す関わりについて学ぶ							
看護師教育の技術項目 No.1,3,4,7,10,13,20,21,22,23,24,26,27,29,30,31,32,34,38,39,43,47,48,49,50,51,52,55,56,57,58,59,60 62, 63, 64, 65, 66, 67, 69, 70, 71							
評価方法 実習評価表に基づいて評価する							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

母性看護学の構成



< 母性看護学の考え方 >

教材観

母性看護学は 妊産褥婦および新生児への看護活動に加え、次世代の健全育成を目ざし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした看護であり、同時に健康な社会を築くための母親・子ども・家族の健康に働きかける看護である。そのため、母性看護の対象は、女性と生殖や育児のパートナーとしての男性、子どもが生まれる、あるいは乳幼児を育てる家族、その家族が生活する地域社会をも含む。

母性をめぐる社会の変化は著しく、女性の生涯や役割の多様化、医学の進歩・発展、高齢化と少子化、母子をめぐる生活環境の著しい変化、国際結婚・外国人家族増加など、新たな母性看護の問題も起きている。さらには、現代文明がもたらした地球環境問題は、私たちや将来の生活も脅かしている。

また、不妊治療の高度生殖医療の進歩に伴い、生命倫理に関わる倫理観も多様化している。周産期の関わりだけでなく母性における各ライフサイクルの中でも、生命の重み、尊厳性を考えることが必要である。

本領域では、母性看護の対象を取り巻く社会の変遷と現状について理解を深める。超高齢社会と少産少子化は急激に進み、社会構造全体が大きく変化している中で、母性看護学の対象である女性および母子をとりまく生活環境も変化してきていることを理解する。

また、生命倫理に関する問題、育児体験の減少と子育て不安の増加を招き、核家族化、女性の社会進出などによる育児環境にかかわる問題も起きており、子育て支援の必要性についても理解する機会とする。

また、リプロダクティブヘルス/ライツ(性と生殖に関する健康と権利)についての認識を深め妊娠・分娩・産褥期の看護にとどまらず生命倫理、母子相互作用など広い視野で学ぶことを目的とし、学習者の母性観、父性観が成長することも期待する。

学生観

学生の大半は青年期であり、出産経験がある学生は少数である。よって、出産や母性という概念についてはイメージがもちにくい学生が多い。しかし、これから子どもを産み育てる世代でもあり、新しい生命の誕生、女性が母親になること、家族の変化、父性の変化の過程は、学生にとっても関心のあることである。自分がその立場ならと考えるところから始めることで、興味・関心をひくことができると考える。

また、青年期の学生は感受性が豊かであるが、情緒的には不安定な時期でもある。周産期の対象やその家族と関わる体験が、その後の学生自身の性や生殖についての考え方に影響を与えることが予測される。

指導観

概論では、母性看護の対象の特性では母性だけではなく父性、家族についても言及し、我が国の人口問題、母性をとりまく社会問題、家族の役割と機能などについて学んでいく。また、人間にとって性と生殖のもつ意味を考える。グループワークを取り入れ、資料や統計の収集、把握の方法を獲得し、学生間の意見交換を通して視野を広げられるようにする。

援助論Ⅰでは、母性の特性に関連した基本的な知識をもとにして、思春期から更年期までに女性の理解と、その健康問題への支援に必要な知識を学ぶ。また母子保健統計、母子保健施策についても学び、広い視野で母性看護を理解する機会とする。リプロダクティブヘルスケアをめぐる様々な課題についてGWでの学習、討議の機会をもち、生殖やセクシャリティに関する自己決定の意義について理解を深める。そして、少子化、虐待など母子を取り巻く様々な社会問題についても理解を深める機会とする。また、妊娠、そして、出生前診断、不妊治療などマタニティサイクルに関連する治療、検査を理解する機会とする。

援助論Ⅱ・Ⅲでは、核家族や少子化により学生の身近に妊産褥婦がいないことが多くイメージすることが難しいと考えられるため、視聴覚教材、モデル人形を用いた疑似体験、模型を使用しできるだけイメージ化をはかりながら、必要な看護技術を学び、マタニティサイクルの正常と異常を理解した上で正常褥婦と正常新生児の紙面事例を用いてウェルネス型の思考で対象のもてる力を引き出す看護について考える機会とする。

実習―1では、母子への看護体験を通して、出産場面や母と子の交流場面から学生自身が親への感謝と生命の尊厳への思いを深め、将来親になるものとしても成長の機会となるよう関わっていく必要がある。産科病棟での実習では、妊娠から分娩・産褥・新生児までの一連の過程を統合して捉えられるように指導したい。妊娠、分娩、産褥、新生児を切り離して考えるのではなく、妊娠中の管理が分娩、産褥、新生児に影響し、また、母子相互作用の影響についても関連させ、受け持ち褥婦を通して学んでもらいたい。

実習―2では、地域における子育て支援拠点事業について学び、乳幼児を育てる家族と関わることで母子相互関係、愛着形成の多様なあり方の実際を学んでもらいたい。また支援の実際を学ぶ機会とし、地域における子どもの健全な成長発達を促進するための支援について目的意識をもって実習に臨めるようにする。

目的

次世代の健全育成を目ざし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした母親・子ども・家族の健康に働きかける看護に必要な基礎的知識、技術、態度を養う

目標

1. 母性看護の対象を取り巻く社会の変遷と現状および母子保健等の現状と課題について理解できる
2. 母性看護の課題と役割について理解できる
3. 母性看護の対象の特徴を理解できる
4. 母子保健対策の現状と課題について理解できる
5. リプロダクティブヘルスケアおよび女性のライフサイクル各期の特徴と看護について理解できる
6. 妊娠前からの女性・家族への支援について理解できる
7. 正常経過にある妊産褥婦と新生児の看護について理解できる
8. 周産期の異常をもつ対象者への看護について理解できる
9. 対象者を統合的にとらえ、ウェルネス思考による課題解決方法について理解できる
10. 母児の健康に働きかける看護に必要な基礎的実践力を身につけることができる

母性看護学のマトリックス														
科目	講義内容													基礎分野・専門基礎分野との関連
母性看護学概論 (1)単位 (15)時間 1年	母性看護の基盤となる概念 母性とは 母子関係と家族発達 セクシュアリティ リプロダクティブヘルス／ライツ ヘルスプロモーション			母性看護のあり方 少子化の進行と対応 プリシード・プロシードモデル 母性看護における倫理・安全・事故予防 母性看護の対象を取り巻く社会の変遷と現状 少子化対策 エンゼルプラン			母子保健施策 母性看護の対象理解 女性のライフサイクルにおける形態・機能の変化 ホルモン動態 妊娠と胎児の性分化 妊娠の成立 女性のライフサイクルの変遷			家族の発達段階 母性の発達・成熟・継承			社会学 心理学 公衆衛生 関係法規 社会福祉学	
援助論	単元名	主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程(展開)	ポートフォリオ	プロジェクト	関連理論・その他	フィジカルアセスメント	基礎分野・専門基礎分野との関連
母性看護学援助論Ⅰ (1)単位 (30)時間 2年	母子保健 周産期医療の 実際	母子保健統計からみた動向 母性看護に関する組織と法律 母子保健施策からみた現状 母性看護の場と職種 ライフサイクル各期の健康問題と看護 リプロダクティブヘルスケア 家族計画 性感染症 人工妊娠中絶 喫煙 性暴力被害 HIV感染 児童虐待 ワークライフバランス 妊娠・出生前診断 不妊治療			不妊治療	妊娠反応 内診 出生前診断 超音波検査						エリクソン		社会学 心理学 公衆衛生 関係法規 社会福祉学
母性看護学援助論Ⅱ (1)単位 (30)時間 2年	母性正常	妊娠期における看護 分娩期における看護 産褥期における看護 新生児期における看護				妊婦の保健相談 (母親・両親学級 パースプラン) 妊婦・胎児の健康状態 アセスメント 分娩期の看護 新生児期における看護 (沐浴 臍帯処置 栄養 産褥期における看護)	No.1,28,57,58,63,64,65	正常経過の褥婦 ウェルネス看護診断				親役割獲得過程 (ルービン) 母子相互作用 (クlaus・ケネル) 愛着理論 (ボウルビー)		解剖生理学 (女性生殖器) (内分泌)
	母性異常	妊娠期の異常と看護 ハリス妊娠 感染 妊娠疾患 多胎妊娠 妊娠持続期間の異常 子宮外妊娠 分娩期の異常と看護 帝王切開 産褥期の異常と看護 子宮復古不全 乳房トラブル 母子分離にあたる母子看護 児を亡くした褥婦・家族看護 精神障害 新生児の異常と看護 新生児仮死 分娩外傷 低出生体重児 高ビリルビン血症			感染治療 帝王切開 吸引分娩 鉗子分娩									小児疾患 解剖生理学 (女性生殖器) 病態治療論 (感染症)
母性看護学援助論Ⅲ (1)単位 (30)時間 2年	臨床判断能力の 実際	正常経過の褥婦 新生児の事例展開 マタニティサイクルにおける対象の特性 母性正常の褥婦事例の日々のアセスメントと保健指導							正常経過の褥婦 ウェルネス看護診断					
		妊産婦に必要な技術について 新生児人形を用いて技術の習得 新生児人形での安全な沐浴の実施					子宮底長 腹囲測定 レオポルド触診法 NST CTG 乳房管理 授乳方法 産褥体操 子宮復古観察 胎盤計測、新生児の観察	児の抱き方・寝かせ方 哺乳・排気の仕方 おむつ交換 衣服の着脱の仕方 新生児の沐浴 No.1,28,57,58,63,64,65					解剖生理 (女性生殖器)	
母性看護学実習 (2)単位 (60)時間 3年	母性ー1 病棟 30 時間 母性ー2 子育て 30 時間	病棟での周産期にある対象と家族に 対する看護実践と新生児の看護 地域子育て支援センターにおいて地域 の子育て拠点事業と育児支援の実際を 学ぶ						No.1,4,8,13,14,20,28, 47,78,49,50,57,58,59, 60,61,62,63,64,65,69, 70,71		○	(○)			

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ず

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価 割合	担当者
母性看護学概論	1	15	1年		15	100%	井手窪 澄子
目的 次世代の健全育成を目指し、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした、母児とその家族の健康に働きかける看護に必要な、基礎的知識、技術、態度を養う							
目標 1. 母性看護の対象を取り巻く社会の変遷と現状、および母子保健対策の現状と課題について理解できる 2. 母性看護の対象の特徴を理解できる 3. リプロダクティブヘルスケアおよび、女性のライフサイクル各期の特徴と看護について理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	母性看護の基盤となる概念	講義 GW	5	母性看護の対象理解 女性のライフサイクルにおける形態・機能の ホルモン動態	講義 GW		
2	セクシュアリティ リプロダクティブヘルス／ライツ ヘルスプロモーション	講義	6	妊娠と胎児の性分化 妊娠の成立	講義 GW		
3	母性看護のあり方 少子化の進行と対応 母性看護における倫理・安全・ 事故予防	講義	7	女性のライフサイクルの変遷 母性の発達・成熟・継承	講義 GW		
4	母性看護の対象を取り巻く社会 の変遷と現状 少子化対策 母子保健施策、関係法規	講義	8	知識の確認 まとめ	小テスト		
看護師教育の技術項目							
評価方法 筆記試験 60％ パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック） 40％							
教科書・参考書など 母性看護学概論 医学書院 （参考書：女性生殖器 医学書院、母性看護学各論 医学書院）							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
母性看護学援助論Ⅰ	1	30	2年	母子保健 周産期医療の 実際	30	100%	井手窪澄子
目的 次世代の健全育成を目指し、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした、母児とその家族の健康に働きかける看護に必要な、基礎的知識、技術、態度を養う							
目標 1. 母性看護の対象を取り巻く社会の変遷と現状、および母子保健対策の現状と課題について理解できる 2. リプロダクティブヘルスケアおよび、女性のライフサイクル各期の特徴と看護を理解できる 3. 母性看護の課題と役割について理解できる 4. 母子保健対策の現状と課題について理解できる 5. 妊娠前からの女性・家族への支援について理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～2	母子保健統計からみた動向 母性看護に関する組織と法律 母子保健施策からみた現状 母性看護の場と職種	講義	9～12	妊娠の診断 診察と検査	講義		
3～5	ライフサイクル各期の健康問題と看護 思春期の健康と看護 成熟期の健康と看護 更年期の健康と看護 老年期の健康と看護	講義 GW	13～14	出生前診断 不妊治療と看護 不妊とその要因 不妊検査・治療 児を亡くした褥婦・家族への看護	講義 講義		
			15	児を亡くした女性・家族への対応 まとめ			
6～8	リプロダクティブヘルスケア ・家族計画 ・性感染症とその予防 ・人工妊娠中絶とその看護 ・喫煙女性の健康と看護 ・性暴力をうけた女性に対する看護 ・HIVに感染した女性に対する看護 ・児童虐待と看護、育児支援 ・ワークライフバランスとキャリア支援	講義 GW (ジグソー法)					
看護師教育の技術項目							
評価方法 筆記試験 60％ パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック） 40％							
教科書・参考書など 母性看護学概論 医学書院 母性看護学各論 医学書院 女性生殖器 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価 割合	担当者
母性看護学援助論Ⅱ	1	30	2年	周産期の看護	30	100%	井手窪 澄子
目的 次世代の健全育成を目ざし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした母親・子ども・家族の健康に働きかける看護に必要な基礎的知識、技術、態度を養う 目標 1.正常経過にある妊産褥婦と新生児の看護について理解できる 2.周産期の異常を持つ対象者への看護について理解できる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～2	妊娠期の経過	講義	11～12	産褥期の経過	講義		
3～4	妊娠期における看護	講義	13～14	産褥期の看護	講義		
5～6	分娩期の経過・看護	講義	15	まとめ	講義		
7～8	新生児期の経過	講義					
9～10	新生児期の看護	講義					
看護師教育の技術項目							
No.1, 28, 57, 58, 63, 64, 65							
評価方法							
筆記試験60% ポートフォリオ20% 小テスト20%							
教科書・参考書など							
母性看護学概論 医学書院 母性看護学各論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価 割合	担当者
母性看護学援助論Ⅲ	1	30	2年	臨床判断能力の 実際	30	100%	井手窪澄子
目的 次世代の健全育成を目ざし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした 母親・子ども・家族の健康に働きかける看護に必要な基礎的知識、技術、態度を養う							
目標 1. 対象者を統合的にとらえ、ウェルネス思考による課題解決方法について理解できる 2. 母児の健康に働きかける看護に必要な基礎的実践力を身に着けることができる							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	・ウェルネス思考のアセスメント ・紙面事例の読み合わせ	講義	9	・レオポルド触診・胎児心拍聴取、 ・NST・CTGの装着	演習		
2	・妊娠期のアセスメント	講義	10・11	・妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の ・各期に分かれてジグソー法でGW	GW		
3	・分娩期のアセスメント	GW	12	・ジグソー法でプレゼンテーション	GW		
4	・新生児期のアセスメント		13・14	・新生児バイタルサイン技術チェック	技術 チェック		
5	・産褥期のアセスメント						
6・7	・妊娠期から産褥・新生児期までの 関連図作成	講義 GW	15	まとめ	講義		
8	新生児の抱き方・寝かせ方 ・おむつ交換	演習					
看護師教育の技術項目 No.1、28、57、58、63、64、65							
評価方法 筆記試験 50％ パフォーマンス評価（パフォーマンス課題＋ルーブリック）20％ 小テスト 30％							
教科書・参考書など 母性看護学各論 医学書院 母性看護学概論 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
母性看護学実習	2	60	3年	母性看護学実習-1 母性看護学実習-2	30 30	100%	井手窪 澄子

実習目的・実習目標

<実習目的>

ウェルネスの視点で、周産期および子育て期にある母児の観察とアセスメントができ、自宅での生活を見据えて、必要な看護を考えることができる

<実習目標>

- ① 母児の健康状態およびその対象に必要な看護技術について理解している
- ② 母児の看護に必要な観察ができる
- ③ 母児の各期の経過が、現在の母児に及ぼす影響を理解し、対象の看護を考えることができる
- ④ 母児の各期に沿った変化が順調に進むように看護を考えることができる
- ⑤ 母親の育児行動を支援する看護が考えられる
- ⑥ 育児に必要な知識・技術を理解し、それぞれの発達段階における生活の中で、その家族が抱えやすい心情について、母児とコミュニケーションをとりながら理解できる。

実習内容・実習方法

【母性看護学実習-1】

- ・実習場所: 病院
- ・受け持ち対象: 褥婦・新生児
- ・実習方法: 受け持ち対象者を決定し必要な看護援助を考え、実践する
外来での保健指導の実際を学ぶ
プロジェクト学習・ポートフォリオで実習を行う

【母性看護学実習-2】

- ・実習場所: 地域子育て支援センター
- ・実習方法: 施設を利用する乳幼児とその家族と関わりながら、母子相互関係、愛着形成の多様なあり方の実際を知る。また子育てについての喜びや悩みの実際の声を聴く。地域における子育て支援拠点事業について学び、施設の役割を理解することで地域での子育ての現状と課題について学ぶ
プロジェクト学習・ポートフォリオで実習を行う

看護師教育の技術項目

No.1、4、8、13、14、20、28、47、48、49、50、57、58、59、60、61、62、63、64、65、69、70、71

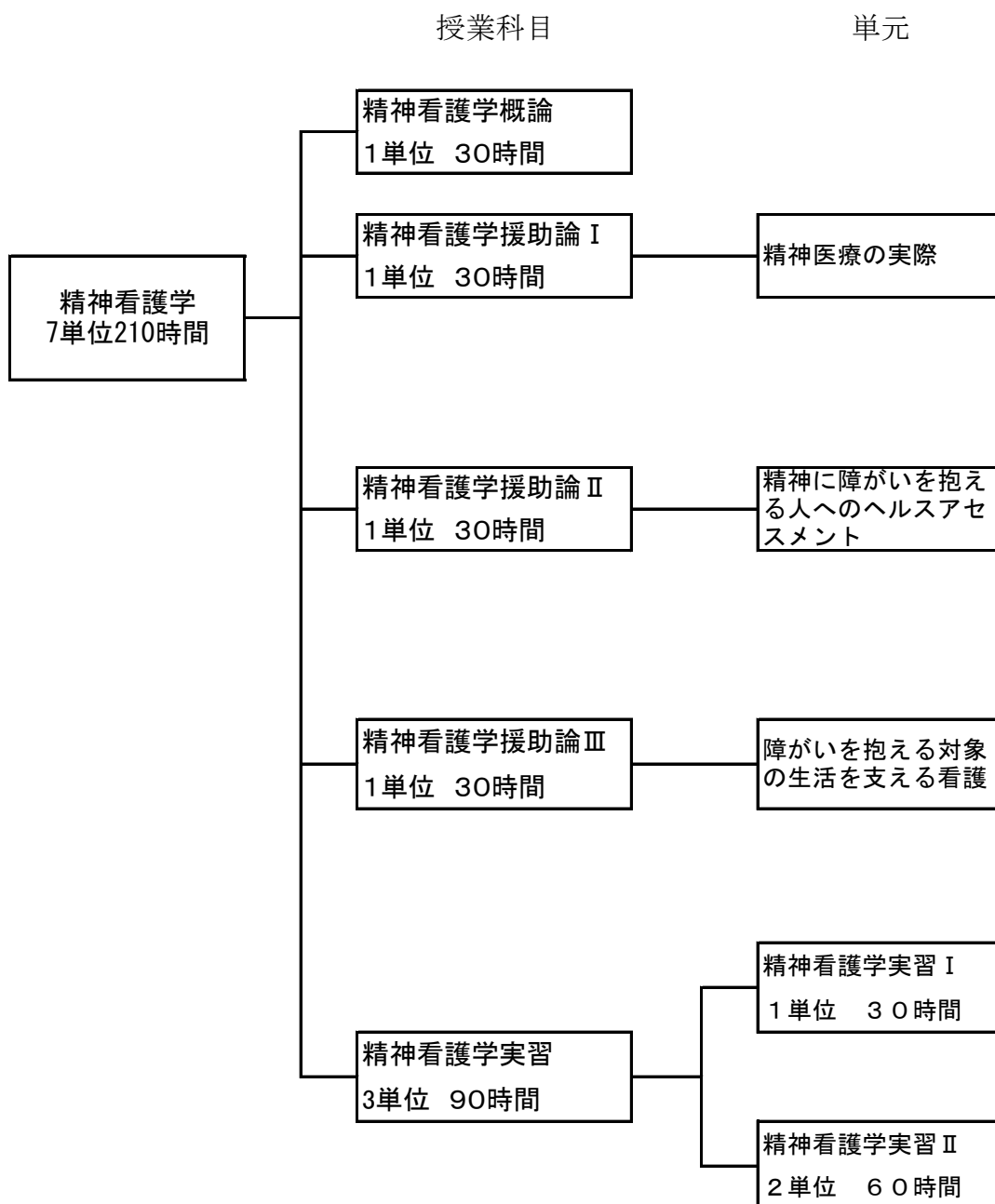
評価方法

実習評価表に基づいて評価する

備考・履修条件など

入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照

精神看護学の構成



<精神看護学の考え方>

教材観

人は精神障がいの有無に関わらず、自己実現を目指して、その人がその人らしく生きていく権利があり、全ての人が変化と成長の可能性をもっている。その過程を援助するのが精神看護の役割である。

人がその人らしく個性をもって生きるには、人と人のつながりが不可欠である。人の自己実現を妨げるのは、その人の問題だけではなく、その人をとりまく家族や友人、地域社会の問題でもある。したがって、精神看護の対象は個人だけではなく、家族集団や組織、地域社会をも包含したものである。その中で人はさまざまな危機に遭遇し、乗り越えながら生きており、そして危機に対して様々な反応を示すが、精神障がいは1つの反応の仕方である。したがって、精神障がいは特殊なものではない。

医療の進歩や社会状況の変化に伴い、精神保健医療は施設中心の医療から、地域支援に重点をおいた施設へと大きく変わってきている。そして、障がいと生きづらさを抱えながら対象は地域で生活しており、治療のために病院を利用している。そのため、精神看護学の内容も人々の精神保健の問題から、精神疾患を持つ人への看護、地域で生活する精神看護者への支援、身体疾患を持つ人や強いストレス状況に置かれている人の精神の健康問題まで多様になってきている。そこで、どのような場や状況においても活用できる精神看護学の知識・技術に焦点を当て、系統立てることを試みた。

精神保健医療の領域では、看護師、保健師、医師、臨床心理士、精神保健福祉士、作業療法士、薬剤師、栄養士など、さまざまな職種がチームを組んでケアを提供していくことが多くなってきている。そのなかで、精神の健康問題を持つ人の状態をアセスメントしたり、状況を判断したりすることが看護師に求められることから、精神医学の基礎知識について学び、精神医学の知識を用いて、どのような援助を展開できるかを考えられるように育成したい。

学生観

文部科学省は、「今日の学生は、自由で豊かな時代を生きながら、他者とのつながりを希薄化させ『人とうまく付き合えない』『人の噂が気になる』『無気力』などさまざまな心の問題を抱えている学生が増えている」¹⁾と報告している。看護学生に対する調査でも「自分の弱いところを人に見せたくない」「嫌われたくない」「家族にも相談できない」など、これまでの人間関係での経験を否定的に受け止め、自分を表現することに戸惑い、「話をしたい、そして自分を認めてほしい」と思いながらも、そのような場所がないことに悩んでいる学生も多いという結果が出ている。泣きながらも笑顔をつくるなど、自分の気持ちと表現が一致していない、常に笑っていることで自己を防衛しているようにも思える学生は多い。このように時代とともに青年期にいる看護学生のメンタルヘルスの問題は多様で困難化しているが、その支援は十分に確立されているとは言い難い現状である。

人が影響を受けながら生活している社会は複雑・多様化し、家庭や職場、学校、地域に至り精神の危機的状況を生み出している。そのため、社会の現状と心身の健康問題の関連から、危機的状況を引き起こす要因やメカニズムを学習する。さらに、精神看護の展開される場や状況を広くとらえ、その特徴や精神看護の役割と機能を理解する。また、対象は対人関係の持ちにくさによる健康問題を抱えており、看護師として精神を障がいされた人や家族が、看護者との人間関係を再構築する意義を理解し、精神看護に必要な基礎的知識、技術を学ぶ機会としたい。

指導観

精神看護学概論では、精神の構造と機能を理解し、健康と不健康に関する知識の幅を広げ、社会生活の中で、精神障がいがどのように生じるのかを考える。この单元では、精神医療における社会的変遷から精神看護の歴史にふれ人権擁護に関連する内容を学び、現代の精神保健福祉法へつながりエゾン精神看護の考え方を教授する。そして、精神を病む人を理解しつつ、患者－看護師の関係に重点をおき「共感」「受容」などコミュニケーション技術から治療的コミュニケーションへ発展させるための手立てを教授し、自己理解から他者理解へとつないでいく。対人関係構築へと理論を活用しながら、どのように連動させていくのかを学ぶ。また、障がいの捉え方や考え方についても様々な視点について学び、対象のつよみを見る視点を学んでいく。

精神看護学援助論Ⅰでは、こころの発達と精神保健について理解し、ライフサイクルにおける危機について学ぶ。人のこころの成長発達過程に社会や人との関係が、いかに必要であるのかを考え、またその影響で人のこころに危機をもたらすことも学ぶ。発達理論や危機理論を用いながらライフサイクル全般の精神障害について考えられる機会とし、最後に地域精神保健活動の現状について学び精神看護における社会復帰について考えられるようにした。

精神看護学援助論Ⅱでは、精神障害の成因から治療までの精神医学に関した内容を学び、精神疾患の状態像から症状についての知識を得て、精神看護学概論や精神援助論Ⅰと関連させたグループワークを取り入れながら、疾患と看護が連動する機会とした。

精神看護学援助論Ⅲでは、バイオ・サイコ・ソーシャルモデルから障がいをとらえ、ICF(国際生活機能分類)を活用した精神看護を考える機会としたい。看護診断では、問題点や病態に目を奪われてしまうことが多く、精神に障がいのある人の生活を意識した介入計画の立案が難しい現状がある。そのため、ICF(国際生活機能分類)を用いることで、障がいをもちながら生きることの全体像をとらえさせていくことができると考えたからである。特に強み(プラス面)を意識した ICF(国際生活機能分類)は、人が生きることについて考えることができ、精神障がいをとらえるのではなく、「生き方」に着眼できると考えたからである。そして、精神障がいのある人をとりまく家族や社会をどのように考え、その人を援助していくのかという視点を育成したいと考える。

II 目的

出生から死に至るまで、全てのライフサイクルにおけるこころの発達と、それに影響を与える要因を学び、現代社会に生きる人々のこころの健康問題を理解し、精神的健康の保持・増進および危機状態への援助に必要な基礎的知識・技術を習得する。そして、その過程を通して自己を洞察できる態度を養う

III 目標

1. こころの発達、ライフサイクルに伴う発達課題、心理・社会的危機およびこころの健康に影響をもたらす現代社会の環境的要因を理解する
2. 自我の形成と対処行動・防衛機制・不安や危機的状况と危機介入について理解する
3. 精神の健康および精神医療に対する社会的変遷と現状を学び、精神医療における今日的課題を考える力を養う
4. 精神保健福祉および精神医療体制の現状を理解し、社会資源機構およびその活用方法を理解する
5. 精神看護が展開される場と方法を理解し、精神保健医療チームの中における看護の役割を理解する
6. 精神看護の変遷から、今日の課題と役割を考える力を養う
7. 対人関係形成において基本となる自己洞察する態度を身につける

<精神看護学実習の考え方>

人間の人格は社会環境との相互作用の過程で形成される。特に誕生直後に関わる重要人物との信頼関係は、その後の人格形成や発達課題達成に及ぼす影響が多大である。しかし、現代の都市化・近代化は社会規範の変化をもたらし、その結果、家族関係のみならず学校や職場にも精神の危機的状况が生じている。それらを反映して精神障がい者も増加傾向にある。

精神看護学が対象とする範囲や取り扱う内容は、従来の精神保健と精神障がい者の看護が包含される。つまり、ライフサイクルの誕生以前から死に至るまでの全過程にある人を対象とし、その内容も心の発達から精神的健康の保持・増進、危機への対処、さらには精神を障害された個人とその家族の生活援助・指導から社会復帰、その後のフォローまでも包含する広範なものとなる。

社会病理が進行している現代社会において、精神看護学は複雑多様化する社会のニーズに応えられるように、増加しつつあるこころの問題や、その対処および精神を障害された人への援助について学び、全ライフサイクルを対象に適応できるように、他の看護学と連携し、展開していくことが求められている。

精神看護学実習における看護の方法は、看護者自身のコミュニケーション技法であることから、基本的な人間関係を学ぶ場として位置づけられる。精神を病む人やその人を取り巻く人々へ

の理解とともに、その人がその人らしく生きていけるように、ケアすることとケアされることの関係から、専門的な治療的コミュニケーション技術の力を養う。そして、関係を通して他者の世界と自分の世界を了解しつつ、他者の成長と自己実現に向かうことを実践から学ばせたい。

このような内容から、入院治療を受ける対象への看護を実践する精神看護学実習Ⅰ(30 時間 1単位)と、社会復帰施設における看護を実践する精神看護学実習Ⅱ(60 時間 2 単位)とに分け、精神看護学実習90時間3単位を考えた。

精神看護学実習の目的

看護学を学ぶものにとって、臨床実習の意義とは、実習の対象や家族との対人関係や問題解決過程をとおして、悩み・苦しみながらも、それまでの机上の学びであった知識・技術を統合し、看護観を深めながら成熟していくことにある。

精神看護学では、小児から老人までを対象とし、精神的援助の特性を学ぶ。臨地実習は各看護学の統合・まとめの段階に位置する。よって精神看護学実習では、既習の知識を統合して、主として精神を障害された人、およびその家族への援助を考え実践すること、そして、その過程を通して自己の内面の変化を洞察し自己理解や看護観を深めること、精神に障がいをもつ対象への理解を深め、精神の健康回復・生活を支えるための援助を行う基礎的能力を養うことを目的とする。

実習目標

精神に障がいのある人への関わりや日常生活援助の実際を通して、対象にとって必要な援助を考え、実践することができる

指導内容

- (1) こころの健康問題と看護
- (2) 精神看護と人間関係
- (3) 精神障がい者の看護
- (4) 社会復帰活動と支援
- (5) 事例展開とプロセスレコード
- (6) 地域における社会復帰施設の役割
- (7) 対象にとっての社会復帰施設の役割
- (8) 自己の課題に向き合いそれが対象との相互関係にどう影響しているか考える

精神看護学のマトリックス

科目	講義内容														
精神看護学概論 (1)単位 (30)時間 1年	人間のこころの構造と働き、こころの健康 発達段階・発達課題 障害の捉え方(バイオ・サイコ・ソーシャルモデル、ストレングスモデル、IDF) 精神医療における社会的変遷 精神に障害を抱える対象の看護に有用な理論 薬物療法と意思決定支援														
援助論		主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要疾患・症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程(展開)	ポートフォ リオ	プロジェク ト	関連理論・そ の他	フィジカル	基礎分野 専門 分野との関連	
精神看護学援助論Ⅰ (1)単位 (30)時間 1年	精神医療の 実際 精神に障害 を抱える対象 の今起こって いることを理 解するため に、疾患・病 態像を学ぶ	・精神障害の成因(内因、外 因、心因、器質性) ・主な精神症状(意識、意 欲、知能、知覚、感情、記 憶) ・主な精神状態(幻覚、妄 想、うつ、躁、摂食障害)・ 主な精神疾患(統合失調 症、躁うつ、てんかん、アル コール依存症、薬物依存) ・主な精神科治療・検査	精神	統合失調症 気分障害(双極性 障害、関連障害 群、抑うつ障害群) 神経性障害、スト レス関連障害、身体 表現性障 行動症候群 パーソナリティ障害 アルコール依存、 薬物依存 精神発達障害群	身体療法(薬物 療法、電気ショッ ク療法) 精神療法(精神 分析療法、森田 療法、内観療法) 行動・活動療法 (SST、作業療 法、レクリエーシ ョン療法、芸術療 法) 環 境・社会療法	血液検査 X線検査 CT検査 MRI 脳波 心理検査(人格 検査、YG性格検 査、記銘力検査)	精神症状・病態の把握 各期の看護(急性期・ 回復期・慢性期)					エリクソン ストレスコーピ ング理論 危機理論 ペプロウ トラベルビー ボウルビーの 愛着理論 甘え理論	循環動態の異常 耐糖能異常 意識障害 認知機能障害	物理学 情報科学 国語表現法 哲学 心理学 社会学 文化人類学 教育学 人間関係論 解剖生理学 公衆衛生学 関係法規 医療倫理 母性看護学概論 小児看護学概論	
精神看護学援助論Ⅱ (1)単位 (30)時間 1年	精神に障害 を抱える対象 へのヘルスア セスメント 精神に障害 を抱る対象の 疾患が生活 に及ぼす影 響を考えなが らヘルスアセ スメントを行 い、回復への 支援を学ぶ	・主な精神疾患と看護 ・主な治療と看護 精神療法、薬物療法、活動 療法、隔離・拘束、精神保健 福祉サービスの実際 精神を病む患者の理解 統合失調症、気分障害、神 経障害、てんかん	精神	せん妄 アカシジア、ジス キネジア 精神遅滞 コルサコフ症候 群 制止 幻聴、幻視 思考過程の変調 (観念奔逸、減裂 思考など) 悪性症候群 水中毒 学習障害、広汎 性発達障害 注意欠陥障害	身体療法(薬物 療法、電気ショッ ク療法) 前後の 看護 水中毒患 者の観察と対処 悪性症候群患者 の処置 隔離・拘束患者 の観察と看護	各検査の前後の 看護 体重測定 心電図検査	グループミーティング コンサルテーション 身体拘束・抑制・・隔 離 観察 治療的コミュニケーショ ンリエゾン精神看護						呼吸機能障害 循環動態の異常 意識状態 耐糖能異常 認知機能障害 運動器機能障害 消化器機能障害 排泄機能障害 高次脳機能障害 脳神経障害	物理学 情報科学 国語表現法 哲学 心理学 社会学 文化人類学 教育学 人間関係論 解剖生理学 病態治療論 薬理学 母性看護学概論 小児看護学概論	
(精神)看護学援助論Ⅲ (1)単位 (30)時間 2年	障がいを抱え る対象の生 活を支える看 護 精神に障害 を抱えながら 地域で生活 をされている 方のその人ら しい生活を送 るための生活 を支える看護 について学 ぶ	精神障害を抱える人の地域 生活支援の実際 精神障害を抱える人のコミュ ニケーションとその特徴 精神障害を抱える人との関 係の振り返り 精神に障害を抱える対象の 看護過程の展開	精神	統合失調症 気分障害(双極 性障害、関連障 害群、抑うつ障害 群) 神 経性障害、スト レス関連障害、身 体表現性障 行動症候群 パーソナリティ障 害 アル コール依存、 薬物依存 精神発達障害群	身体療法(薬物 療法、電気ショッ ク療法) 行動・活動療法 (SST、作業療 法、レクリエーシ ョン療法、芸術療 法) 環 境・社会療法 症 状への対処療法	血液検査 体重測定	コミュニケーション 観察 生きづらさの理解 地域で生活する対象 者の周囲の環境の理 解 社会資源の活用	精神に障害を抱えながら地域で生活をされている 方の実例の例を用い看護の展開を行う。 アセスメント・関連図・計画・指導者とのカンファレ ンス・計画の修正						解剖生理学 薬理学 病態治療論 関係法規 医療倫 基礎看護学概論 基礎看護学援助 論母性看護学概 論 小児看護学 概論	
精神看護学実習 (3)単位 (90)時間 2年	様々な場所 で精神に障 害を抱えなが ら生活をされ ている対象に とっての生活 を支える支援 について考 え、実施をす ることその 人らしい生活 の実際につ いて学ぶ	精神を障がいされている対 象の全体像を理解する。 精神を障害を抱える人への 日常生活、対人関係形成に 必要な援助を考える。 行動制限のある対象の尊厳 を守りながら行われている実 際を見る 障害を抱えながら地域で生 活している対象の全体像を 理解する。 社会復帰への支援の実際を 理解する。	精神	統合失調症 気分障害(双極 性障害、関連障 害群、抑うつ障害 群) 神 経性障害、スト レス関連障害、身 体表現性障 行動症候群 パーソナリティ障 害 アル コール依存、 薬物依存 精神発達障害群	身体療法(薬物 療法、電気ショッ ク療法) 精神療法(精神 分析療法、森田 療法、認知行動療法・ 行動・活動療法 (SST、作業療法 レクリエーション 療法、芸術療法) リエゾン精神医学	血液検査 X線検査 CT検査 MRI 脳波 心理検査(人格 検査、YG性格検 査、記銘力検査) 体重測定 心電図検査	環境整備 衣類の洗濯 膀胱留置カテーテル・ 排泄介助 入浴介助・清拭 他者とのかわりへの 援助 隔離 身体拘束 SST 治療的コミュニケーショ ン	プロセスレコード アセスメント 関連図 計画立案・実施・ 修正 No.1,14,20,52,57, 64,65,70,71	統合失調症 パーソナリティ障害 双極性障害 発達障害 知的障害 発達遅延		プロジェク ト学習の フェーズに 則って行う	呼吸機能障害 循環動態の異常 意識状態 耐糖能異常 認知機能障害 運動器機能障害 消化器機能障害 排泄機能障害 高次脳機能障害 脳神経障害	解剖生理学 薬理学 病態治療論 関係法規 医療倫理 基礎看護学概論 基礎看護学援助 論母性看護学概 論 小児看護学 概論		

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ず

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
精神看護学概論	1	30	1年		30	100%	平野雅樹

目的・目標 人のこころの働きや、問題を正しく理解し、それらの理解を看護の場面で適切に活用できる基礎的な知識を養う。 1 精神に健康問題をもつ対象への援助に、必要な基礎的知識を学ぶ 2 精神医療・看護の変遷を知り、社会の現状をふまえて、看護師が担う役割と機能を学ぶ					
--	--	--	--	--	--

授業内容・授業方法					
回数	内容	方法	回数	内容	方法
1	精神看護学とは		9	精神障害の診断と分類	
2	精神看護学の考え方の倫理		10	薬物療法について	
3	精神科での入院と入院形態について		11	精神医療の歴史	
4	心のしくみ 精神分析と精神力道理論		12	精神看護について考える	
5	防衛機制		13	精神看護に関わる法律と	
6	ストレスと危機、エリクソンの発達理論			日本精神医療の課題ビジョン	
7	精神を病むということ ①		14	精神障害者のとらえ方	
8	精神を病むということ ②			ICF、BPSモデル、	
				オレム・アンダーウッド理論	
			15	精神障害者のとらえ方	
				オレム・アンダーウッド理論(実践編)	

技術到達度(技術項目)					
--------------------	--	--	--	--	--

評価方法					
筆記試験 レポート					

教科書・参考書など					
精神看護の基礎 医学書院					
精神看護の展開 医学書院					
精神保健福祉 医学書院					

備考・履修条件など					
------------------	--	--	--	--	--

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
精神看護学援助論Ⅰ	1	30	1年	精神医療の実際	30	100%	楞田尚子

目的・目標 精神に障害を抱える方の理解のために医学的知識を学ぶ 1 精神に障害を抱える対象の疾患・現症を知る 2 精神に障害を抱える対象の症状や診断に必要な検査・治療について学ぶ					
---	--	--	--	--	--

授業内容・授業方法					
回数	内容	方法	回数	内容	方法
1	精神看護学で学ぶこと・精神保健の考え方	講義	8	精神科倫理綱領	講義
2	心の働きと人格の形成・精神疾患のあらわれ方・精神疾患について(統合失調症など)		9	入院治療の意味	
3	精神疾患の現れ方・精神疾患について(気分障害・うつ病・パニック障害)		10	身体をケアする	
4	精神疾患の現れ方・精神疾患について(てんかん・発達障害・摂食障害)		11	安全を守る	
5	精神疾患の現れ方・精神疾患について(認知症・睡眠障害)		12	災害時のメンタルヘルス	
6	精神疾患の現れ方・精神疾患について(依存症・児童思春期)		13	看護における感情労働	
7	精神科での治療 社会の中の精神障害・精神保健福祉法について		14	ネガティブ・ケイパビリティ	
			15	精神科看護で大切なこと	

技術到達度(技術項目)					
--------------------	--	--	--	--	--

評価方法 筆記試験					
---------------------	--	--	--	--	--

教科書・参考書など 精神看護の基礎 医学書院 精神看護の展開 医学書院					
--	--	--	--	--	--

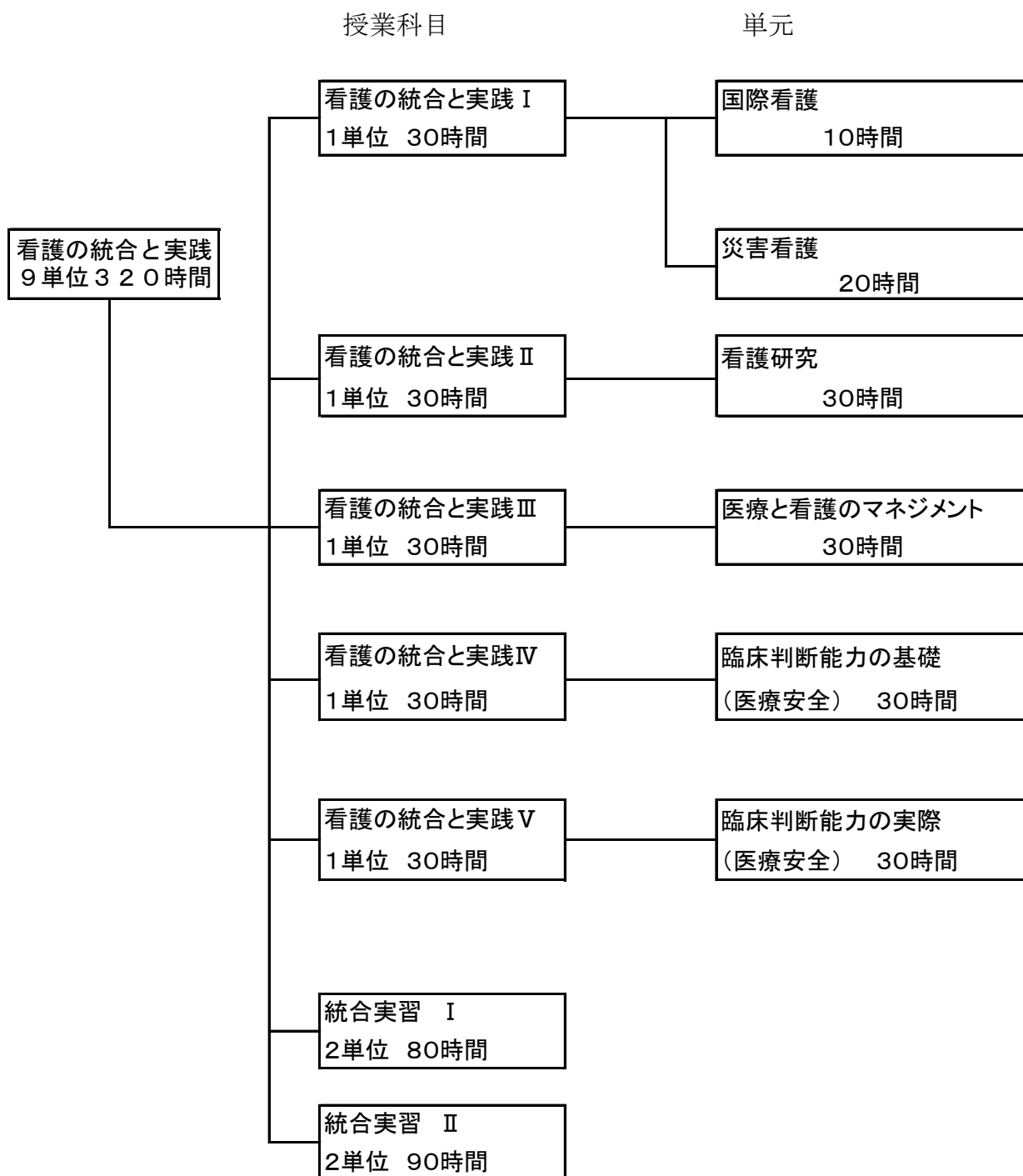
備考・履修条件など					
------------------	--	--	--	--	--

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
精神看護学援助論Ⅱ	1	30	1年	精神に障がいを抱える人へのヘルスアセスメント	30	100%	里脇雄治 本田 豊
目的・目標							
精神に障害を抱える対象の生活を支えるために必要なヘルスアセスメントについての知識を養う							
1 精神に障害を抱えて生活をする対象の理解のためにヘルスアセスメントが必要な理由を知る 2 精神に障がいを抱える方の理解のために必要なヘルスアセスメントの基礎を学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1～15	精神を病むことと生きること ヘルスアセスメントとは 統合失調症を抱える対象の看護 気分障害(双極性障害および関連障害群、抑うつ障害群を抱える対象の看護 神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害を抱える対象の看護 生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群を抱える対象の看護 パーソナリティ障害を抱える対象の看護		講義 演習		精神作用物質使用における精神および行動の障害を抱える対象の看護 てんかんを抱える対象の看護 神経発達症候群を抱える対象の看護 心身症を抱える対象の看護 隔離拘束となった対象の看護 水中毒となった対象の看護 悪性症候群となった対象の看護 ※ 講義内容は、前後することがあります。		
技術到達度(技術項目)							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 精神看護の基礎 医学書院 精神看護の展開 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
精神看護学援助論Ⅲ	1	30	2年	障がいを抱える対象の生活を支える看護	30	100%	加藤有希子
目的・目標 精神に障がいを抱える人が、地域社会でどのような支援を受け、症状をコントロールしながら、どのように生活しているかを理解する。 1 精神に障がいを抱える対象の人物像、病の軌跡、家族関係など含めた全体像をICFを用いて捉える。捉える。 2 精神に障がいを抱える対象が現実の問題として困っていることや生きにくさ、その人らしく生活していくためにどのような支援が必要かを理解する 3 対象者との関わりがどのような影響を与えるかをプロセスレコードを用いて振り返ることができる。							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	授業の進め方について 事例を用いてICF理解・活用	講義	7	事例③ストレス関連障害	GW		
2	おもな精神疾患の分類・特徴・治療について復習	講義	8	事例④発達障害	GW		
3	小テスト(疾患) 法律・社会制度・地域包括など 多職種・チーム医療・訪問看護について復習	講義	9	事例⑤依存症	GW		
4	小テスト(法制度) 事例①統合失調症患者 病態理解・ICFで全体像をつかむ 一部グループワーク	講義 GW	10	事例⑥摂食障害	GW		
5	グループワーク 事例①対象者への看護について討議 事例①続き 支援について討議 小テスト(疾患について)	GW	11	事例⑦水中毒	GW		
6	グループワーク 事例②うつ病患者 病態理解・ICF 支援について討議 小テスト(疾患について)	GW	12	事例から1場面選びコミュニケーション・関わり方について準備	GW		
			13	1事例の関わり方について演習実演 プロセスレコード記入	GW		
			14	プレゼンテーション	GW		
			15	まとめ	GW		
技術到達度(技術項目)							
評価方法 パフォーマンス課題を用いたルーブリック評価、提出物、小テスト							
教科書・参考書など 精神看護の基礎 医学書院 精神看護の展開 医学書院							
備考・履修条件など							

[illegible]

看護の統合と実践の構成



看護の統合と実践の考え方

1. 教材観

看護を取り巻く環境は、慢性疾患の増加、急激に進む少子高齢化、医療技術の進歩により複雑化している。病院での医療は保険制度改定から入院日数を可能な限り短期化する傾向にあり、支援を必要としながら早期に地域へ戻ることになる。その時々々の健康状態に応じて看護の「場」「役割」「ケア提供者」が短時間で変化することが考えられ、その変化により生じる様々な課題を理解し、対象が変化に対応できるよう支援できる力が必要とされる。また「地域」は対象特性を超えた場でもあり、生命・生活を守るために多職種との協働も不可欠となる。

このように看護業務が複雑・多様化する中、健康に関心を持ち豊かに生活していくことが当たり前となった今、人々が求める医療の安全性への意識は非常に高く、変化する社会環境を受け止め「地域」で暮らす患者の視点に立った、安全で質の高い看護の提供が求められている。それ故、臨床現場が卒業時に求める臨床実践に適応できる能力を備えた看護師の育成が教育現場に求められている。

的確な看護判断と最適な看護技術の提供には、技術の習得とともに臨床判断能力の育成が不可欠であり、課題となっている。そのため統合分野ではより臨床に近い思考で看護を考え発展させていく必要がある。

科目の構成は講義として5単位150時間とし、看護の統合と実践Ⅰで、看護の場の広がりや緊急性に対応できる基礎的な看護実践や与えられ保護された環境を越え、文化・価値観の異なる対象の要求が何かを理解する。また予測の範囲を超えた災害発生時の看護について学び災害時の変化に対応できる看護師の役割を理解する。看護の統合と実践Ⅱでは、実践した看護をケーススタディとしてまとめ、研究するプロセスを通して看護研究の必要性に気づき、自己の看護観を確立する。看護の統合と実践Ⅲでは医療と看護に必要な基礎知識を学び看護管理の対象とその実際を知る医療と看護のマネジメントを学ぶ。看護の統合と実践Ⅳでは、ひとはなぜエラーを起こすのか臨床判断の基礎として医療安全の基礎を学び、医療事故の事例を基に事故原因や背景から臨床場面を想起し、事故防止に繋がるリスクマネジメント能力を養う。また、複数受け持ちとなる夜間の看護や統合実習時の多重課題における優先度判断の基準や根拠を、複数事例の展開の中で理解する。看護の統合と実践Ⅴでは、Ⅳで学習する医療安全へのリスクマネジメント力を基に、複数事例に基づく実践の中で看護師教育として到達すべき看護技術項目に関し、根拠を踏まえた確で安全な実施ができるよう、演習に取り組む内容とした。

臨地実習では、4単位170時間とし、統合実習Ⅰでは各健康の段階にあるその人の願いや価値観、健康障害の特徴を踏まえ、その人をチームで支える看護の基礎的能力を養うための実践を行う。統合実習Ⅱでは保健医療チームの一員である看護師の役割を踏まえ、複数患者のその人らしい生活を支えるために、医療安全を意識しながら看護をマネジメントできる力を養うための実践内容とした。

2. 学生観

学生はこの2年間、常に「看護とは何か」を考え深め、ベースとなる各専門基礎科目の知識に専門科目の学びを重ね学習を統合して考え、理解することが少しずつできるようになっている。しかし各科目の目標を意識し、事前学習・事後学習を習慣化して自ら学び深めている学生は少数であり、臨床判断能力に必要とされる基礎的知識への学習姿勢も受け身的である。2年次臨地実習の成人・老年Ⅰ、Ⅱの経験を通し、自らの専門基礎知識の曖昧さや必要とされる観察力・アセスメント力・コミュニケーション力の乏しさを痛感した学生は、対象への看護を実践するために必要な学習動機が高まっている。座学と臨地との関連性を実感できるこの時期、看護観の広がり期待できる。興味関心が増大しているときの学生の吸収力や統合力はとても高い。同時に具体的な将来像がイメージ化され、なりたい看護師像の実現に向けての不安も生じてくる。連続する臨地実習を経ながら、卒業まで看護師としての自己像に自問自答を繰り返す段階でもある。

チームで対象を支える看護実践の中で求められるメンバーシップなどのコミュニケーションでは、マナー、自分主体に考えがちな行動や周囲への配慮、状況をイメージする力など社会性の未熟さが否めない。社会人経験のある学生でも、これまでの人生役割から周囲への配慮のつもりで自己判断し、報告相談なく行動してしまう姿が見られることもある。このような場面で原因を振り返る時、周囲に責任転嫁して自己解決してしまっている現状も見受けられる。今後、医療チームの一員として対象をチームで支え看護師の役割を果たせる力の基礎を養うためにも、看護師になるものの自覚と責任を持ちメタ認知力を高め、自己を客観的に俯瞰できるよう行動変容していく必要がある。また、事象を感覚的にはとらえられるが、科学的思考で論理的にとらえる力の弱さや物事を計画立て実行することも苦手であるため、学習を掘り下げ習得していく事が難しい。1年次より取り組んでいるプロジェクト学習により、目標に向け計画的・科学的・論理的に問題解決していく能力は日々追求されており、自己の学びをまとめ

るなどの学習は期待できる。対象への看護を考えながら専門職として看護師とはいかなるものか見学や実践、講義での学習を通して学び、なりたい看護師像を目指し、臨床の場に立つ自分の在り方や自己の看護観を模索している段階である。

3. 指導観

看護基礎能力の育成と臨床現場との乖離を防ぐために設定された科目であり、既習の基礎分野・専門基礎分野・専門分野を統合できるよう学習目標を理解したうえで指導しなければならず、指導者の力量が問われる分野であるといえる。

近年、医療の発展と高度化、進みゆく高齢社会の中で、看護職に求められる専門的能力は増すばかりである。平均在院日数の短縮や高齢者に多いせん妄や徘徊、転倒などは業務の煩雑化につながり、看護の環境は日々の多忙な業務をいかに安全かつ効率的にそして最適に行えるのか、他職種との協働や連携、情報共有を行い、チームの一員として目標に向かうため、どのように活動できるかが個々の責務となっている。

看護基礎教育の最終段階として設定した看護の統合と実践のⅣ・Ⅴにおいて、一つの看護技術を患者の容態に合わせ安全に行うことは実践の少ない学生の現状では非常に難しいところであるが、看護師として現場にたち、多重課題と時間管理のなか複数患者への看護実践の難しさにも立ち向かえるよう学習を進めていく。

チームで支える看護の意味や優先度の判断には効率だけではなく、確かな技術と根拠、対象の今後の生活を見据えた看護があり、これらは情報共有しながら共に評価し、考えていくものであることを理解してもらいたい。

確かな看護技術には、医療安全の視点での知識と疾患やその人らしさを含めた対象の理解が必要である。演習後の振り返りを丁寧にグループで共有することで、臨床における看護の意味、自己の成長に必要な力について考えられるよう設定する。臨床の看護場面においては、夜間の情報から現状に変化が生じていたり、急変、検査の遅れなどで計画変更を余儀なくされることも多い。これらにも対応していけるよう状況設定場面を考え演習に臨む。少人数になる夜勤業務では多重課題の優先順位を判断し、スケジュール管理、リスク予測の視点を持ち対応できるよう、講義で学習の上、演習の中に組み込んでいく。看護技術の実際も点滴、血糖測定、バルン挿入、吸引、輸血管理、浣腸、感染予防対策などの正確な看護技術の実践に取り組む。

看護実践能力(臨床判断能力)は、講義を受講するだけでは応用能力を育成することは難しい。解決策を導くことよりも、看護実践としてどう考えるか、何を根拠に実践をするかを判断する力を習得できるよう、常に発問を繰り返す授業形態やグループワークでの検討を主とする。臨地実習においても、臨床側に対して、学習目標や指導上の留意点を十分に説明し理解してもらえよう取り計らう必要がある。臨床判断能力の育成や多職種の連携、マネジメント能力など学生個々での発展は困難が予測される。目まぐるしく変化する医療現場の中で、看護チームの一員として対象を中心とした看護実践に学生チームが取り組み学べる環境を、提供していく必要がある。

目的

専門職業人としての意識を持ち、看護に求められている社会的ニーズを理解し、適切な看護を提供できるよう既習の知識と技術を統合して実践できる能力を養う

目標

1. 異文化を理解し、国際看護の必要性和国際協力に必要とされる能力について学ぶ
2. 災害看護の基礎的知識を学び、必要な技術の習得および被災者への援助について考える
3. 看護をマネジメントできる基礎的能力を養い看護業務を行う一員としての役割や責任について理解する
4. 医療チームの中での看護師の役割を学び看護チームのメンバーシップおよびリーダーシップを理解する。
5. 医療安全の基礎的知識を学び、事故分析の方法を理解する
6. 既習の知識・技術を統合し臨床現場で看護実践できる基礎的能力を身に付ける
7. 看護実践を振り返り、理論的根拠を明確にしながら、自己の看護観を確立できる
8. 看護基礎教育で学んだ知識・技術・態度を統合し、対象に必要な看護が何かを判断でき、倫理観に基づいた援助を実施できる能力を身につける

看護の統合と実践のマトリックス

科目		主な教授内容	機能障害 (系統別)	主要症状	治療処置	検査	援助技術	演習項目	看護過程 (展開)	ポートフォリオ	プロジェクト	関連理論・その他	フィジカル	関連科目
看護と統合の実践Ⅰ (1)単位 (30)時間 3年	国際看護/ 災害看護	国際看護とは何か 国際看護の必要性について 開発途上国の健康問題 世界各国の保健医療の現状と分析 異文化の理解 国際協力に必要なとされる協力 国際機関の動き 開発途上国で必要とされる看護の知識・技術 プライマリヘルスケアと看護職の役割 国際協力活動の実例 災害看護の概念、災害看護とは何か 災害の分類/法律 災害による健康への影響 災害サイクルに沿った看護活動 災害への備えとそのシステム 災害看護ボランティアとの協働 事例によるトリアージの実例と要配慮者 災害看護の実例 災害時の環境調整 日本における災害と広域医療搬送 外傷・熱傷・骨折の応急処置 危機的状態への精神的支援 BLS AED		PTSD ストレス 感染症 食中毒 不眠 二次的障害 廃用症候群 エコノミー症候群 たこつぼ心筋症 コンパートメントシンドローム クラッシュシンドローム 外傷 疼痛 心停止	包帯法 BLS AED		包帯法 感染予防 移乗移送 トリアージ 気管内挿管	心のケア BLS AED トリアージ フィジカルアセスメント N036, 49				災害サイクル 被災者とコミュニティの回復過程 DMAT DPAT JMAT		履修科目全て
看護の統合と実践Ⅱ (1)単位 (30)時間 3年	看護研究 実践した実習を ケーススタディとして まとめ研究する プロセスを通して 以下の内容を学び、 看護研究の必要性 に気づき、自己の 看護観を深めること ができる	看護研究とは 研究の種類と特徴 文献検索 研究計画書 研究における倫理上の問題 ケーススタディ クリティーク 質的・量的研究の違い ケーススタディ抄録作成 研究発表会	受持ちに よって様々	受持ちに よって様々	受持ちに よって様々			文献検索 ケーススタディ収録作成		○		様々な大理論 中範囲理論		履修科目全て
看護の統合と実践Ⅲ (1)単位 (30)時間 3年	医療と看護のマ ネジメント	組織とマネジメント 看護管理とスキル チームマネジメント 看護の質(サービスの質)保証 モチベーション、コンフリクト ストレス、アサーティブコミュニケーション リーダーシップ、コーチング キャリア設計・生涯学習 業務遂行のマネジメント						アサーティブコミュニ ケーション						履修科目全て
看護の統合と実践Ⅳ (1)単位 (30)時間 3年	臨床判断能力の 基礎(医療安全)	医療安全の意味と重要性 医療事故・医療過誤 アクシデント・インシデント・ヒヤリハット 看護職の法的規定/国の医療安全の取り組み リスクマネジメント・ヒューマンエラー 事例による安全教育・要因分析 KYT(危険予知トレーニング) 看護師に多い事故事例から医療安全の 重要性と具体的方法を学ぶ 医療従事者の安全を脅かすリスクと対策 看護師のチームワークとコミュニケーション 多職種とのチームワークとコミュニケーション 複数患者の情報管理/スケジュールの立案 多重課題の危険性	呼吸機能 循環機能 消化機能 内分泌・代謝 脳・神経機能 運動器 生体防御機能 排泄機能 排泄機能 血液・免疫系	呼吸器障害 高次機能障害 意識障害 運動障害 廃用症候群 高血糖・低血糖 排泄障害 骨髄抑制 易感染 皮膚病変 嚥下障害	薬物療法 輸血療法 放射線療法 放射線療法 酸素吸入 化学療法 経管栄養法 膀胱留置カ テーテル 浣腸	レントゲン検査 血液検査 放射線検査 CT検査 超音波検査			○		ニード論 (ハンダーソン) KYT(危険予知ト レーニング) 複数事例の看護展開 複数患者の関連図 1日の工程表(複数) 優先順位の決定 夜勤時工程表		履修科目全て	
看護の統合と実践Ⅴ (1)単位 (30)時間 3年	臨床判断能力の 実際(医療安全)	医療安全の意味と重要性/医療事故・医療 アクシデント・インシデント・ヒヤリハット ヒューマンエラー/リスクマネジメント 看護師に多い事故事例から医療安全の 重要性と具体的方法を学ぶ(実践) 医療安全の視点が重要となる看護技術の ＊処置、援助技術、演習、NO、参照 看護師のチームワークとコミュニケーション 報告・相談・調整の実際 多重課題での優先度の考え方・時間管 理と実際	呼吸機能 循環機能 消化機能 内分泌・代謝 脳・神経機能 運動器 生体防御機能 排泄機能 排泄機能 血液・免疫系	呼吸器障害 高次機能障害 意識障害 運動障害 廃用症候群 高血糖・低血糖 排泄障害 骨髄抑制 易感染 皮膚病変 嚥下障害	薬物療法 輸血療法 放射線療法 放射線療法 化学療法 経管栄養法 酸素吸入 膀胱留置カ テーテル 浣腸	レントゲン検査 血液検査 放射線検査 CT検査 超音波検査	点滴管理 感染予防 移乗移送 血糖測定	No 5.9.10.33.41.43.4 4.46.54.57.58.60. 62.63.64.65.66.67 .68	○			ニード論 (ハンダーソン) フィジカルイ グザミネー ション		履修科目全て
統合実習Ⅰ (2)単位 (80)時間 3年	各健康の段階に あるその人の願 いや価値観、健 康障害の特徴を 踏まえ、その人 をチームで支え る看護の基礎的 能力を養う	対象を中心とした医療、看護チームの役 割を意識し、学生チーム、看護チームと の調整を図り、リーダーシップ・メンバ ーシップを高めながら、その人を支える看 護実践にチームと共に臨む (受け持ち対象は1名、ビジョンゴールを 設定したプロジェクト学習)	受持ちに よって様々	受持ちに よって様々	手術療法 食事療法 薬物療法 食事療法 運動療法 心臓リハビリ	放射線 内視鏡 超音波 心電図 血液検査 尿検査 喀痰検査	No.1.3.4.7.8.13.14.15.16.17.19.20.2 1.22.23.24.25.26.29.44.50.52.57.63. 64.65.69.70.71	○	○	○	ニード論 (ハンダーソン)	フィジカルイ グザミネー ション	履修科目全て	
統合実習Ⅱ (2)単位 (90)時間 3年	保健医療チーム の一員である看 護師の役割を踏 まえ、複数患者 のその人らしい 生活をチームで 支えるために、医 療安全を意識し ながら看護をマ ネジメントできる 力を養う	医療安全における看護マネジメントの重 要性 臨床実践の中で状況判断するための根 拠を踏まえ優先順位の判断要素を考え 看護実践に繋げる 保健医療チームの一員として看護師に必 要とされる看護を意識する 他職種とも連携しながら学生チームで複 数患者のその人らしい生活に向けた看護 の実践にチームで臨む(受け持ち対象は 2名、ビジョンゴールを設定したプロジェ クト学習)	受持ちに よって様々	受持ちに よって様々	手術療法 食事療法 薬物療法 食事療法 運動療法 心臓リハビリ	放射線 内視鏡 超音波 心電図 血液検査 尿検査 喀痰検査	No.1.3.4.7.8.13.14.15.16.17.19.20.2 1.22.23.24.25.26.29.44.50.52.57.63. 64.65.69.70.71	○	○	○	ニード論 (ハンダーソン)	フィジカルイ グザミネー ション	履修科目全て	

※演習項目の番号は、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の番号に準ずる

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護の統合と実践Ⅰ	1	30	3年	国際看護	10	40%	中口尚始
				災害看護	20	60%	藤永純一
学習目的・目標 国際看護の概念および国際看護に必要な基礎的知識を学習する。また災害看護の概念について理解し、災害発生時の援助の留意点や看護について学ぶ 1 国際看護の概念について理解できる 2 世界各国の保健医療の現状と分析から異文化の理解に努める 3 国際協力に必要な組織と看護職の役割について学ぶ 4 看護における現在の動向について学ぶ 5 災害看護の概念について理解できる 6 災害サイクルに沿った看護活動の実践について学ぶ 7 トリアージの実践について学ぶ 8 災害の分類に応じた看護の実践について学ぶ 9 BLS・AEDについて学ぶ							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1	「国際看護の必要性と課題」 ＊グローバル化に伴う国際看護の必要性と、現状と課題 ＋国際看護学の概念 ＋国際看護学の対象者とは ＋健康に関する世界の現状と課題		講義	6～9	災害看護 災害看護の概念、災害看護とは何か 災害の分類 災害による健康への影響 災害サイクルに沿った看護活動 災害への備えとそのシステム 災害を支援する医療従事者の精神的ケア		講義
2	「国際保健の変遷と取り組み」 ＊プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション ＊ミレニアム開発目標 ＊持続可能な開発目標 ＊人間の安全保障など			10～14	災害看護の実践 災害時の法律と災害各期の看護 応急手当と搬送の技術(ファーストエイド) 外傷・熱傷・骨折の応急処置とアセスメント 危機的状態への精神的支援 亜急性期の環境調整と二次障害への予見 トリアージ(start法)の実践と二次トリアージ		講義 演習 講義 講義 演習
3	「保健医療分野における国際機関と日本の国際協力の現状」 ＊国際協力と看護活動						
4	「世界・開発途上国における健康問題の現状・課題、そしてその背景にある国の社会・文化事情」			15	BLS(一次救命処置) AED		演習 演習
5	「国際協力活動の実践 諸外国の国事情と保健医療問題」 ～社会・異文化を理解しての国際協力とは～ (グループ演習) 「国家試験へのまとめ」		講義 GW				
看護師教育の技術項目 No36. 49							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 災害看護学・国際看護学 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
看護の統合と実践Ⅱ	1	30	3年	看護研究	30	100%	丸野 美生
学習目的・目標							
目的 実践した看護をケーススタディとしてまとめ、研究するプロセスを学ぶことができる。 看護研究の必要性に気づき、自己の看護観を深めることができる。							
目標							
1. 看護研究の意義・目的や研究の種類・特徴を理解する。 2. 看護研究のプロセスに必要な知識及び、研究に関連した倫理的な課題について学ぶ。 3. 研究計画書の作成し、分析方法、研究目的を具体的に表現し他人に伝えることができる。 4. 論文の作成を通して、事象を論理的に説明できる。 5. クリティークについて学び、自身のケーススタディを客観的にとらえて分析を深めることができる。 6. なりたい看護師像、自己の課題や目標が明確化し、論文の形式で表現できる。							
授業内容・授業方法							
回数	内容		方法	回数	内容		方法
1.2	看護研究とは 研究における倫理上の問題 ヘルシンキ宣言 研究の種類と特徴 質的・量的研究・混合研究について ケーススタディーの進め方 クリティークとは		講義	5	論文の書き方 研究目的・方法・倫理的配慮 看護の実際 考察 結果		講義 演習
	文献検索 文献検索方法 先行研究を検索する 引用・参考文献の書き方 (文献リストを作成し担当教員へ提出)		講義 演習	6.7	ケーススタディーの執筆 (個人指導含む)		演習
3	研究計画書の書き方 研究テーマ 先行研究で何が明らかになっているのか 研究目的、何を明らかにしたいのか 分析方法		講義 演習	8	中間報告会(担当教員) 研究の背景と目的を説明する 事例と分析方法 論文の進捗と今後の方向性 論文の進捗と今後の方向性 現在課題となっていること (中間発表終了後、研究計画書を提出)		演習
4	研究計画書を作成する (担当教員へ提出)		演習	9~11	ケーススタディーの執筆 (個人指導含む)		演習
				12	発表資料・抄録作成		演習
				13~15	看護研究発表会		
看護師教育の技術項目							
評価方法							
研究論文をルーブリックを用いて評価する							
教科書・参考書など							
・看護学概論：医学書院 ・基礎看護技術Ⅰ：医学書院 ・別巻看護情報学：医学書院 ・看護研究：医学書院							
備考・履修条件など							
入学年度 学校のしおり専修条件一覧参照							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価割合	担当者
看護の統合と実践Ⅲ	1	30	3年	医療と看護のマネジメント	30	100%	高須久美子 和栗 裕子
学習目的・目標 医療と看護に必要な基礎知識を学び、看護実践者として患者の生活を守る専門職としてのマネジメント力を身に付ける 1 医療チームにおける看護師の役割を理解する 2 組織とマネジメントについて理解する 3 看護職自身のマネジメントについて理解する 4 医療チームにける看護マネジメントについて理解する 5 看護師に必要な情報のマネジメントについて理解する 6 地域医療におけるマネジメントについて理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1～4	看護とマネジメント 医療と経済 看護に関わる医療・介護制度 看護管理の基本となるもの 看護におけるマネジメント 看護のマネジメントが行われる場	講義	11・12	看護職のキャリアマネジメント 社会人基礎力 キャリアとキャリア形成 タイムマネジメント セルフマネジメントのスキル 人とかかわるためのスキル アサーション・コンフリクト 集団に働きかけるスキル	講義 演習		
5～7	看護ケアのマネジメント 看護ケアのマネジメントと看護職の機能 患者の権利の尊重 人・モノ・情報・コストの管理 安全管理 医療事故対策 チーム医療	講義	13・14	看護サービスのマネジメント 看護サービスのマネジメント 組織目的達成のマネジメント 看護サービス提供のしくみづくり マネジメントに必要な知識と技術 リーダーシップとマネジメント 組織の調整 組織におけるリスクマネジメント サービスの評価			
8～10	業務遂行のためのマネジメント 看護業務 看護基準と看護手順 クリティカルパス 情報の活用 日常業務のマネジメント		15	まとめ			
看護師教育の技術項目							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 看護学概論 医学書院 看護管理 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護の統合と実践Ⅳ	1	30	3年	臨床判断能力 の 基礎 (医療安全)	30	100%	川口なぎさ
学習目的・目標 人がなぜ間違いを起こすのかを理解した上で、医療安全を学ぶことの意義を考える。事故防止の考え方を学び、複数患者の状況判断を適切に行い、問題に対して優先度を明確にしながら安全な看護の実践を学ぶ 1 医療安全を学ぶ意味とその重要性について説明できる 2 医療・看護における情報の重要性を理解する 3 医療安全における看護マネジメントの重要性を理解する 4 看護実践におけるヒューマンエラー防止のための課題を理解する 5 チーム医療における看護マネジメントを理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1・2	人はなぜ間違いを起こすのか ヒューマンエラー 脳の情報処理過程とエラー 意識状態の変動と医療安全の意義 人間の3つの行動モデルと医療安全 看護職を選ぶことの重さと安全努力の責務	講義	6～14	複数患者の安全な看護を目指したチーム活動 業務遂行のためのためのマネジメント 複数患者理解の準備 複数患者の情報管理とアセスメント 全体像把握と優先順位について 複数患者の看護計画立案 複数受け持ちの看護実践 1日のスケジュールの立て方と業務時間の管理 多重課題への対処 時間管理と情報共有 看護の継続と評価	講義 演習		
3・4	医療安全と看護の理念 医療安全の意味と重要性 看護職の法規定と医療安全 医療安全のへの取り組みと医療の質の評価 リスクマネジメント 看護師のチームワークとコミュニケーション 多職種とのチームワークとコミュニケーション	講義 演習	15	まとめ			
5	KYT(危険予知トレーニング)	演習					
看護師教育の技術項目							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など 看護学概論 医学書院 医療安全 医学書院							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	单元名	時間	評価割合	担当者
看護の統合と実践Ⅴ	1	30	3年	臨床判断能力の 実際(医療安全)	30	100%	藤本 一輝
学習目的・目標 多重課題の臨床場面で起こりうるエラーや事故の防止に繋がる安全で適切な看護を実践から学ぶ 1.医療事故やヒヤリハット事例から医療安全対策としての具体的方略や視点、根拠を理解できる 2.医療安全の知識が重要となる看護技術とは何かを理解し、実践できる 3.看護実践におけるヒューマンエラー、事故防止のための優先度、状況判断を多重課題の実践から理解する							
授業内容・授業方法							
回数	内容	方法	回数	内容	方法		
1	”なぜ医療の現場では看護師が関与するヒヤリ・ハットや医療事故がなくなるのか”について看護実践(実習)を通して自分と自分を取り巻く医療(実習)の現場から考えていく 医療安全の意味と重要性について KYTの実践 ペーパータワーチャレンジ	講義 演習	10.11	まとめ 発表視点をまとめ、チームで実践しながら□他者へアウトプットする	演習		
2～9	医療事故やヒヤリ・ハット事例から医療安全のための具体的方略、適切な技術の在り方を実践から学ぶ 患者誤認 薬剤関連 注射薬・内服薬 薬剤管理:静脈内注射薬 針刺し事故 がん化学療法 インスリン製剤 輸液管理・シリンジポンプ・輸液ポンプ 輸血の管理 創傷の処置 人工呼吸器の管理 チューブ・ドレーン・カテーテル管理 膀胱留置カテーテルの挿入と管理 ストーマの交換 浣腸 転倒転落 倫理と安全	演習 講義	12～14	複数患者事例での優先度やチーム看護に必要な技術の実際(看護展開に必要な技術と実践) 報告 相談 調整 計画や記録の意味 優先度の判断と時間管理の実際 学習における自己評価 *医療安全の基礎Ⅳの複数患者事例で場面展開を予定していますが、シラバスの内容は随時変更の可能性があります	講義 演習		
			15	※人工呼吸器 透析室見学 心電図 (病院見学 2コマ)			
看護師教育の技術項目 No.8.9.10.41.43.44.46.54.57.58.60.62.63.64.65.66.67.68.							
評価方法 パフォーマンス評価(パフォーマンス課題＋ルーブリック)							
教科書・参考書など 看護学概論：医学書院 基礎看護技術Ⅱ：医学書院 医療安全:医学書院							
備考・履修条件など 入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

[illegible]

授業科目	単位	時間数	履修時期	单元名	時間	評価割合	担当者
統合実習Ⅱ	2	90	3年			100%	大城祐介
実習目的							
保健医療チームの一員である看護師の役割を踏まえ、複数患者のその人らしい生活をチームで支えるために、医療安全を意識しながら看護をマネジメントできる力を養う							
実習目標							
医療安全における看護マネジメントの重要性が理解できる 臨床実践の中で状況判断するための根拠や優先順位の判断要素を考え看護実践に繋げられる 保健医療チームの一員として看護師に必要なとされる看護を意識し、他職種とも連携しながら学生チームで複数患者のその人らしい生活に向けた看護の実践ができる							
実習内容・実習方法							
実習場所：病院 実習方法： 成人期・老年期にある様々な健康段階にある複数の対象をチームで受け持つ この実習はプロジェクト学習であり、ビジョンとゴールを設定して行う 対象を中心とした医療、看護チームの役割を意識し、学生チーム、看護チームとの調整を図り、リーダーシップ、メンバーシップを高めながら、その人をチームで支える看護を実践する 医療チームの一員としての看護師業務のシャドウイングを行う 看護管理について管理者からのオリエンテーションを受ける							
看護師教育の技術項目							
No.1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,26,27,29,30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,45,46,47,48,49,50,51,52,53,54,55,56,57,58,59,60,61,62,63,64,65,66,67,68,69,70,71							
評価方法							
実習評価表に基づいて評価する							
備考・履修条件など							
入学年度 学校のしおり先修条件一覧参照							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	評価割合	担当者
入学式	なし	2	1年		なし	1年生 担当教員
目的・目標 看護学校という集団に正式に加わったことを実感し、看護学生としての自覚と責任を持ち、学習の動機づけをする。また今後の学生生活へのモチベーションを高める。						
内容 開式の辞 校歌紹介 入学生紹介 学校長式辞 来賓祝辞 祝電披露 在校生歓迎の言葉 入学生誓いの言葉 閉会の辞						
看護師教育の技術項目 なし						
評価方法 なし						
教科書・参考書など 学校のしおり						
備考・履修条件など						

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	評価割合	担当者
オリエンテーション	なし	8	1年		なし	1年生 担当教員
目的 有意義な学生生活を送るため、学校の教育目的・目標・概要を知る						
目標 1. 3年間の効果的な履修の方法について理解できる 2. 専門的学習の取り組み方を理解して、学習計画を立てることができる						
内容						
1 ◆なりたい看護師像について ◆学校のしおり ・学校の沿革、教育理念、目的、目標、DP、CP、APについて 2 ◆学校のしおり つづき ・学則、授業科目概要、成績評価、単位認定 ・教育課程、成績評価、学習方法、授業出席と欠席、試験について など 3 ◆シラバス ◆臨地要項実習について 4 ◆健康管理について ◆プロジェクト学習について						
看護師教育の技術項目 なし						
評価方法 なし						
教科書・参考書など 学校のしおり、シラバス、パーソナルポートフォリオ						
備考・履修条件など						

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
健康診断	なし	2	全学年			なし	各学年 担当教員
目的 学校保健安全法に基づき、毎年1回の定期健康診断である							
目標 1. 看護職者を目指すものとして、常日頃から健康管理を意識し、体調管理を行う 2. 看護学生は臨地実習に向けて、患者と自らの感染対策としてワクチン接種が必要である 臨地実習に挑むまでに必要な抗体を獲得できるように取り組む							
内容							
年1回 学校医による健診 身長・体重測定 視力検査 尿検査 胸部X線撮影 など ※必要時追加で検査を行うことがあります 毎年 季節性感染症に関係するワクチン接種 1年次 水痘、麻疹、風疹、ムンプス、B型肝炎 等のワクチン接種 ※抗体価の結果によります ※その他必要とされた検査、ワクチン接種などが発生する可能性があります							
看護師教育の技術項目 No.50,51							
地域との関連 なし							
評価方法 なし							
教科書・参考書など 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 看護学生のための 実習の前に読む本 医学書院							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	時間	評価割合	担当者
防災訓練	なし	4	全学年			なし	各学年 担当教員
目的 ・災害時における危険を認識し、状況に応じて自らの安全を確認する行動がとれる ・避難誘導訓練・応急救護訓練・救助訓練のほか、防護訓練や安否確認訓練災害時に看護師の役割についてイメージができる							
目標 ・災害時に自ら安全を守る行動がとれる ・学校内での避難経路に沿って冷静に避難ができる ・災害時に学生の安否確認ができ、報告ができる ・応急処置、災害看護の学びを生かし、守られる側から患者を守る側へのイメージができる ・高度災害時に臨地における看護師の役割が考えられる							
内容							
<学校全体> 災害訓練時 1.自らの安全を確保し、指示に従って冷静に避難ができる 2.学生間で安否確認ができ、担任に報告ができる 3.1,2,3年生の縦割りのグループで防災訓練を振りかえり、実際の発生時にスムーズに避難ができる 4.消火器の使い方を知る							
<学年別> 1年生 自己防衛と基本知識 1.校内の防災設備を知る ・避難経路、避難場所を確認 ・避難時の安否確認し報告する 手順がわかる							
2年生 応急処置と災害時の搬送 1.応急処置の方法、傷病者の災害時の搬送について学ぶ ・止血・包帯法 三角巾での固定 ・布などを用いた移動・搬送							
3年生 災害時看護師の応用 1.臨床、および高度災害時に患者に優先順位を判断ができ、搬送方法が考えられる ・トリアージ、搬送の順番 ・災害時の初期行動 ・アクションカード、指示や報告方法							
看護師教育の技術項目 18,47,48,49,65,70,71							
地域との関連 医学書院：救急看護学 第1章災害医療							
評価方法 なし							
教科書・参考書など 医学書院：基礎看護学、救急看護学、医療安全 基礎・臨床看護技術 国土交通省：ハザードマップ www.mhlw.go.jp > content							
備考・履修条件など 在籍している学生全員							

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
看護の日	なし	2 4 2	1年 2年 3年			なし	各学年 担当教員
目的 看護の対象は全人であり、看護師を目指すものとして看護の心を育む取り組みである 身近な地域で生活している人の健康増進を考え、寄り添い、支える看護を理解する							
目標 各学年が学んで得た知識や技術を看護活動を通して看護の心、寄り添い、支える看護とはを考える							
内容							
1. 学生、周辺地域に暮らす人々に対して、提供できる看護活動を学年で考え準備する 準備期間は各学年の時間割に準ずる 2. 社会復帰施設の出店販売 焼菓子・パン等の販売							
地域との関連 社会復帰施設 就労継続支援事業B型 など							
評価方法 なし							
教科書・参考書など 各自が必要と思う参考書							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	評価割合	担当者
ボランティア活動	なし	4	1年		なし	1年生 担当教員
学習目的・目標 ボランティア活動に参加している対象を支える多職種の方、それを学ぶ学生と関わり、多職種の考え方や学んでいることを知る						
内容 プロジェクト学習で行います 1 準備、ビジョン・ゴール、計画のフェーズ （課題を発見する、戦略的に計画する目標を設定する） 2 情報・解決策のフェーズ （情報を見極める・発想する） ……実際のボランティア活動 3 制作のフェーズ （わかりやすく表現・プレゼン準備） 4 プレゼンテーションのフェーズ （発表会・コミュニケーションをする） 5 再構築のフェーズ （一連の活動を振り返って倫理的に表現する） 6 成長確認のフェーズ （準備から再構築までを振り返って、次へのモチベーションを確認する）						
地域との関連 社会福祉協議会、地域のコミュニティ協議会 など						
評価方法 なし						
教科書・参考書など なし						
備考・履修条件など オリエンテーションとプレゼンテーションの発表会への出席をもって、この教科外活動の出席すべき時間の条件を満たすこととする。 出席すべき時間以外の活動は各自で計画を立てて行うこと。						

授業科目	単位	時間数	履修 時期	単元名	時間	評価割合	担当者
終講試験		24 18 10	1年 2年 3年				担当教員
目的 履修内容の理解、修得度を確認するために試験に挑み到達度を確認する							
目標 単位認定要件は60点以上							
内容 各科目で指定された試験内容に準ずる							
地域との関連 なし							
評価方法 筆記試験							
教科書・参考書など ・教科書すべての内容 ・指定された教科書・参考書 ・配布資料 など							
備考・履修条件など							

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	評価割合	担当者
卒業式参列	なし	2	1年 2年 3年		なし	各学年 担当教員
目的・目標 卒業生が専門職業人として歩み出す門出を祝い、将来の自己の卒業時をイメージすることで自覚を高め、学習の取り組みへの動機づけとする。また、送辞を通じて感謝の意を表するとともに、社会人としてのマナーを身に付ける場とする						
内容 開式の辞 校歌斉唱 卒業証書授与 表彰 学校長式辞 来賓祝辞 在校生送辞 卒業生答辞 卒業式歌 閉式の辞 卒業式はフォーマルな場であり、在校生は基準服とし身だしなみを整えて参列する						
看護師教育の技術項目 なし						
評価方法 なし						
教科書・参考書など 学校のしおり						
備考・履修条件など						

授業科目	単位	時間数	履修時期	単元名	評価割合	担当者
卒業式	なし	4	3年		なし	3年生 担当教員
目的・目標						
看護基礎教育を修了し、看護学生という立場から一人の看護師として社会に貢献する決意を固めるとともに、歩んできた看護の道を振り返り、乗り越えた自分を価値化し、共に歩いた周囲との絆を再認識する						
内容						
開式の辞 校歌斉唱 卒業証書授与 表彰 学校長式辞 来賓祝辞 在校生送辞 卒業生答辞 卒業式歌 閉式の辞						
看護師教育の技術項目 なし						
評価方法 なし						
教科書・参考書など 学校のしおり						
備考・履修条件など						